

島内地下式横穴墓群



2001

宮崎県えびの市教育委員会

正誤表

ページ	行	誤	正
18	10・19	f字	橢円形
33	7	3対6孔	2対4孔
174	註(4)	古谷猛	古谷毅
174	註(5)	(2)	(3)

なおP23の鏡板の実測図(4)は接合ミスのため
使用できません。

島内地下式横穴墓群



2001

宮崎県えびの市教育委員会



21号墓 玄室内



21号墓 玄室内



62号墓 玄室内 短甲ほか出土状態



76号墓 玄室内（西から）

鹿児島大学学術調査



81号墓 玄室内

序

宮崎県の南西端に位置するえびの市は、熊本・鹿児島との分岐点にあたり、古くから様々な文化や文物が混在した独特の地域であります。

北は急峻な九州山地、南は雄大で緩やかな霧島山系に開まれた狭長な盆地で、その中央には、県内で唯一西へ流れる川内川が蛇行しています。その支流は大小20を数え、年間降雨量も多く、湧水も豊富です。河岸段丘も発達しており、必然的に段丘面のほとんどは周知の遺跡となっております。

本書は、平成10・11年度に実施した島内地下式横穴墓群の中レーダー探査に伴う一連の調査結果に加え、平成元年度から緊急対応調査してきた地下式横穴墓70基あまりについてまとめたものであります。

島内地下式横穴墓群は、明治38年に短甲と冑が出土して以来古墳群として周知されておりましたが、平成6年の少雨で41基の天井が崩落、緊急調査を断続的に実施したところ、豊富な武具や武器が出土し、遺存状態の良好さ、特に有機物が遺存していることは遺物の原形や構造を復元するうえで貴重な資料となり、地下式横穴墓群を代表する一つの遺跡となりました。

本書が学術資料としてだけでなく、生涯学習や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

なお、調査にあたりご指導・ご協力いただいた関係機関・県文化課、人骨の調査をしていただいた諸先生方、繊維の分析をしていただいた先生、調査に対してご理解・ご協力いただいた地権者および耕作者の方々、さらには発掘作業および整理作業に従事していただいた方々、埋め戻しに必要なシラスを無償で提供していただいた九州パーミス株式会社に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成13年2月

えびの市教育委員会

教育長 松 田 忠 信

例　　言

1. 本書は、平成10・11年度に実施した、島内地下式横穴墓群の地中レーダー探査およびその結果に基づく遺構確認調査の結果報告のほか、平成元年から平成12年度にかけて緊急対応調査を実施した地下式横穴墓ならびに、平成12年度に確認調査をした1号墓についての調査報告書である。
2. 調査はえびの市教育委員会が主体となり、人骨に関しては13・14号墓を長崎大学の松下孝幸先生（現在、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長）に、15号墓以降は鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座IIの諸先生方に現地調査（実測～取り上げ）と分析を委託し、玉稿を賜った。
3. 1号墓については、平成12年8月、県文化課との合同調査を実施し、所在を確認。その結果の発表についても理解をいただき、本書に掲載した。
4. 69～79号墓と88～91号墓は鹿児島大学諸氏の学術調査であるが、本書での総合的理義のために必要なデータをご提供頂き、記して感謝致します。
5. 地中レーダー探査は、マイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所中島研究室に委託した。
6. 本書で報告する地下式横穴墓の殆どは、耕作者から「陥没した」という通報を受けての緊急対応であるため、堅坑の調査に至らない墳墓が多く、玄室側から測定できる範囲での図化にとどめている。
7. 当該分布域では基準点測量をしていないため、挿図の方位は若干の誤差がある。また、断面図のレベル高は、地表を〇とした便宜的なものである。
8. 地下式横穴墓の主軸方位は、堅坑からみた玄室の方向を表わすものとする。
9. 遺構実測図の人骨の番号は取り上げ番号であり、必ずしも埋葬順位ではない。
10. 遺構は、S T：地下式横穴墓、S K：土壤墓、S D：溝状遺構と略し、遺物番号は、13号墓から通し番号にしている。
11. 出土遺物の付着纖維については、東京国立博物館学芸部法隆寺宝物室の澤田むつ代主任調査官に分析して頂き、玉稿を賜った。
12. 遺構および出土遺物の写真撮影は中野が行った。
13. 本書の執筆および編集は、中野が行った。
14. 表紙の写真は21号墓出土の甲冑で、奈良国立文化財研究所で撮影されたものである。

調　　査　組　織

特別調査員

松下孝幸（長崎大学医学部助教授、現在、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長）（13号墓）
小片丘彦（鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座II 教授）（15号墓～）

峰 和治（同） 助教授）（同上）
竹中正巳（同） 助手）（同上）
澤井むつ代（東京国立博物館学芸部法隆寺宝物室主任研究官）（織維）

調査主体 えびの市教育委員会 平成12年度学術調査（1号墓）
教育長 平田郁郎（～平成12年6月） **調査主体** 宮崎県教育庁文化課
松田忠信（平成12年7月～） 松林豊樹
社会教育課長 馬越脇泰二
課長補佐 赤崎正史（～平成11年度）
文化係長 上加世田たず子
庶務 坂本祐子
調査員 中野和浩
同 東真一（66～68号墓）

地中レーダー探査に伴う遺構確認調査 発掘作業員

平成10年度 今村ヒトエ、木原典子、新原敏子、出水一美、松下ヤエ子、星指利江子、本坊福子、山下一男、米倉トシ子

平成11年度 大木場登美子、木原、新屋敷節子、新原、園田菊野、出水、堂園イソ、馬場フミ、宝代トミ子、星指、松下、本坊、山口ミツ、山下、山里マス子、米倉トシ子

整理作業員 川上茂子、新浜脇征子、末継さおり

緊急対応調査に伴う発掘作業・実測補助（平成元年～）

主として 大内田春江、奥松政子、上水流百合子、木原、新屋敷、田中のり子、山水、萩原ケイ子、星指

出土遺物実測（平成元年～）

入木和代、川上茂子、小屋敷真子、田中、鶴田美恵子、松永美佐子

出土遺物実測～トレース（平成11年度）

入木、大田由美子、川上、坂元星奈、新浜脇征子、高橋裕子、徳澄みどり、丸尾さおり、米倉千春

なお、（株）九州バーミスには、埋め戻しに必要なシラスを累計で軽トラック250台分余りも提供して頂いたこと、古城義広氏をはじめとして小畠佐辻・時吉慶次・中津一之・中津安秋・吉留順一諸氏のほか地権者・耕作者の方々には多大なるご協力を頂き、貴重な遺構・遺物を記録にとどめることができたことに対しまして厚くお礼申し上げます。

目 次

第1章. はじめに.....	1
第2章. 遺跡の位置と歴史的環境.....	2
第3章. 島内地下式横穴墓群の沿革.....	4
第4章. 地中レーダー探査.....	11
第5章. 発掘調査	
S T-13.....	25
S T-14.....	25
S T-15.....	25
S T-16.....	26
S T-17.....	26
S T-18.....	26
S T-19.....	26
S T-20.....	29
S T-21.....	31
S T-22.....	33
S T-23.....	34
S T-24.....	37
S T-25.....	46
S T-26.....	46
S T-27.....	47
S T-28.....	57
S T-29.....	57
S T-30.....	57
S T-31.....	57
S T-32.....	61
S T-33.....	62
S T-34.....	63
S T-35.....	64
S T-36.....	68
S T-37.....	68
S T-38.....	70
S T-39.....	70
S T-40.....	72
S T-41.....	78
S T-42.....	82
S T-43.....	82
S T-44.....	83
S T-45.....	83
S T-46.....	84
S T-47.....	85
S T-48.....	85
S T-49.....	87
S T-50.....	88
S T-51.....	90
S T-52.....	90
S T-53.....	95
S T-54.....	95
S T-55.....	95
S T-56.....	95
S T-57.....	96
S T-58.....	96
S T-59.....	96
S T-60.....	97
S T-61.....	98
S T-62.....	104
S T-63.....	105
S T-64.....	106

S T-65	107	S T-85	134
S T-66	112	S T-86	136
S T-67	117	S T-87	136
S T-68	117	S T-88	136
S T-69	121	S T-89	136
S T-70	125	S T-90	136
S T-71~75	125	S T-91	136
S T-76	125	S T-92	139
S T-77	125	S T-93	139
S T-78	125	S T-94	139
S T-79	125	S T-95	140
S T-10	125	S T-96	142
S T-80	126	S T-97	143
S T-81	126	S T-98	145
S T-82	130	S T-99	146
S T-83	132	S T-100	148
S T-84	134	S T-101	150
第6章. 1号墓の調査			153
第7章. 表探および出土須恵器			160
第8章. まとめ			161
第9章. 科学的分析			
第1節. 平成10年度地中レーダー探査			185
第2節. 平成11年度地中レーダー探査			193
第3節. 遺物に付着した繊維について			201
付篇 出土人骨分析			

挿 図 目 次

第1図 古墳時代の集落と墳墓群位置図	1	第6図 3号墓遺構実測図	8
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡位置図	2	第7図 B号墓遺構模式図	9
第3図 県指定古墳位置図	5	第8図 地中レーダー探査位置図	11
第4図 3号墓(1)・A号墓(2)出土三角 板横矧板併用鉢留短甲実測図	5	第9図 地中レーダー探査反応地点位置図	12
第5図 2号墓遺構模式図	7	第10図 1地区(1号墳東～南部)試掘溝 および遺構分布図	13

第11図 1地区（1号墳東～南部）試掘溝 断面層序図	14	実測図(2)	43
第12図 M地区遺構分布図	15	第40図 S T-21出土横矧板鉄留衝角付胄 実測図	44
第13図 M地区断面層序図	16	第41図 S T-21出土遺物実測図(2)、 S T-22出土遺物実測図	45
第14図 S T-03遺構実測図	17	第42図 S T-22遺構実測図	46
第15図 1号墳周辺・L地区遺構分布図	18	第43図 S T-23遺構実測図	47
第16図 1号墳周辺試掘溝層序図	19	第44図 S T-24・25遺構実測図	48
第17図 1号墳周辺（L地区）試掘調査遺 構分布図	20	第45図 S T-23出土遺物実測図(1)	49
第18図 1号墳周辺第6試掘溝東壁層序図	21	第46図 S T-23出土遺物実測図(2)、 S T-24出土遺物実測図(1)	50
第19図 S K-02遺構実測図	21	第47図 S T-23出土骨鑑実測図(1)	51
第20図 S K-02出土遺物実測図	22	第48図 S T-23出土骨鑑実測図(2)	52
第21図 S K-02西肩部出土遺物実測図 (1)	23	第49図 S T-23出土骨鑑実測図(3)、 貝釧実測図	53
第22図 S K-02西肩部出土遺物実測図 (2)	24	第50図 S T-24出土鹿角蓑具実測図、 骨鑑実測図(1)	54
第23図 島内地下式横穴墓群分布図	24	第51図 S T-24出土骨鑑実測図(2)	55
第24図 島内地下式横穴墓群分布図	27・28	第52図 S T-26遺構実測図	56
第25図 S T-13遺構実測図	29	第53図 S T-27・28遺構実測図	58
第26図 S T-14遺構実測図	30	第54図 S T-25～28出土遺物実測図	59
第27図 S T-15遺構実測図	31	第55図 S T-29・30遺構実測図	60
第28図 S T-16遺構実測図	32	第56図 S T-31遺構実測図	61
第29図 S T-17遺構実測図	33	第57図 S T-32遺構実測図	62
第30図 S T-18遺構実測図	34	第58図 S T-33遺構実測図	63
第31図 S T-19遺構実測図	35	第59図 S T-34遺構実測図	64
第32図 S T-13～19出土遺物実測図	36	第60図 S T-29・31・33・34出土遺物 実測図	65
第33図 S T-20遺構実測図	37	第61図 S T-32出土遺物実測図	66
第34図 S T-20出土遺物実測図(1)	38	第62図 S T-35遺構実測図	67
第35図 S T-20出土遺物実測図(2)	39	第63図 S T-36遺構実測図	68
第36図 S T-21遺構実測図	40	第64図 S T-37・38遺構実測図	69
第37図 S T-21出土遺物実測図(1)	41	第65図 S T-39遺構実測図	70
第38図 S T-21出土横矧板鉄留短甲 実測図(1)	42	第66図 S T-40遺構実測図	71
第39図 S T-21出土横矧板鉄留短甲			

第67図	S T-41遺構実測図	72	第96図	S T-59遺構実測図	105
第68図	S T-35・36・39~41出土遺物 実測図	73	第97図	S T-60遺構実測図	106
第69図	S T-35出土貝釧、S T-39出土 骨鏃実測図	74	第98図	S T-61遺構実測図	107
第70図	S T-19・20・23・25・26・41 出土刀剣実測図	75・76	第99図	S T-62遺構実測図	108
第71図	S T-20出土鉄劍の鹿角装具 実測図	77	第100図	S T-58・60~62出土遺物 実測図	109
第72図	S T-42遺構実測図	78	第101図	S T-62出土横矧板銛留短甲 実測図(1)	110
第73図	S T-43・44遺構実測図	79	第102図	S T-62出土横矧板銛留短甲 実測図(2)	111
第74図	S T-45遺構実測図	80	第103図	S T-63遺構実測図	112
第75図	S T-42~45出土遺物実測図	81	第104図	S T-63出土遺物実測図(1)	113
第76図	S T-46遺構実測図	82	第105図	S T-63出土遺物実測図(2)	114
第77図	S T-47遺構実測図	83	第106図	S T-63出土骨鏃実測図(1)	115
第78図	S T-48遺構実測図	84	第107図	S T-63出土骨鏃実測図(2)	116
第79図	S T-49遺構実測図	85	第108図	S T-64遺構実測図	117
第80図	S T-46~49出土遺物実測図	86	第109図	S T-65遺構実測図	118
第81図	S T-50遺構実測図	87	第110図	S T-65出土遺物実測図(1)	119
第82図	S T-51遺構実測図	88	第111図	S T-65出土遺物実測図(2)	120
第83図	S T-50・51出土遺物実測図	89	第112図	S T-66遺構実測図	121
第84図	S T-52遺構実測図	90	第113図	S T-67遺構実測図	122
第85図	S T-53遺構実測図	91	第114図	S T-68遺構実測図	123
第86図	S T-54・55遺構実測図	92	第115図	S T-65出土骨鏃実測図、S T-66 ~68出土遺物実測図	124
第87図	S T-52・55出土骨鏃実測図	93	第116図	S T-81遺構実測図	126
第88図	S T-55出土遺物実測図	94	第117図	S T-81出土遺物実測図	127
第89図	S T-56遺構実測図	97	第118図	S T-81出土横矧板銛留短甲 実測図(1)	128
第90図	S T-57遺構実測図	98	第119図	S T-81出土横矧板銛留短甲 実測図(2)	129
第91図	S T-55・56出土刀剣実測図	99・100	第120図	S T-82遺構実測図	130
第92図	S T-56出土貝釧実測図、鹿角装 具実測図	101	第121図	S T-82出土遺物実測図	131
第93図	S T-56出土遺物実測図	102	第122図	S T-83遺構実測図	132
第94図	S T-56・57出土遺物実測図	103	第123図	S T-83出土遺物実測図	133
第95図	S T-58遺構実測図	104			

第124図 S T-84遺構実測図	134	第141図 1号墓主体部～渡部石材出土 状態および断面層序図	155-156
第125図 S T-85遺構実測図	135	第142図 1号墓玄室内遺構実測図	157
第126図 S T-62・82・83・85出土刀剣 実測図	137-138	第143図 1号墓出土遺物実測図	158
第127図 S T-94遺構実測図	139	第144図 1号墓復元図	159
第128図 S T-95遺構実測図	140	第145図 S T-63玄室内出土遺物 実測図	160
第129図 S T-96遺構実測図	141	第146図 調査地域内出土・表探須志器 実測図	160
第130図 S T-97遺構実測図	142	第147図 島内地下式横穴墓群タイプ別 分布図	161
第131図 S T-97豎坑実測図	143	第148図 豊坑上部閉塞タイプ（1類） の玄室型態変遷	170
第132図 S T-85・95・97出土遺物 実測図	144	第149図 條門板右閉塞タイプの玄室型態 変遷	171-172
第133図 S T-98遺構実測図	145	第150図 條門板閉塞タイプの玄室 型態	171-172
第134図 S T-99遺構実測図	146	第151図 條門アカホヤ塊閉塞タイプの 玄室型態	171-172
第135図 S T-96・98出土遺物実測図	147		
第136図 S T-100遺構実測図	148		
第137図 S T-100出土遺物実測図	149		
第138図 S T-101遺構実測図	150		
第139図 S T-101出土遺物実測図	151		
第140図 1号墓地形測量および試掘溝 配置図	154		

図版目次

- 図版1 調査地遠景（北から）、調査地近景（東から）
- 図版2 調査地俯瞰（右が北）
- 図版3 1地区試掘調査近景、1号墳の東側全景
- 図版4 地中レーダー探査状況（南東から）、第1～第3試掘溝溝状遺構（東から）、第1試掘溝
溝状遺構と南壁層序（北から）、第12試掘溝木棺墓（西から）
- 図版5 M地区（1435-5番地）試掘調査全景
- 図版6 S T-90と排土（南西から）、S T-87と排土（南西から）、S T-86検出状況（西から）、
S T-91豎坑断面（未完掘、西から）
- 図版7 M地区地中レーダー探査に伴う試掘調査状況（南から）、S T-92豎坑（未完掘）、S T-
93豎坑検出、柱穴掘込（西から）
- 図版8 S T-03豎坑検出状況（西から）、1段目掘込み・断面層序（西から）、完掘（西から）、

玄室天井の棟木

- 図版9 1号墳南側試掘調査近景（南から）
- 図版10 第6試掘溝全景（南東から）、同（西から）
- 図版11 第7試掘溝S K-02（未完掘）、第2次調査S K-02完掘全景（南から）、杏葉・雲珠出土
状態
- 図版12 1地区第2次調査第16～18試掘溝近景（南から）、第18試掘溝全景（南東から）、第17試
掘溝北端S D-07と西壁層序（南東から）、北端S D西壁断面層序（東から）
- 図版13 S T-13豎坑断面（南東から）、玄室内1号人骨
- 図版14 S T-13左側壁～南壁工具痕、S T-14豎坑検出状態（東から）、豎坑断面層序（東から）、
豎坑完掘・羨門閉塞状態（南から）
- 図版15 S T-15玄室内、2号人骨頭部、1号人骨前腕部ガラス玉出土状態、人骨除去・ガラス
玉出土状態
- 図版16 S T-16玄室内（南から）、1号人骨下肢右横の鉄鏃、2号人骨右足先の鉄鏃、豎坑（板
石が崩落）
- 図版17 S T-17玄室内1号人骨と副葬品（刀子）、S T-18玄室内左側壁と1号人骨頭部（南から）
- 図版18 S T-19玄室内（北西から）、骨片と副葬品
- 図版19 S T-20玄室内2～4号人骨、5号人骨と副葬品
- 図版20 S T-21玄室内（西から）、同（南東から）
- 図版21 S T-22玄室内1・2号人骨（東から）、同（北から）
- 図版22 S T-22玄室内3号人骨（南西から）、S T-23玄室内1号人骨と副葬品（南西から）
- 図版23 S T-24玄室内1号人骨と副葬品、S T-25玄室内（南から）、
- 図版24 S T-26玄室内（南から）、貝釧と鉄刀
- 図版25 S T-27玄室内（南東から）、S T-28玄室内
- 図版26 S T-29玄室内（北東から）、接写、幼児骨（2号人骨）
- 図版27 S T-30玄室内（北東から）、S T-31玄室内1・2号人骨
- 図版28 S T-31玄室内東半部（東から）、中央部～西側（東から）
- 図版29 S T-32玄室内1号人骨（南西から）、上半身、足先の副葬品
- 図版30 S T-33玄室（北西から）、同（南東から）
- 図版31 S T-34玄室内（東から）、S T-35玄室内貝釧ほか出土状態
- 図版32 S T-35豎坑断面層序（東から）、閉塞状況（東から）、完掘（南から）、玄室内
- 図版33 S T-36玄室内（西から）、S T-37玄室内（南西から）
- 図版34 S T-37 1号人骨と副葬品（南から）、S T-38玄室内（南から）
- 図版35 S T-39玄室内（南から）
- 図版36 S T-40玄室内1号人骨、2号人骨、S T-41玄室内（南西から）

- 図版37 S T-41玄室内（南から）、S T-42玄室内（北西から）
- 図版38 S T-43玄室内（西から）、遺物出土状態
- 図版39 S T-44玄室内（北から）、1号人骨上半身と副葬品
- 図版40 S T-45玄室内（西から）、1号人骨と疊床
- 図版41 S T-46玄室内（南から）、1・2号人骨と副葬品
- 図版42 S T-47玄室内（西から）、2号人骨と閉塞石（北西から）
- 図版43 S T-48玄室内、S T-49玄室内
- 図版44 S T-50玄室内（西から）、同
- 図版45 S T-51玄室内（南西から）、S T-52玄室右半部（東から）
- 図版46 S T-52玄室左半部（北から）、S T-53玄室内1・2号人骨頭部周辺（西から）
- 図版47 S T-54玄室内頭骨、S T-55玄室奥壁側（南から）
- 図版48 S T-55玄室右半部（西から）、左半部（東から）
- 図版49 S T-56玄室内石棺状施設（北から）、羨門閉塞状態（北から）
- 図版50 S T-56玄室内石棺状施設南半部（北西から）、北半部～夷壁（南東から）
- 図版51 S T-56石棺状施設内北端鐵鑑群（南西から）、右側辺と玄室右側壁（ベンガラ塗布）
- 図版52 S T-56玄室内左半部（北東から）、北西部（南東から）
- 図版53 S T-56玄室南西部（北東から）、6号人骨腰部の副葬品
- 図版54 S T-57玄室内（東から）、S T-58竖坑検出・玄室内（西から）
- 図版55 S T-58玄室内（南西から）、1・2号人骨上半身と副葬品
- 図版56 S T-59竖坑断面層序（西から）、竖坑完掘（南から）、玄室内（南西から）
- 図版57 S T-60玄室内1号人骨と副葬品（東から）、S T-61玄室内（南から）
- 図版58 S T-62玄室内左半部（南から）、同（東から）
- 図版59 S T-62玄室内右半部（北から）、羨道および羨門閉塞状態（東から）
- 図版60 S T-63玄室内1・2号人骨頭部と副葬品（西から）、3～5号人骨下半身と骨鑑（南東から）
- 図版61 S T-63玄室内骨鑑出土状態、S T-64竖坑検出状態（西から）、S T-64玄室内1～3号人骨頭部周辺
- 図版62 S T-65玄室内右半部（西から）、2・4・5号人骨頭部周辺（南から）
- 図版63 S T-65玄室内1号人骨と副葬品（西から）、下半身周辺
- 図版64 S T-66玄室内（南から）、S T-67玄室内（南から）
- 図版65 S T-68玄室内（東から）、1号人骨（北東から）
- 図版66 S T-69玄室内（南から）、2号人骨（女性）の費石、1・2号人骨頭部周辺（中央に種子）、種子散布状況
- 図版67 S T-76玄室内（西から）、S T-81玄室内（南東から）

- 図版68 S T-81横矧板鋸留短甲と鉄鎌出土状態（南東から）、S T-82玄室内（南から）
- 図版69 S T-82鉄劍・鹿角装出土状態、S T-83玄室内1～3号人骨と副葬品（南西から）
- 図版70 S T-83玄室内1～3号人骨下半身、S T-84玄室内（北から）
- 図版71 S T-85玄室内（南から）
- 図版72 S T-94豎坑断面（南東から）、羨門閉塞状態（南西から）、前面の板石と砂礫除去、閉塞材除去
- 図版73 S T-94玄室内1号人骨下半身と屍床の顎皮（南から）、頭部周辺
- 図版74 S T-95玄室内（南西から）、1～3号人骨上半身
- 図版75 S T-96ベンガラ塗布天井と玄室内（南東から）、玄室右半部（南から）
- 図版76 S T-96蛇行劍・鉄劍ほか出土状態（西から）、S T-97玄室内（北東から）
- 図版77 S T-97豎坑覆土半截・豎坑検出状態（東から）、S T-98玄室内（西から）
- 図版78 S T-99豎坑完掘状態（東から）、玄室内（東から）
- 図版79 S T-100玄室（南西から）、人骨北半部と副葬品
- 図版80 S T-100—括副葬品出土状態（南から）、羨門閉塞状態（玄室から）
- 図版81 S K-02出土劍菱型杏葉、雲珠
- 図版82 S K-02西肩部出土簪、f字型鏡板、辻金具
- 図版83 S T-13～15、17～19出土遺物、S T-15出土ガラス玉と耳環
- 図版84 S T-16出土遺物 鉄鎌、S T-20出土遺物 鉄鎌
- 図版85 S T-20出土遺物 刀子、骨鎌
- 図版86 S T-21出土遺物 鉄斧、鉄矛、鏃、刀子、鉄鎌
- 図版87 S T-21出土 横矧板鋸留短甲（保存処理後）正面、左側面、後胴、右側面
- 図版88 S T-21出土 短甲左脇内面、右前胴、後胴内面、後胴付着ワタガミ繕
- 図版89 S T-21出土 短甲右前胴X線写真、左脇部X線写真
- 図版90 S T-21出土 横矧板鋸留衝角付冑 正面、背面、左側面、上面（保存処理後）
- 図版91 S T-21出土 冑 銀除去 正面、背面、左側面、内面
- 図版92 S T-21出土 冑 X線写真、銀X線写真
- 図版93 S T-22出土遺物、S T-23出土遺物（1）
- 図版94 S T-23出土遺物（2）、（3）
- 図版95 S T-23出土骨鎌
- 図版96 S T-24出土骨鎌、S T-24出土遺物、S T-25出土遺物
- 図版97 S T-26出土遺物（1）貝釧、（2）、S T-27出土遺物、S T-28出土遺物、S T-29出土遺物
- 図版98 S T-31出土遺物（1）、（2）、S T-32出土遺物、拡大写真
- 図版99 S T-33出土遺物、S T-34出土遺物、S T-35出土遺物（1）、（2）貝釧
- 図版100 S T-36出土遺物、S T-39出土遺物、S T-40出土遺物、S T-41出土遺物

- 図版101 S T-42出土遺物 (1)、(2)、S T-43出土遺物、S T-45出土遺物
- 図版102 S T-44出土遺物、S T-46出土遺物、S T-47出土遺物
- 図版103 S T-50出土遺物、S T-49出土遺物、S T-51出土遺物
- 図版104 S T-52出土遺物 骨鐵、S T-55出土遺物
- 図版105 S T-55出土遺物 骨鐵、S T-56出土遺物 (1)
- 図版106 S T-56出土遺物 (2)、(3)
- 図版107 S T-56出土遺物 (4)、S T-57出土遺物、S T-58出土遺物
- 図版108 S T-60出土遺物、S T-61出土遺物、S T-62出土遺物 鉄鐵
- 図版109 S T-62出土 横矧板鈍留短甲 (保存処理後) 正面、左側面、後胴、右側面
- 図版110 S T-62出土短甲 前胴ワタガミ緒、後胴、右前胴X線写真
- 図版111 S T-63出土遺物 (1)、(2)
- 図版112 S T-63出土遺物 (3)、骨鐵
- 図版113 S T-65出土遺物 (1)、(2)、(3)
- 図版114 S T-65出土 骨鐵、S T-67出土遺物、S T-68出土遺物、S T-81出土遺物
- 図版115 S T-81出土 横矧板鈍留短甲 (保存処理前) 正面、後胴
- 図版116 S T-81出土短甲 右前胴、拡大、左前胴上部ワタガミ緒痕、後胴ワタガミ緒痕
- 図版117 S T-82出土遺物、S T-83出土遺物
- 図版118 S T-85出土遺物、S T-95出土遺物、S T-96出土遺物
- 図版119 S T-97出土遺物、S T-98出土遺物、S T-21出土蛇行剣、曲剣と蛇行剣 (左から S T-56・55・24・32出土)
- 図版120 剣と曲剣 (左上から S T-28・19・56・41・56・56出土)、拡大、刀剣 (上から S T-63・63・62・20出土)
- 図版121 鉄刀 (左から S T-55・55・26・23・25・65・81・82・83出土)、906拡大、S T-85出土
鉄刀、拡大
- 図版122 S T-96出土 剣・蛇行剣、S T-20出土鹿角装具
- 図版123 S T-24出土 剣の鹿角装具、S T-56出土 剣の鹿角装具
- 図版124 S T-100出土遺物
- 図版125 1号墓調査前 (北から)、(東から)
- 図版126 1号墓主体部～羨道部根石・敷石出土状態 (南西から)、玄室石材遣行状況 (西から)
- 図版127 1号墓第3試掘溝南壁層序 (北から)、墳丘層序 (南西から)
- 図版128 1号墓玄室南西部根石・敷石出土状態 (南東から)、第5試掘溝北壁層序 (南西から)
- 図版129 1号墓玄室根石と断面層序 (北西から)、掘り込み状況 (北東から)
- 図版130 1号墓玄室根石と断面層序 (北西から)、第5試掘溝遺物出土状態 (北西から)
- 図版131 1号墓第8・9試掘溝全景 (南東から)、第8試掘溝南西壁層序 (北東から)

図版132 1号墓出土遺物、墳丘内出土遺物土師器、須恵器(1)

図版133 1号墓墳丘内出土遺物須恵器(2)

図版134 試掘調査出土および表探須恵器、鹿の前足腓骨半截品と骨鑓レプリカ

図版135 S T- 101玄室内（南から）、上半身と副葬品（西から）

図版136 S T- 101 1号人骨頭部、2・3号人骨下肢、出土遺物

表 目 次

表1 昭和8年6月26日付公文書 抜粋・変更	6
表2 島内地下式横穴墓群1~12号・A・B号墓一覧表	9
表3 島内地下式横穴墓群一覧表	160・161
表4 島内地下式横穴墓群被葬者一覧表	162~164
表5 甲冑出土土墳墓一覧表	165
表6 出土遺物計測表(1)	173
表7 出土遺物計測表(2)	174
表8 出土遺物計測表(3)	175
表9 出土遺物計測表(4)	176
表10 出土遺物計測表(5)	177
表11 出土遺物計測表(6)	178
表12 出土遺物計測表(7)	179
表13 出土遺物計測表(8)	180
表14 出土遺物計測表(9)	181
表15 S T-15出土ガラス玉計測表	181
表16 貝釧計測表	182
表17 調査地域内出土土師器・須恵器観察表	182

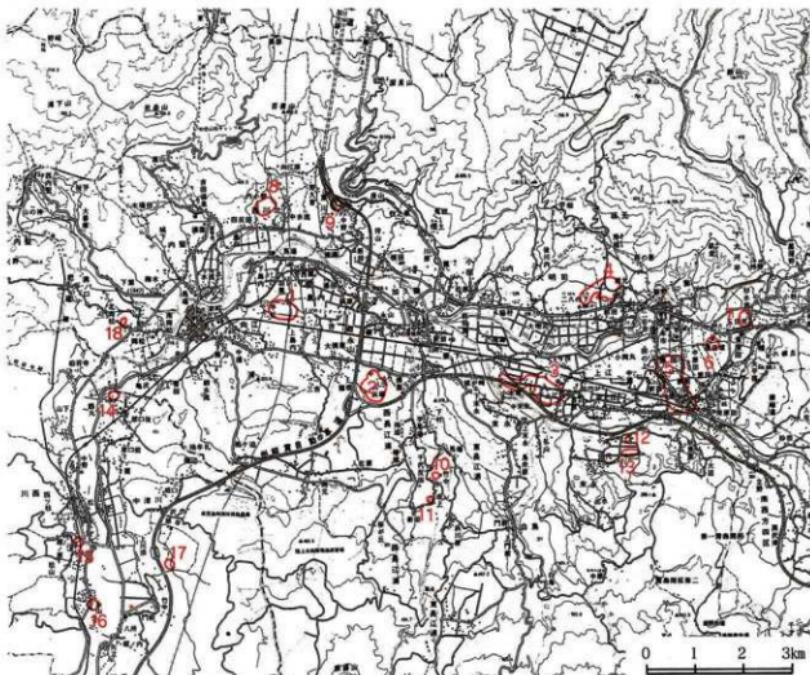
第1章. はじめに

島内地下式横穴墓群は、山間部における甲冑の出土地として周知され、その保存状態が極めて良好な例もある重要な遺跡である。

平成6年の旱魃は地下の火山灰を収縮させ、約1m間隔で地表下1m位まで地割れをおこし、4基の玄室の天井が自然陥没した。また、農業機械の重みで37基の天井が陥没し、緊急調査を実施した。平成7年度前半にも6基の調査を行い、一連の調査で短甲2領・胄1鉢のほか蛇行剣7本、骨鏃100本以上など、質量ともに豊富な成果を得た。

耕作者から通報があるとすぐに対応し、シラスを充填して元に戻す作業の繰り返しから、以後、耕作者自身で埋める例は皆無となり、調査資料が蓄積すると共に、分布状況や群構造も推定できつた。⁽¹⁾

平成10・11年度、地中レーダー探査を委託し、分布域の不明瞭な東～南側について実施し、その



第1図 古墳時代の集落と墳墓群位置図 (1:100,000)

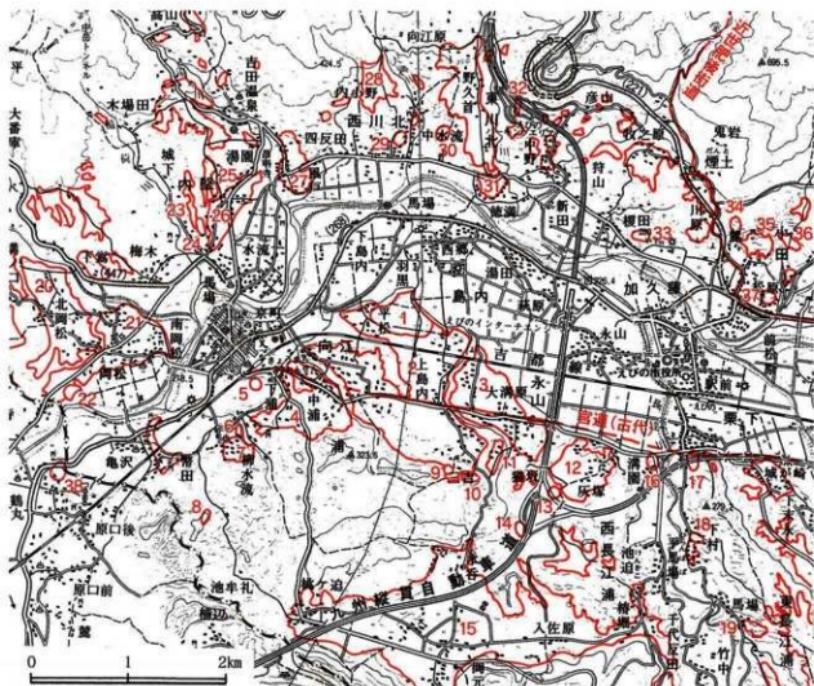
- 1：島内地下式横穴墓群 2：灰塚地下式横穴墓群 3：小木原地下式横穴墓群 4：亭畠地下式横穴墓群 5
：建山地下式横穴墓群 6：遠目塚地下式横穴墓群 7：杉水流地下式横穴墓群 8：内小野遺跡 9：妙見遺跡
10：馬場田遺跡 11：内丸遺跡 12：松山遺跡 13：上田代遺跡 14：鶴丸・馬場地下式横穴墓群 15：堀之原
地下式横穴墓群 16：永山板石横石室墓群 17：塘迫地下式横穴墓群 (14~17は鹿児島県吉松町) 18：天神免遺跡

結果に基づき遺構確認調査を実施した。本書は、この成果と、平成元年以降に調査した地下式横穴墓について報告する。

第2章、遺跡の位置と歴史的環境（第1・2図）

えびの市は、標高700～800mの山々が連なる九州山地と、標高1,700mの韓国岳を筆頭とする霧島連山に囲まれた狭長な盆地で、広大かつ数多い段丘の殆どは周知の遺跡であり、湧水も多い。島内地下式横穴墓群は、本市の西寄り、盆地中央を西流する川内川の左岸、氾濫原との比高8m、標高233～235mの低位段丘に立地する。1985年度に県文化課が作成した「えびの市遺跡分布図」には、東西1,100m・南北550mの範囲が表示されている。

川内川の左岸には、同規模の地下式横穴墓群が約2km間隔に4ヶ所（島内・灰塚・小木原・建山）



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡位置図(1:50,000)

- 1：島内地下式横穴墓群
- 2：島内遺跡
- 3：大溝原遺跡
- 4：中浦遺跡
- 5：徳永牛田遺跡
- 6：古城跡
- 7：古城遺跡
- 8：猿ヶ城跡
- 9：柿ヶ追経塚
- 10：三吉城跡
- 11：小原遺跡
- 12：灰塚地下式横穴墓群
- 13：西矢倉城跡
- 14：池山城跡
- 15：岡元遺跡
- 16：溝園城跡
- 17：稻荷城跡
- 18：小屋敷城跡
- 19：畠田城跡
- 20：天神免遺跡
- 21：岡松遺跡
- 22：赤花城跡
- 23：杉尾城跡
- 24：松尾城跡
- 25：丸ノ尾城跡
- 26：昌明寺跡
- 27：風戸遺跡
- 28：内小野遺跡
- 29：東福城跡
- 30：新城跡
- 31：徳満城跡
- 32：妙見遺跡（消滅）
- 33：園田城跡（消滅）
- 34：淨慶城跡
- 35：加久藤城跡
- 36：新城跡
- 37：小城跡
- 38：鶴丸・馬場地下式横穴墓群（古松町）

と、小規模のもの2ヶ所（遠目塚・杉水流⁽⁷⁾）に加え、松山遺跡においては小児用小型地下式横穴墓⁽⁶⁾が1基検出している。右岸には、1ヶ所（芋畠⁽⁸⁾）と、内小野遺跡・天神免遺跡で1基検出している。このうち島内・灰塚・小木原・芋畠の4ヶ所には、地下式横穴墓以前の墓制である板石積石室墓も混在している。隣接する鹿児島県吉松町においては、左岸に2ヶ所（鶴丸・馬場、堂迫）、右岸には1ヶ所（堀之原⁽¹⁵⁾）の地下式横穴墓群と1ヶ所（永山⁽¹⁶⁾）の板石積石室墓群がある。これらの墳墓群は、同一の盆地を望む、水の不便な（=居住に不適当）段丘端部に立地する。

当遺跡を含む平坦面は、縄文～平安時代の遺物散布地として島内遺跡・大溝原遺跡などが周知されている。京町温泉駅南西の氾濫原内（徳永牟田遺跡）において、平成6年2月、個人経営水田拡張の際に弥生時代終末～古墳時代初頭の壺や甕數十個体が潰れた状態で発見された。地権者の意向もあり、採集のみに止めたが、重機のオペレーターの話によると直径3m位の円形に方形の張り出しを持つ焼成坑状の遺構も存在したようである。氾濫原における遺跡としては唯一の例であるが、当遺跡のような旧微高地が未発見の遺跡として存在することを留意しておく必要がある。

島内地下式横穴墓群の南側600m程には、現道とほぼ重複する古代の官道が貫く。背後には広大に続く島内遺跡、さらに南の小丘陵を越えれば岡元遺跡があるが、古墳時代の集落の調査例は無い。南北の丘陵突端部要所には、中世の山城が立地する、三吉城西隣の独立小丘陵頂部には経塚3基があると思われ、うち1基は掘り出されて、軽石製の外容器が現存する。

対岸の2km北には、弥生時代中期末～古墳時代中期、推定総数300～400軒の拠点集落である内小野遺跡が立地し、当墳墓群を造営した集団の居住地である可能性が高い。その東には、5～6世紀代の堅穴住居41棟を検出した妙見遺跡⁽¹⁷⁾がある。1.8km北には、9世紀代の木簡1点や墨書き土器150点余り、越州窯系青磁9点の出土など卓出した集落である昌明寺遺跡が立地する。このほか古墳時代の集落としては、南東4.5kmの馬場田遺跡で堅穴住居が19棟、内丸遺跡では3棟が、南東7.5kmの上田代遺跡で19棟が検出されているものの、地下式横穴墓分布域に相当する集落の発見は少ない。

註

- (1) 中野和浩 1998「地下式横穴墓の群構造」『宮崎考古』第16号 宮崎考古学会
- (2) えびの市教育委員会 1985「えびの市氾濫群分布調査報告書」
- (3) 宮崎県教育委員会 1973「灰塚遺跡」九州縦貫自動車道文化財調査報告(2)
- (4) 水友良典 1990「小木原遺跡群地区(A・B地区)」「永田原遺跡・小木原遺跡群地区(A・B地区)・ロノ坪遺跡」
えびの市教育委員会、中野和浩 1996「小木原遺跡群地区・久見迫B地区」「小木原遺跡群・原田・上江遺跡群」
えびの市教育委員会
- (5) (2) の文献内、長津宗重 1993「建山地下式横穴墓群」『宮崎歴史 資料編 考古2』 宮崎県
- (6) えびの市 1994『えびの市史 上巻』
- (7) 同上
- (8) えびの市教育委員会 1997「松山遺跡」「田代地区遺跡群・妙見原遺跡群」
- (9) えびの市教育委員会 1991「広畠遺跡」
- (10) えびの市教育委員会 2000「内小野遺跡」
- (11) えびの市教育委員会 2000「天神免遺跡」
- (12) 宮崎考古学会・鹿児島県考古学会 1986「地下式横穴墓から見た古墳時代 資料」
- (13) 同上、吉松町教育委員会 1991「馬場地下式横穴墓群」
- (14) (12) の文献所収
- (15) 同上
- (16) 川口ほか「永山古墳」鹿児島県考古学研究所・占松町教育委員会
- (17) 宮崎県教育委員会 1994「野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡」
- (18) えびの市教育委員会 2001「昌明寺遺跡」
- (19) (6) の文献所収

第3章. 島内地下式横穴墓群の沿革

『日向の伝説と史蹟』(昭和9年)によると、明治38年、大字島内字杉ノ原に所在する5基の円墳のうちの1基、「直径15間高さ4尺の封土を完全に有し、羨道は・・・地下を南から北へ18尺程這入って奥に玄室があり」、横矧板鉢留短甲1領と小札鉢留衝角付冑1鉢のほか鉄刀、鉄鎌が発見され、現在、東京国立博物館が所蔵している(写真1・2)(1号墓)。平成12年3月現在、県指定古墳で唯一墳丘の遺存する1号墳(真幸古墳)⁽¹⁾の地権者の祖母(故人)の話によると、1号墳から出土したらしい。別の古者の話では、その墳は盜掘坑の穿いた円墳が多く、うち1基は「玄室の周囲は板石を縦に並べ一面朱を施し・・・数人分の人骨と・・・甲冑、刀剣などが目についた」らしい。東京国立博物館所蔵品には「石櫛」出土となっており、聞き取り内容に近い。ただ、現1号墳の推定直径は23~25m、高さは2.5mを測り、規模的差異は同一性の否定を強める大きな要因である。

昭和6年8月、宮崎県学務部長より真幸村(本市は昭和41年に真幸町と加久藤町・飯野町が合併)長宛に史蹟調査の依頼があり、肉眼で認識できる円墳10基についての計測値と現状報告を提出して

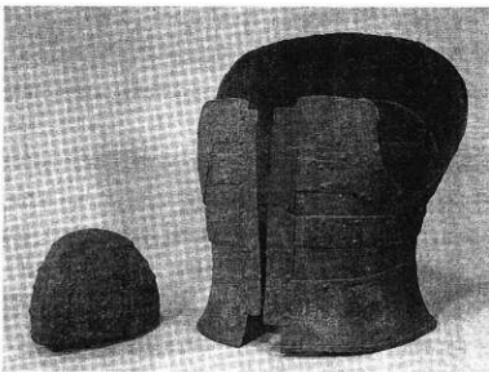


写真1 1号墓出土 短甲と冑



写真2 同上 冴 (栗原文藏氏提供)

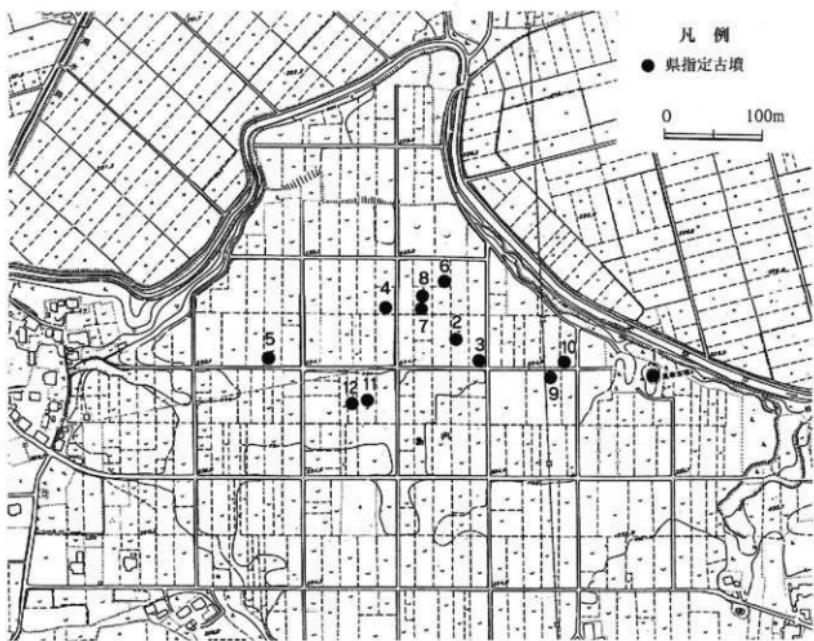
いる。昭和8年3月、県は文部省史蹟調査嘱託の上田三平氏を派遣し、再度、正確・詳細な調査を依頼した。村としては、既提出分に改修正・追加し、字図に位置を示した図面を添付して「調書」として回答している(表1)。これを受けて同年12月5日、12基の円墳が県指定された(第3図)。

昭和8年、送電線鉄塔建設の基礎工事の際に、短甲と金銅製の受鉢・伏鉢を有する?肩庇付冑・簪

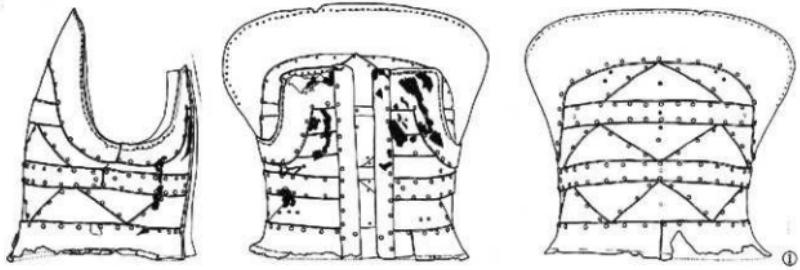
・鎧・刀剣が出土したらしい(A号墓)。

甲冑が出土した記憶のある古者が數名いらっしゃることから、現在、県立博物館にある三角板鉢留短甲の残欠(残りの部位は西都市にある)が相当するものと思われる(第4図-2)。なお、短甲以外の遺物は散逸している。

昭和10年6月、電柱架け替え(或は標柱設置)の際、表土下1.5mで玄室に当たり被葬者3体と、鉄劍3振、簪1組、辻金具6点、



第3図 県指定古墳 位置図 (1:5,000)



0 10 20cm

第4図 3号墓(1)・A号墓(2)出土 三角板横矧板併用銀留短甲 実測図

「宮崎県総合博物館収蔵資料目録
考古・歴史資料編」より転載

表1 昭和8年6月26日付 公文書抜粋・改変

号	所在地			地積	高さ	状態			所有者住所・氏名
	大字	字	地番			周囲	基底径	墳丘の面積	
1	島内	杉原	1,431	山林	3歟歩 9尺9寸	34間3尺	11間	3歟歩	島内170-1 中津道龜安
現状：俗に大塚と言い、大字島内に於ける古墳群中の最大古墳なり。東は広瀬なる加久藤の田地に面し、西は古墳散在する字杉原平松の造林に続く。伝え云う、大字島内の浮沈に関する問題到来せるときは此の大塚の大松（今は無し）の下にある大體を掘出すべしと。形状稲原形を留むるも墳丘の頂より直下に向ひて8尺程発掘せる形跡あり。但し玄室に達せるや明瞭ならず。									
2	島内	平松	1,184-ニ	山林	4反1歟8歩 5尺	20間2尺	6間3尺	1歟3歩	島内69 阿野ニワ
現状：台地上造林中にあり。墳形稲原形を留むるも、側面3ヶ所より発掘の形跡あり。20年程以前発掘の際、5尺の刀出で其の品は宮崎微占館に保存あるよし。									
3	島内	平松	1,194-ニ	山林	3反1歟19歩 2尺3寸	16間1尺	5間	20歩	湯田56 岩崎泰藏
現状：台地上造林中にあり。墳形稲原形を留むるも、側面3ヶ所より発掘の形跡あり。20年程以前の発掘の際、鉛表記の品は宮崎微占館に保存あるよし。（足の届くところに朱あり）									
4	島内	平松	1,201-チ	山林	1反6歟歩 4尺3寸	26間4尺	8間2尺	1歟27歩	島内917 日高留吉
現状：台地上造林中にあり。墳形原形を留めるを、南方より玄室に向て発掘の跡あり。									
5	島内	平松	1,201-ハ	山林	5歟20歩 5尺	33間	9間2尺	2歎	小田447 潤戸山清彦
現状：台地上造林中にあり。墳形原形を留め、発掘の形跡無し。 以上は、古墳群中、主なるものを記載せり。 (追加の分)									
6	島内	平松	1,184-ニ	山林	4反1歟8歩 不明 不明 不明 不明	島内69 阿野ニワ			
現状：台地上にあり。一部里道となり、残部も原形を留めず。東畑に面し、西造林に続く。									
7	島内	平松	1,201-リ	山林	1反1歟20歩 2尺6寸	20間4尺	6間3尺	1歟3歩	湯田56 岩崎泰藏
現状：台地上にあり。墳形原形を留むるも、試掘の跡あり。但し、玄室に及ばざる如し。									
8	島内	平松	1,202-リ	山林	1反1歟20歩 2尺5寸	18間5尺	6間	28歩	湯田56 岩崎泰藏
現状：同地番にある前記と並立し、形状殆ど相似たり。									
9	島内	杉ノ原	1,436-イ	畠	2反9歟26歩 不明 不明 不明 不明	湯田56 岩崎泰藏			
現状：台地上、畠と山林の中間にあり。墳丘概ね破壊あり。耕作者、畠と山林の中間に溝を掘るとき偶然陥没せりと言ふ。玄室及び後進の一部露出す。									
10	島内	杉原	1,435-ニ	山林	3反9歟12歩 3尺3寸	18間5尺	6間	28歩	小田447 潤戸山清彦
現状：台地上造林中にあり。墳形明なるも側面より試掘の形跡あり。但し、玄室に及ばざる如し。									
11	島内	平松	1,201-ニ	山林	7反1歟3歩 3尺	18間5尺	6間	28歩	加治木町 白瀬新之助
現状：台地上造林中にあり。墳形明なるも中央より試掘の形跡あり。但し、玄室に及ばざる如し。									
12	島内	平松	1,201-ニ	山林	7反1歟3歩 3尺	16間	5間	20歩	加治木町 白瀬新之助
現状：同地番にある前記と並立し、形状現状殆ど相似たり。側面より試掘の形跡あり。但し、玄室に及ばざる如し。									
尚此の外に、数多あるも或は正確ならず或は畠道路の為に破壊され、痕跡明ならざるを以て記載せず。									

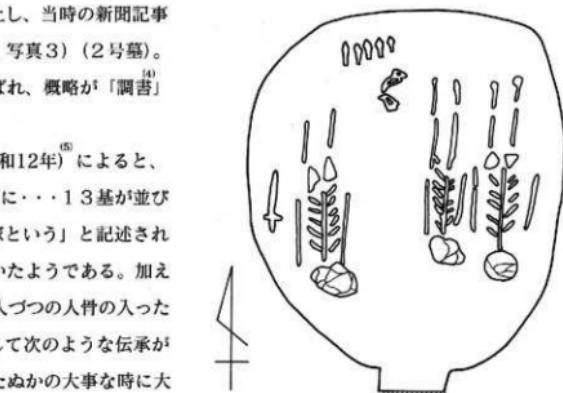
原典は縦書き、旧仮名使いであるが、横書き・現代仮名使いにし、句読点を加えている。

刀子1点、鉄鎌約20点が出土し、当時の新聞記事に掲載されている（第5図、写真3）（2号墓）。出土遺物は小林警察署へ運ばれ、概略が「調書」として残っている。

『日向馬関田の伝承』（昭和12年）⁽⁵⁾によると、「東西10町位の間に殆ど1列に・・・13基が並び・・・一番東のが最大で大塚」と記述されこの頃までは形状を保っていたようである。加えて、「外石の蓋をした夫々一人づつの人骨の入ったのが49個あった。・・・そして次のような伝承がある・・・島内が立つか立たぬかの大事な時に大塚を掘れ。金で作った鳥が2つ埋めてある。大塚から6番目の塚は石コヅミ

がしてあって、人骨、鞍、刀が沢山入っていた」とことなどの記述があり、実際、昭和10年前後に甲冑や鞍を見たという古老もいた。

昭和23年、農地解放により、農林省の管轄地となっていた30haの台地が区画整理・払い下げされた。以後昭和30年代前半にかけて大部分が開墾・平地（畠地）化され、県指定古墳も削失していく。結果的に、台



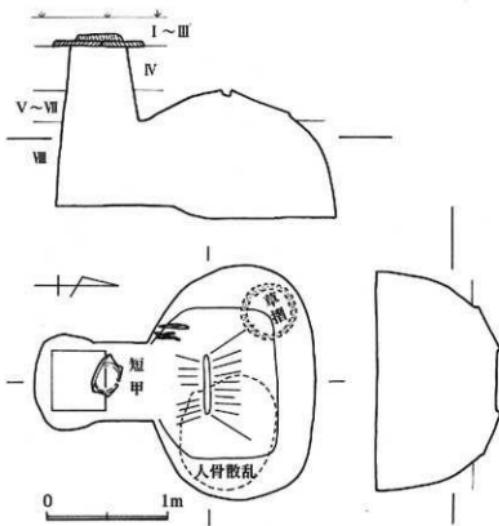
第5図 2号墓 遺構模式図（「調書より」）



写真3 2号墓出土遺物（「調書」添付写真）

辺のみ難を免れ、現在に至る。「昭和32年の開墾時、直径1~1.5mの杉の大木が林立しており、反(1,000m)あたり4基位の低い塚があり、削平すると必ず墓があった。全城で数100(100~300)基の墓が陥没して埋められたのではないか」という古老の話もある。

昭和41年8月、「県指定古墳」の標柱を設置しようとした際、竪坑上部閉塞タイプの地下式横穴墓に当たり（3号墓、第6図）宮崎県立博物館の栗原文藏氏が記録保存された。当墳墓は平入り楕円形プランの寄せ棟タイプで、三角板横矧板併用鋲留短甲（第4図-1）のほか皮小板漆塗草摺、鉄斧、鉋、刀子各1点と鉄鎌6点が出土した。⁽⁶⁾



第6図 3号墓 遺構実測図 (註6 文献所取、一部改変)



写真4 B号墓 竪坑



写真5 同 玄室内 人骨

昭和40~41年頃、2基の板石積石室墓が鋤先に当たり、農作業に支障をきたすため、除去されたらしい。台地北西端の谷部には、数十枚の板石が野積みされている。

昭和43年2月21日、甚大な被害をもたらした「えびの地震」によって地下式横穴墓2基が自然陥没した。そこで同年5月、県文化課による調査が実施された(4・5号墓)。

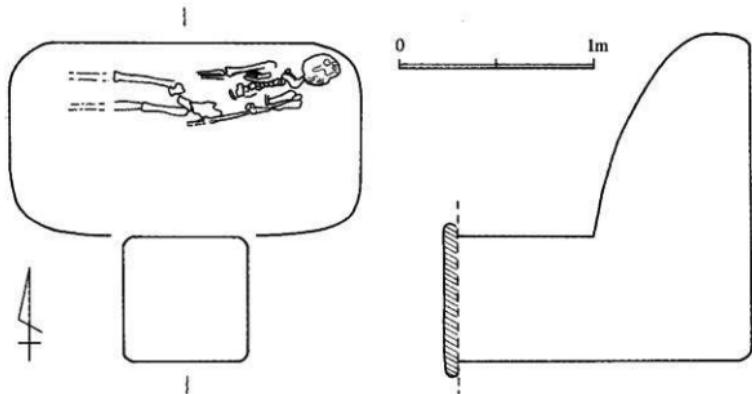
昭和46年7月、古墳発見の通報が入り、当時の市教育委員会の担当職員2名が対応し、略図(第7図)と写真(写真4・5)⁽¹⁰⁾を撮影しているが⁽¹¹⁾、正式な報告はでていない(B号墓)。

同年9月、北東部の畑地、東西70m、南北50mの範囲で段丘下疊層の砂利採取(建築材として)が重機によって行われ、27基の破壊が確認された。これらは全て竪坑上部閉塞タイプで、このうち2基(6・7号)が県文化課によって記録保存された。⁽¹²⁾

昭和52年1月、耕作者から天井陥没の通報を受け、県文化課による調査が実施された(8号墓)。⁽¹³⁾

昭和54年4月、耕作者から通報を受けた4基(9~12号墓)の調査を県文化課が実施した。⁽¹⁴⁾ 10号墓からは金銅製胡鎧金具が出土し、稀有な発見となった。

以上が、昭和期までの調査事例である。



第7図 B号墓 遺構模式図 (記録簿より作成)

表2 島内地下式横穴墓群 1~12号・A・B号墓一覧 (県指定古墳の1~12号とは全く異なる)

号	旧 号	閉 塜	閉 塜 材	玄 室 プ ラ ン	玄 室 規 模 幅×奥行(m)	副 葯 品	人 骨 主 附
1	M38	不詳	不詳	石廓	不詳	横矧板銀留短甲1、小札銀留 衝角付冑1、刀1、鐵鏹	不詳 北
A	S8	不詳	不詳	不詳	不詳	三角板銀留短甲1、金銅製肩庇 付冑1、曹1、鎧1、刀劍	不詳 不詳
2	S10-1	羨門	板石	平入り楕円形?	不詳	劍3、曹1、刀子1、鐵鏹約20、 辻金具6	3 北
3	41-1	堅坑上部	板石	平入り楕円形寄棟	180×125	三角板横矧板併用銀留短甲1、 劍3、鐵斧1、鞘1、刀子1、2~3か 鐵鏹6、皮小板漆塗草摺1	北
4	43-1	羨門	アカホヤ塊	平入り闊丸長方形	230×188	劍1、刀子2、鐵鏹18	2 東
5	43-2	堅坑上部	板石	平入り楕円形	180×140	貝銅3、鉄片	1 北西
B	46	堅坑上部	板石	平入り	180×100	無	1 北
6	46-1	堅坑上部	板石	平入り闊丸長方形 切妻	185×120	無	1 北
7	46-2	堅坑上部	板石	平入り闊丸長方形 切妻	195×130	刀1、鐵鏹8、貝銅4	3~4 北北東
8	52-1	堅坑上部	板石	平入り長方形寄棟	140×110	劍1、鐵鏹11	1 北
9	54-1	羨門	板石	平入り楕円形寄棟	185×131	短刀2、劍1、鐵鏹7	2~3 北
10	54-2	羨門	板石	平入り方形、寄棟	231×215	劍1、鐵鏹6、鞘?1、刀子2、 金銅製胡蝶金具1組	2 北
11	54-3	堅坑上部	板石	平入り闊丸長方形	178×125	劍1、鐵鏹8	3 南西
12	54-4	堅坑上部	板石	平入り楕円形、ドーム	189×119	鐵鏹2	2 南東

文献 『宮崎県 史料編 考古2』 P813所収 表28を改変、加筆

平成元年、筆者が市教育委員会に着任し、以後、本市で対応する体制になった。

平成元年9月に1基(13号墓)、平成5年2・4・6月に各1基(14~16号墓)の緊急調査を実施し、記録保存処置をした。中でも15号墓では、耳環1対とガラス玉61点が着装され、6世紀後半まで継続することが判明した。

この頃まで、農業機械の大型化や深耕耕作によって陥没する墳墓が毎年数基ずつあったと聞く。

平成6年は空梅雨で旱魃になり、火山灰(特にアカホヤ)の収縮によって地ド1m位まで地割れが起こり、網目状に走っていた。同時に非常に軽量化し、少しの重圧で陥没する状態になった(玄室天井と地表面までの厚さは80cm前後しかない)。当然のことく通報は多く、8月から翌年7月にかけて47基(17~63号墓)の緊急調査を実施した。このうち4基は自然陥没である。当該期の調査において、横矧板鉢留短甲2領のほか横矧板鉢留衝角付冑1鉢、鉄矛2本、鉄刀13振、鉄劍15振、蛇行劍6~7振、曲劍2振、鉄鎌295本、刀子41点、鉄斧1点、骨鎌145本、鏺子1点、耳環3点、貝釧25点が出土したほか、人骨140体分が取り上げられ、保存状態の良さも注目された。これらは、本市歴史民俗資料館開館1周年記念特別展「地下式横穴の世界」と題して平成7年、一堂に展示公開して、多くの見学者が来館された。

平成9年度は、通報のあった5基(64~68号墓)の調査を実施した。

平成10年度は、文部省科学研究費重点領域研究「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」の援助を受けて鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座⁽¹³⁾および同大学埋蔵文化財調査室が調査主体となり、3次にわたる調査を実施、69~79号・86~91号墓の学術調査によって多くの成果を得ている。
69号墓の被葬者には費石と一握りの蒔かれた種子(ツユクサ)が、76号墓には横矧板鉢留短甲と三角板皮緩衝角付冑などが検出された。このほか、黒色微細な種子が蒔かれた墳墓3基、子供の拳大の費石1例など、自然遺物が目立つようになってきた。

同年度に市教委に通報が来たのは5基(81~85号墓)で、81号墓には横矧板鉢留短甲などが副葬されていた。さらに、11年度にかけては、墳墓の分布範囲、特に東縁から南縁について確定するため、地中レーダー探査を実施、反応地点については試掘調査による追確認を実施した(別項)。平成12年5月末、1号墳の40m西で直方体の石材を発見、1号墓と推定して、同年8月、県文化課と合同で確認調査を実施した。

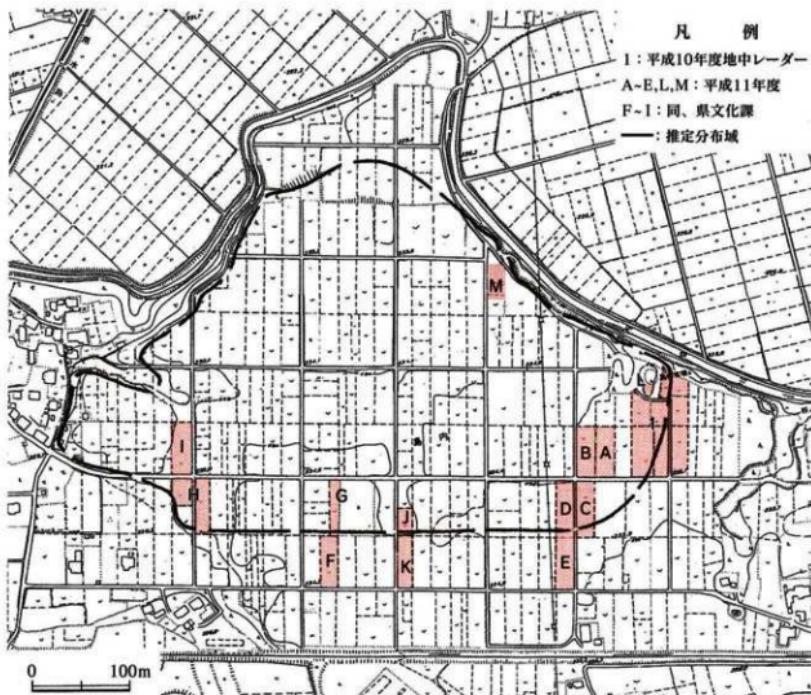
註

- (1) 木崎原謙 1973 「平松古墳群について」「えびの」5号 えびの市史談会
- (2) 西諸県郡真幸村長田代徳二 昭和8年8月26日付 公文書第874号 宮崎県学務部長宛
- (3) 高橋 勝 1971 「平松古墳に想う」「えびの」2号 えびの市史談会
- (4) 西諸県郡真幸村長田代徳二 昭和8年6月19日付 公文書第732号 宮崎県学務部長宛
- (5) 横木範行 1937 「向山周辺山の伝承」
- (6) 粟原文義 1967 「えびの町真幸・島内地下式横穴」「宮崎県文化財調査報告書」第12輯 宮崎県教育委員会
- (7) (1) と同じ
- (8) 石川恒太郎 1969 「えびの町平松の地下式古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」第14集 宮崎県教育委員会
- (9) 萩原勝夫「平松古墳発掘調査記録」昭和46年7月7日付 教育長宛
- (10) 石川恒太郎 1972 「えびの市轄之内の地下式古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」第16集 宮崎県教育委員会
- (11) 岩永哲夫 1978 「平松地下式古墳発掘調査」「宮崎県文化財調査報告書」第20集 宮崎県教育委員会
- (12) 北都泰道 1980 「平松地下式古墳発掘調査(昭和54~1号)」、北都泰道・岩永哲夫「平松地下式古墳発掘調査(昭和54~2~4号)」「宮崎県文化財調査報告書」第22集 宮崎県教育委員会
- (13) 主要文献は150ページに紹介している。

第4章. 地中レーダー探査

当地下式横穴墓群は、一連の緊急対応調査や聞き取り調査によって、東西約650m・南北350~400mの範囲に分布することがわかつてき。平成10年度、分布の東北限を確定するため、県指定1号墳の東~南部約5,000m²（第8図-1）について、地中レーダー探査を実施した（第9章）。その際、既に玄室を調査済みの45号墓で、標準波形の参考資料とするためのサンプリング探査をした。同年12月2日、探査結果の中間報告を受け、同月8日~10日にかけて反応地点の遺構確認調査を実施、平成11年1月11日~25日にかけて、県指定1号墳周辺（L区）と、1435-5番地（M区を含む畠地）の遺構確認調査を実施した。

平成11年度は、南東限を確定するため、5月20・21日A~Eの畠地に地中レーダー探査を実施した。加えて、10年度に試掘調査した1435-5番地における密集部分（M）のサンプリング探査と、1号墳の南縁（L）の遺構分布状態の探査を実施した。さらに、県文化課の事業として、南~西南限を確定するため、5月22日F~Kの畠地について探査した。5月25日に探査結果の中間報告を受けて、5月31日~6月15日までと12月2日に遺構確認調査を実施した。



第8図 地中レーダー探査 位置図 (1:5,000)

第1節. レーダー探査結果（8・9図）

1 地区は、従来の聞き取り調査から、当該地区の地下式横穴墓は稀薄であると思われたため、1 m 間隔で探査して反応があればその中間も探査するという計画で実施した。その結果、表土下30cm でのタイムスライス図（別編）に直径30m位の溝状遺構と、その北側の表土下2.1～2.4のタイムスライスで1号墳の前方部に相当するような溝状落ち込みと高まりがみられ、周辺2ヶ所においては主体部的な強い反応があった。

・ A～E区は50cm間隔で探査したが、A区の東縁で3ヶ所の強い反応と、C区の西縁で1ヶ所の弱い反応があつたにすぎない。

M区はサンプリング探査（既に調査済みの墳墓で基本的波形を読みとるため）を実施したが、新たに5～6ヶ所の反応がみられた。

L区は既存の遺構に加えて、新たに2ヶ所の反応がみられた。

F～I地区は県文化課主体の探査であるが、G区で2ヶ所・I区で5ヶ所の反応がみられたにすぎない。⁽¹⁾

第2節. 基本的層序

一連の探査をふまえて遺構確認調査を実施した。当遺跡が立地する地層は、市内の他の段丘と同じ様相を呈する。

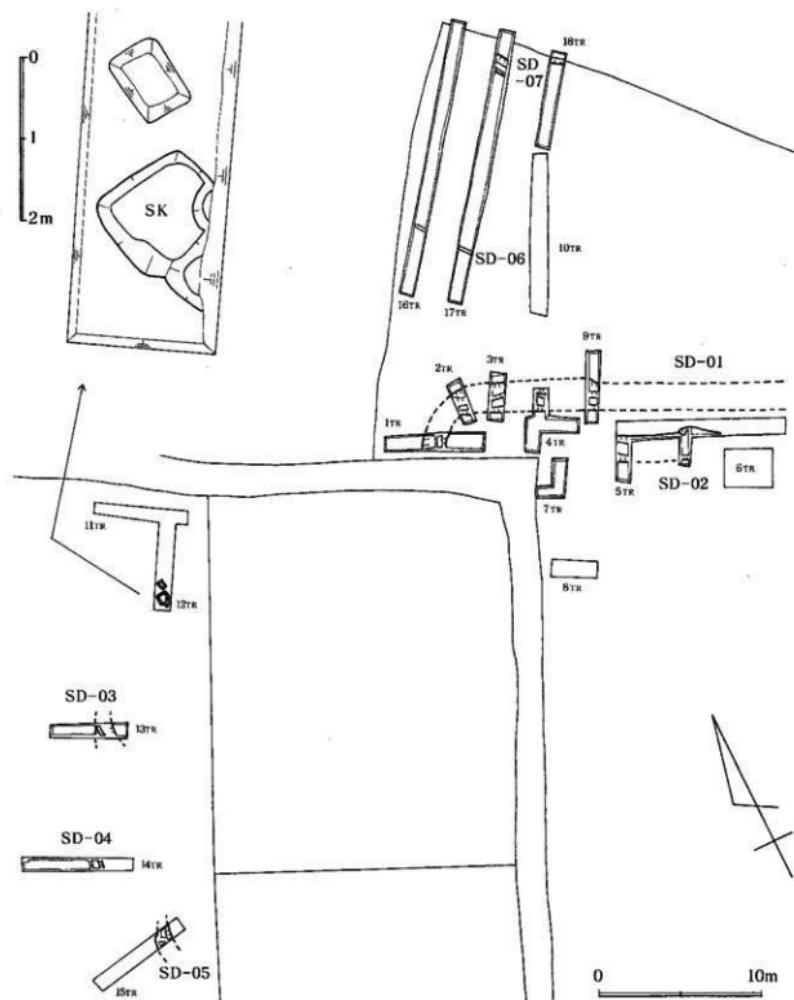
層序は上から I層：畑作土、II層：灰色系畑作基盤土・旧畑作土、III a層：淡黒灰色土（火山灰、古代～中世）、III b層：黒褐色土（火山灰、弥生～古墳時代）、IV a層：淡黄褐色微砂質土（IV b層



第9図 地中レーダー探査 反応地点位置図

の2次堆積)、IV b層：アカホヤ火山灰、V層：暗茶褐色火山灰+黒褐色火山灰(堅い)、VI層：淡黒褐色火山灰、VII a層：淡黄褐色～淡茶褐色微砂質土、VII b層：細砂主体の地層、VIII層：段丘疊層に分別した。

B・C13,000年頃に堆積したⅣ層は、数十mおきに起伏しており、地形の原形を形成する。VII b層には「小林軽石」(B・C13,000、黄白色～黄橙色降下軽石)を含んでいる。

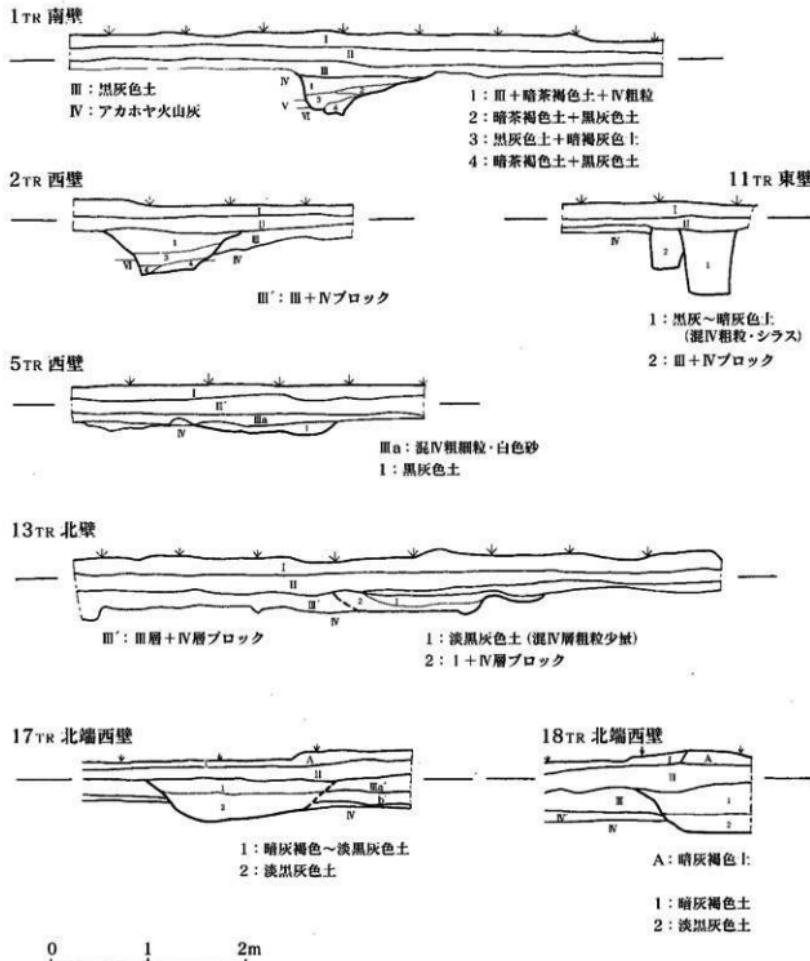


第10図 1地区(1号填埋～南部) 試掘溝および造構配置図

地下式横穴墓はⅢ b 層上面で構築されるが、後世の開墾によってⅢ～Ⅳ層の遺存度に差がある。削平著しい地点は、Ⅱ層の下がⅣ層の下部もしくは痕跡程度といった状況である。

第3節 1地区の遺構確認調査（第10・11図）

農作物等の制約があったものの、有無を判定できる試掘溝を設定できた。第1・2・3・9試掘溝においては、幅1.3～1.4m、深さ40cm内外の溝状遺構（SD-1）を検出し、微細な土師器片の出



第11図 1地区（1号墳東～南部）試掘溝断面層序図

土より、古代の居館跡の可能性がある。第5試掘溝においては、並行する深さ20cmの溝状遺構(SD-02)を検出したが、年代や機能は不明である。

第12試掘溝の南端部において、中世と思われる木棺墓3基が切り合って検出された。各々鉄釘数本が出土したのみであるが、レーダーに反応していない(わかりにくい?)遺構である。

第13~15試掘溝においては、幅1m前後・深さ20cm内外の溝状遺構が検出された(SD-03~05)が、円形には復元できない。

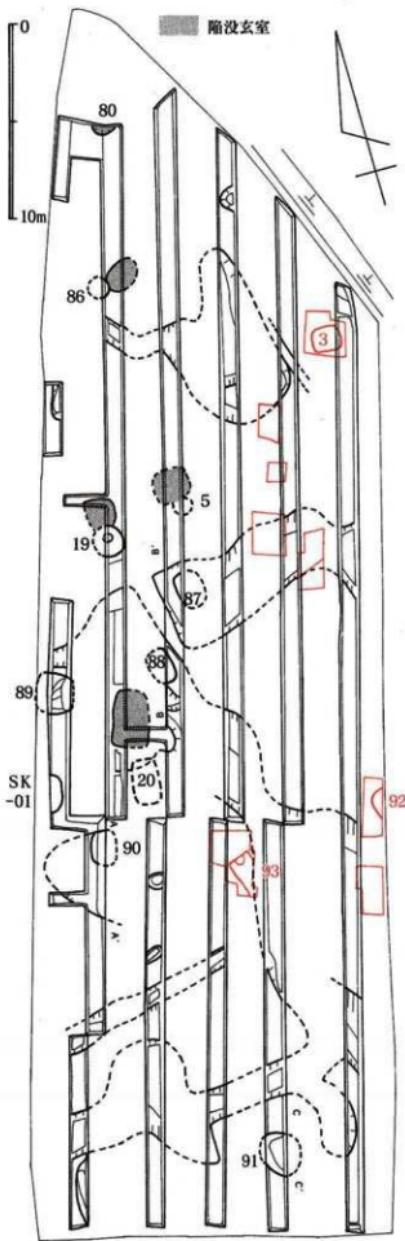
1号墳の「前方部」確認のため、第16~18試掘溝を設定したが、近現代の溝状遺構(SD-06)と中世以前と思われる不整形な溝状遺構(SD-07)を検出したにすぎない。

結果的には、円墳に伴う周溝や主体部は存在せず、1号墳は円墳であることが断定される。第16~18試掘溝下のレーダー波形は、地形の基底であるⅢ層の表面起状態であると思われる。

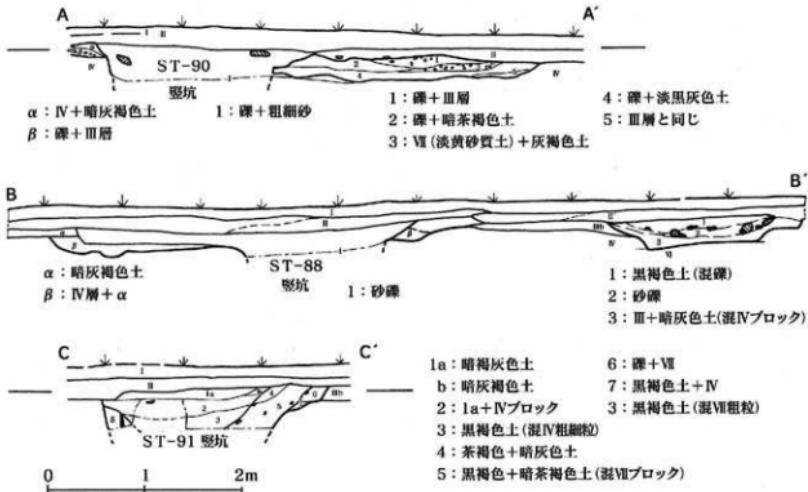
第4節 M区の遺構確認調査(第12・13図)

平成10年度、分布密度を調べるために当畠地を借用して、試掘調査を実施した。その結果、19・20号と、80・86~91号の9基の地下式横穴墓と土坑1基(SK-01)のほか、幾筋もの不定型な溝状遺構や、玄室掘削排土(砂礫層)の広がりを確認した。その後、鹿児島大学の学術調査によって87~91号墓と溝状遺構が調査されたほか、新たに5号墓が発見された(5号と付した理由は後述する)。

地中レーダー探査は学術調査後(玄室内までシラスで埋め戻している)に、密集する地



第12図 M地区 遺構分布図 朱色は2次調査



第13図 M地区 断面層序図

区でのサンプリング探査を実施した。結果的には5~6ヶ所の新たな反応(玄室は空洞であると推定されるが、堅坑に著しい反応がある)がみられたので、確認調査を実施したところ3基の堅坑を検出した。

93号墓の堅坑は砂礫で充填されていたが、玄室側短辺中央には、半円形・直径58cmの黒色土が充填した柱穴が穿たれており、追葬の目印と思われる。

M区の北東端では、堅坑上部閉塞タイプの墳墓を検出した(第14図)。堅坑は短軸126cm・長軸150cmの隅丸方形を呈し、深さは8cm遺存する。閉塞石は3枚である。堅坑2段目は44×57cmの長方形で、短辺に狭門がある。堅坑下部には、現代の湯呑み茶碗6~7点と缶詰めの空缶、搔き氷の袋などが入っていた。狭道天井は崩落していたが、玄室は遺存状態が良かった。玄室は平入り両袖(非対象)で略台形プランを呈する。奥行きは130cm、最大幅は180cmを測る。床面から80cmの所に鈍角の底があり、天井頂部には垂木が削り出されている。副葬品も人骨も遺存せず、形状の類似や30年前の湯呑み茶碗等に加えて、標柱設置の際に閉塞石の1つが折れて落下して発見・調査後、折損部に近辺の川原石を置いて再閉塞したことが推定されることから、当墳墓が3号墓(第6図)に相当すると判断できる。

5号墓は、「栗原氏調査の地下式古墳の西南約5mのところに」という記述⁽³⁾(実際は10m離れている)と、鹿児島大学の調査による堅坑へ狭道の状況が同報告書の「堅穴の上を塞いでいた蓋石をもって堅穴の一部を補強⁽⁴⁾」という記述と合致することや、前例と同種の湯呑み茶碗等の出土から5号墓であると断定した。

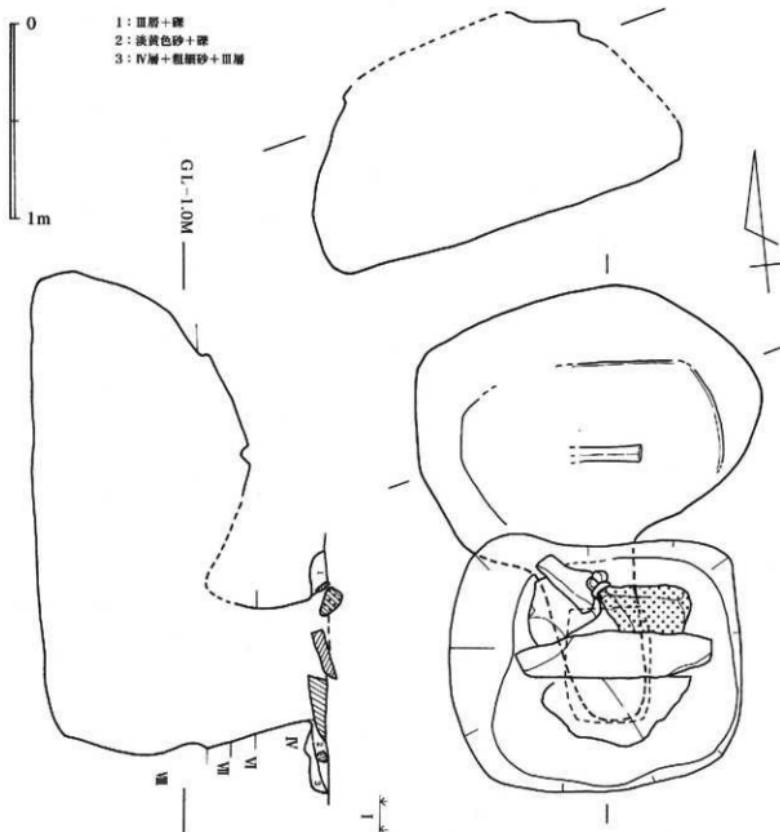
M区では、13基(+1~2基の未確認墓が存在する可能性あり)分布していることが判明した。

第5節 1号墳周辺（L区）

1号墳の北西12m程に位置する地下式横穴墓群（45号墓）のサンプリング探査をした際、1号墳の周溝の有無も確認できればと思ったが、探査では不明であった。

平成10年度、9ヶ所に試掘溝を設定し（第15図）、第6試掘溝で周溝状の落ち込みと、f字形鏡板付轡と辻金具を検出、第7試掘溝においては周溝内側の肩に接する堅坑状の掘込み（SK-02）を検出した。SK-02を40cm程度掘り下がったところ、剣菱型杏葉1点が出土したので調査を止めた。

平成11年度、第6・7試掘溝一帯を地中レーダー探査に加えて実施したところ、SK-02の西側（第10試掘溝）と東側（第13試掘溝）に強い反応がみられ、SK-02の玄室は北に弱い反応・東に強い反応がみられた（第11・12試掘溝）。これらを検証するために確認調査を実施した結果、南



第14図 ST-03 遺構実測図 アミ目の石は川原石

縁に、幅2~3m・深さ10~15cmの周溝状掘込みを検出した。第13試掘溝では周溝が途切れ、陸橋になることも判明した。同溝覆土に直径1m程度の砂礫が集中しており、これにレーダーが強い反応を示したようである（第17図）。

西端の第10試掘溝では、周溝が完全に埋積したのちに構築された地下式横穴墓の竪坑が検出された（94号、後述）。玄室は北東墳丘下に、主軸を墳丘中心に向いている。

1号墳の主体部分と考えていたSK-02は、結果的には馬墓の土坑（第19図）で、前年度出土した杏葉の24cm下から対となる杏葉と雲珠を検出した。土坑は、長軸2.0m・短軸0.9~1.06mの橢円形を呈し、深さは0.6~0.9mを測る。土坑の西側は傾斜が緩く、肩部から轡と辻金具が出土していることから、頭部を西に、尻部を東に埋葬されたと推定される（第20~22図）。

着装品としては、身の長さ12.9cmと13.4cmの剣菱型杏葉1対（1・2）と、長さ13cm余りの「字型鏡板を付す轡1点（4・6）、円環を有する雲珠（3）、環状に組まれた辻金具（7・8）、鉤具（5）の

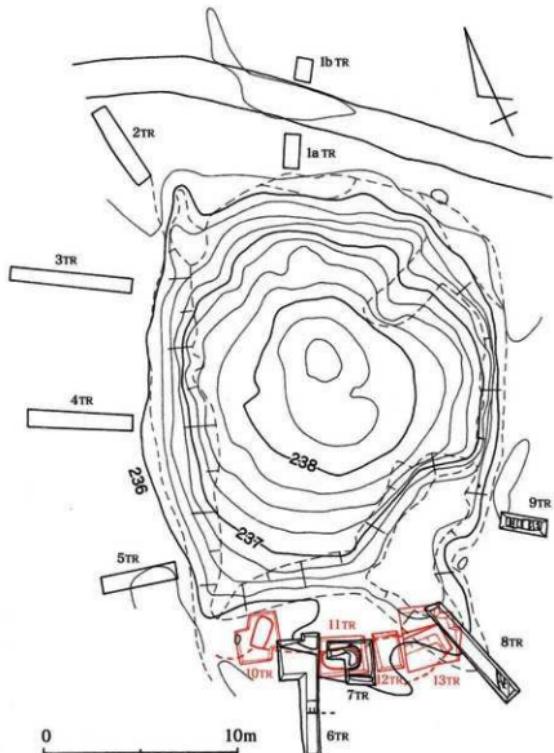
ほか、辻金具の残欠がある。7・8については、位置関係が定かでない。

当地下式横穴墓群での馬具の出土は希であり、杏葉は市内唯一のものである。技術的には何の装飾もない一枚造り（「字型鏡板も同様）であるが、山間部における首長級の所有物であろう。

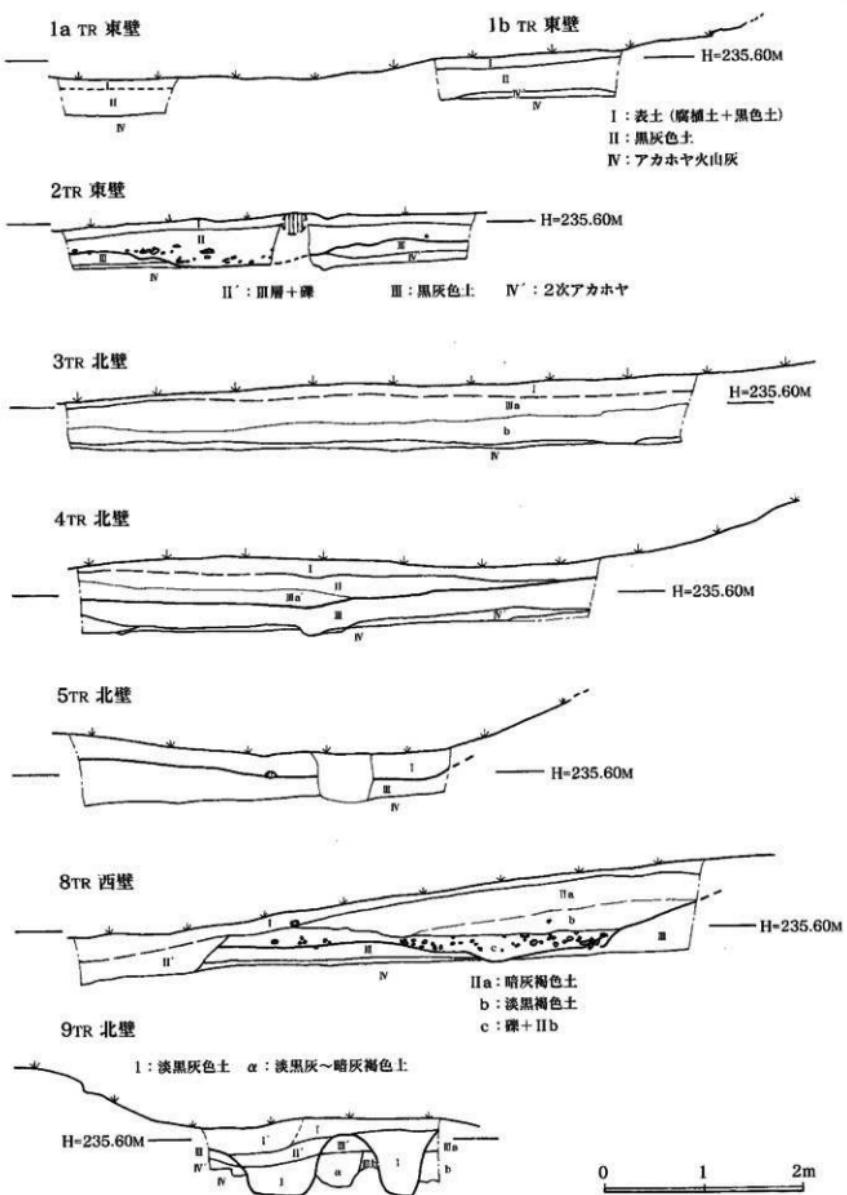
第6節 小結

2次にわたる地中レーダー探査と確認調査によって、当墳墓群の分布範囲を絞り込むことができた。

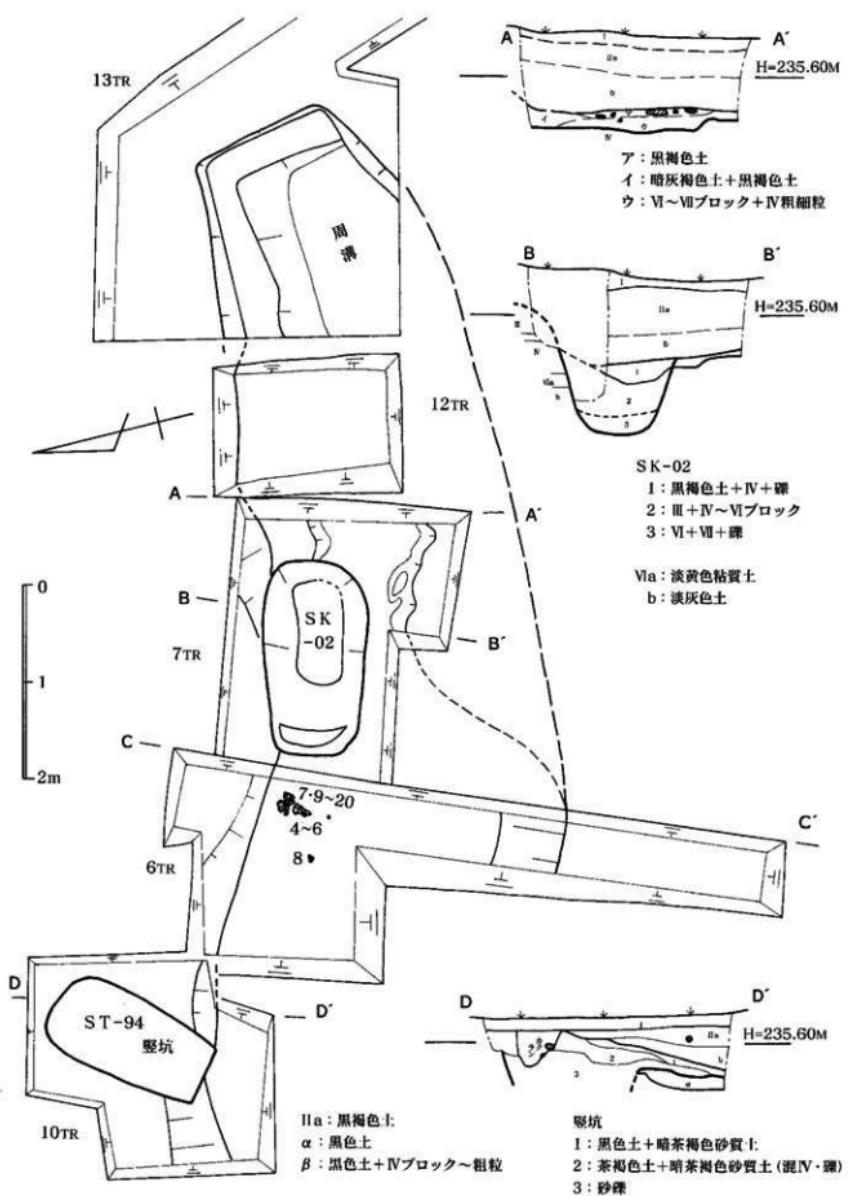
結果的には、第8図の分布域推定ラインと大きくは変わらないが1号墳が東北端に位置し、南縁は密度が薄いことが判明



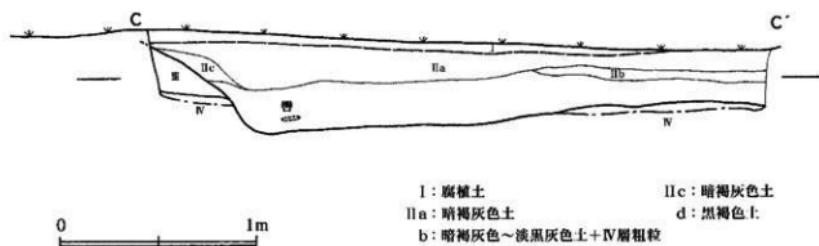
第15図 1号墳周辺・L地区 遺構分布図 朱色は平成11年度調査



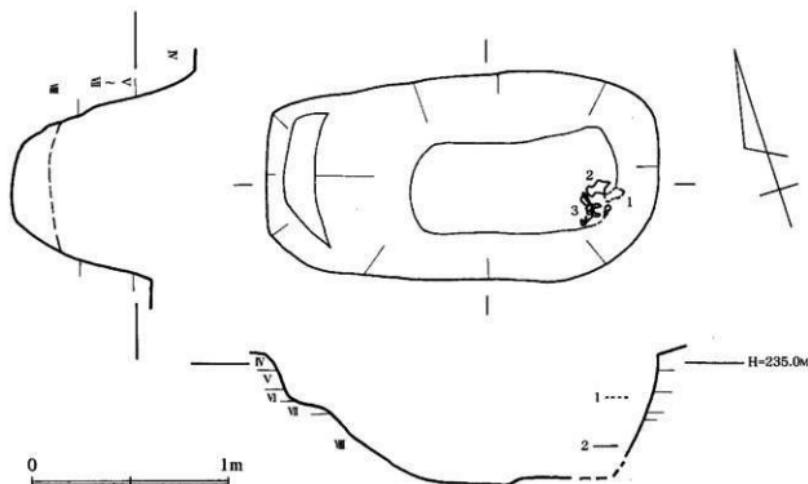
第16図 1号墳周辺試掘溝層序図



第17図 1号墳周辺 (L地区) 試掘調査 遺構分布図 (平成10・11年度分を合成)



第18図 1号墳周辺 第6試掘溝東壁層序図



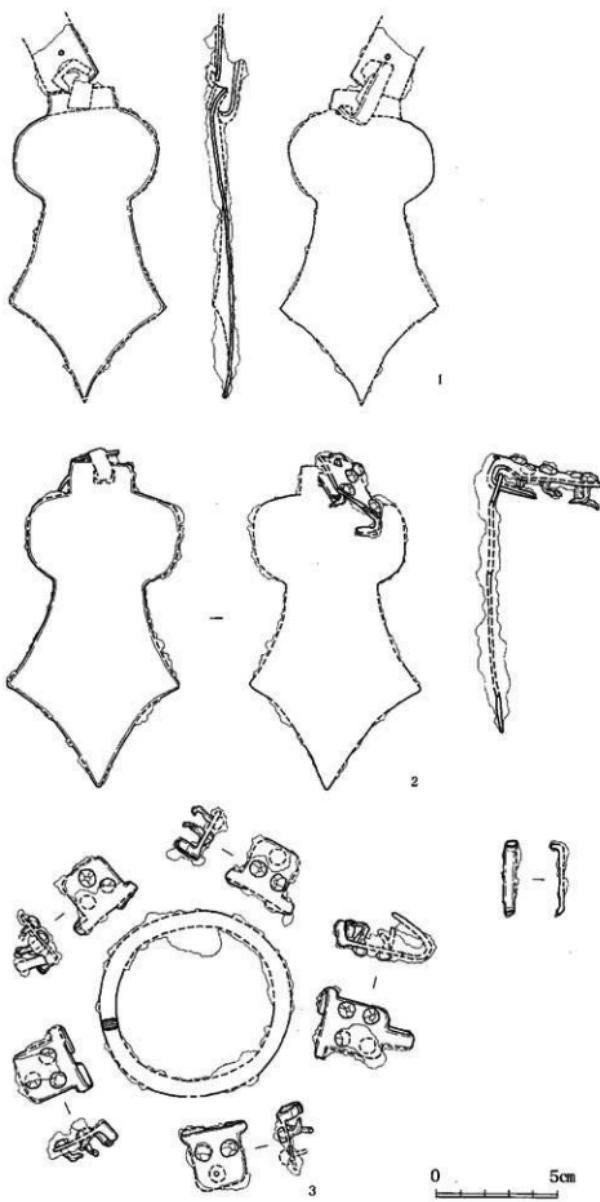
第19図 SK-02 遺構実測図

した(第23図)。なお、図中の「ア」地区は削失した地区、「イ」地点は宅地造成の際に陥没したという聞き取りから推定している。

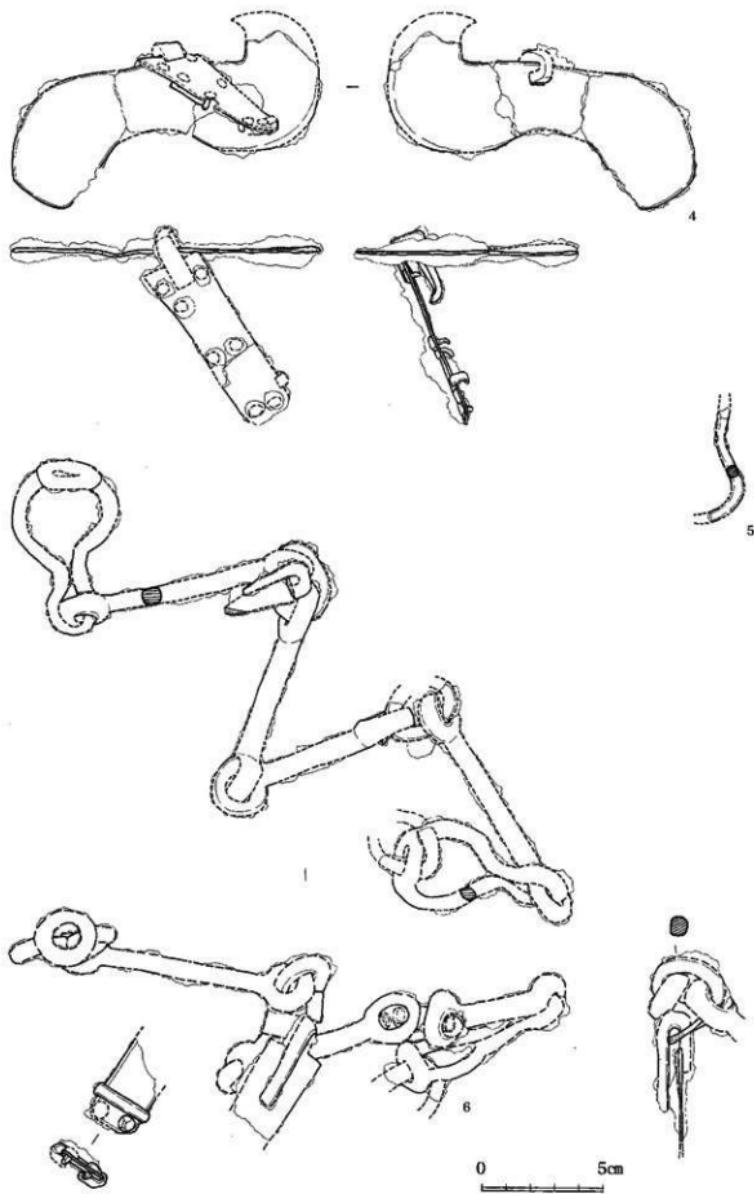
以上、当墳墓群の分布は、134,500m²に及び、範囲をほぼ推定できた。

註

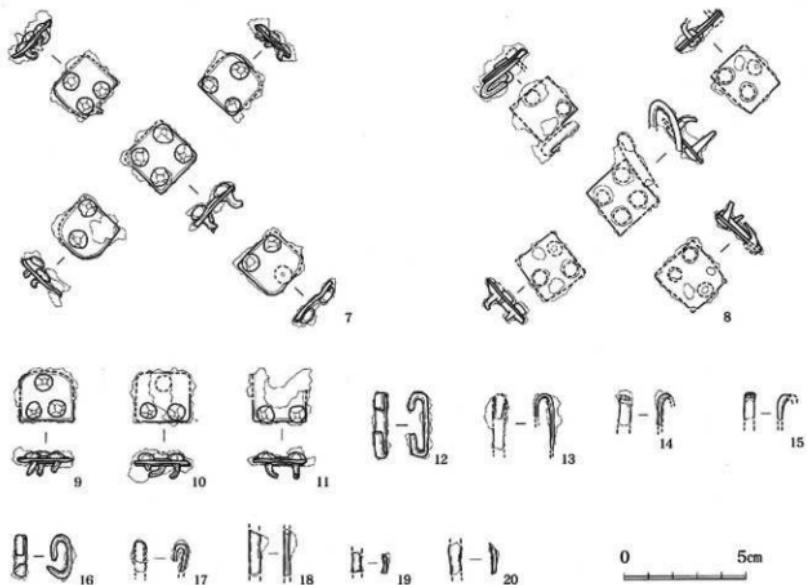
- (1) 県文化課の東吉幸氏に探査結果を御教示頂いた。
- (2) 鹿児島大学の学術調査により、溝状遺構は、墳丘封土の原材として土を剝削・運搬した形跡と考えられる。
- (3) 石川恒太郎 1969 「えびの町平松の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第14集
- (4) 同上



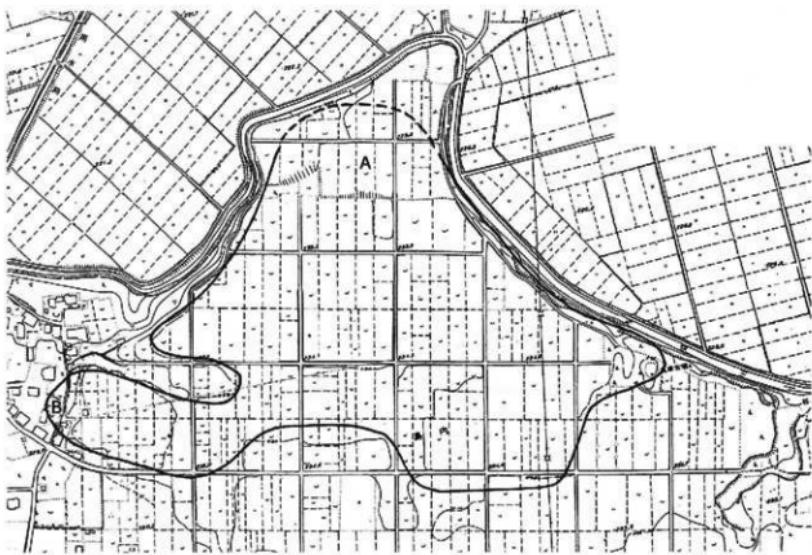
第20図 SK-02 出土遺物実測図



第21図 SK-02 西肩部出土遺物実測図(1)



第22図 SK-01 西肩部出土遺物実測図(2)



第23図 島内地下式横穴墓群 分布域 (1:5,000)

第5章. 発掘調査

平成元年8月、県文化課による12号墓の調査以来10年ぶりに「陥没した」という通報が入った。それまでも、毎年数基は陥没していたようだが通報せず、耕作者自身で埋められていた。平成以降は市教育委員会が敏速に対応し、人骨も全て取り上げてシラスで埋め戻す作業を繰り返すうちに理解が深まり、平成7年以降は隠れなく調査している。

平成10年度、遺構番号の単純化のために通し番号を付けた。以下、13号墓から101号墓までの調査（鹿児島大学による学術調査-69~79・88~91号墓-については概略にとどめている⁽¹⁾について報告する。

第24図の分布図には通し番号で、調査順に付している。ただし、2号墓の位置だけは不確定（3号にかけての縁辺部に位置したことは事実）である。

S T - 1 3 (第25図)

分布域のやや西寄りに位置し、主軸（豎坑からの玄室方向とする）を北に向ける羨門閉塞タイプである。調査日程に余裕があったので豎坑も検出し、半截した。豎坑は、長軸1.87m・短軸1.31mの梢円形を呈し、掘鉢状に1.0m掘削される。底面の長さは0.65mになり、羨門部は6cm高くなる。羨門は大きな板石で中央を塞ぎ、隙間を小さい板石と疊で塞いでいる。羨道は、天井部の長さ0.25m前後、床面の長さ0.7m前後、高さ0.42m前後を測る。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、天井はドーム型に近い。幅は1.47~1.60m、奥行き0.82mと狭く、東頭位の被葬者2体がやっと納まるスペースである。1号人骨は男性で、手頭鍼1本（22）が右脇腹横に、刀子1本（23）が頭部右横に副葬されていた。2号人骨は遺存度が悪く、性別も不明である。加えて、豎坑には追葬が認められないことから、再葬された可能性もある。⁽²⁾

S T - 1 4 (第26図)

分布域の中央やや南東寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。豎坑プランは略台形を呈し、長軸2.35m内外、短軸1.76~2.33m、最深部の深さは1.42mを測る。法面はステップ状に掘られ、断面観察では2回の追葬が認められる。羨門は、2枚の板石で塞がれる。羨道は長さ0.9m内外、幅0.7~0.94m、高さ0.96mを測り、床面は玄室の手前で0.20m高くなる。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、幅は2.10~2.36m前後、奥行きは1.70mを測る寄せ棟タイプである。人骨は殆ど依存していないが、副葬品の位置と追葬の回数から被葬者は3体と思われ、各々刀子1本（23~25）が副葬されている。

S T - 1 5 (第27図)

分布域の東南部に位置し、主軸を東南東にとる羨門閉塞タイプである。豎坑は未調査である。羨道は、IV~V層ブロックで塞がれている。

玄室は平入り両袖長方形プランを呈し、天井は北側が寄せ棟、南側が切妻形の折衷型で、羨道部から奥壁へ向かって徐々に低くなる。被葬者は北頭位の2体で、共に頭部に赤色顔料が塗布されている。1号人骨は女性で、左腕部においてガラス玉61点(29~86)を検出した。2号人骨との間にある刀子(27)は1号人骨の副葬品と考えたい。2号人骨は男性で、耳環1対(87・88)を着装し、刀子1本(26・28)が副葬されていた。ガラス玉は、藍~濃紺色を呈する。

ST-16 (第28図)

分布域の北西寄りに位置し、主軸を北にとる堅坑上部閉塞タイプである。遺存する堅坑1段目は直径1m内外の円形を呈し、2段目は直径0.50m内外の不整円形を呈する。閉塞石は2枚であるが、すでに崩落していた。堅坑の深さは1.48m、羨道は幅0.64m内外・長さ0.2mと短い。

玄室は平入り両袖隅丸長方形~梢円形を呈し、天井はドーム型である。幅は、1.88m、奥行きは1.36mを測り、高さは0.98m位と考えられる。被葬者は、東頭位の2体である。1号人骨は女性で、主頭鎌3本(89~91)を右大腿部横に副葬している。2号人骨は男性で、左足先前方に長頭鎌5本(92~96)を副葬している。鉢は南を向いており、矢柄も完全なままだったと思われる。

ST-17 (第29図)

分布域の北東寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、板石で閉塞している。羨道は、幅0.53~0.64m、長さ0.50m、高さ0.58mを測る。

玄室は平入り両袖台形を呈し、天井はドーム型である。幅は1.90m、奥行き1.26mを測る。屍床は0.1m高くなり、高さ0.68m内外になる。被葬者は女性1体で、刀子1本(97)が頭の左横に副葬されている。

ST-18 (第30図)

分布域の南縁中央寄りに位置し、主軸を東にとる羨門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるがおよその位置を記録した。羨道は、IV層のブロックで塞がれ、幅0.64~0.90m、高さ0.84mを測る。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、天井は寄せ棟型である。幅は1.60~1.73m、奥行きは0.69~0.90mを測る。被葬者は北頭位1体であるが、殆ど遺存していない。なお、骨片の中に、赤色顔料が認められ、頭骨のみ塗布されていたと推定される。

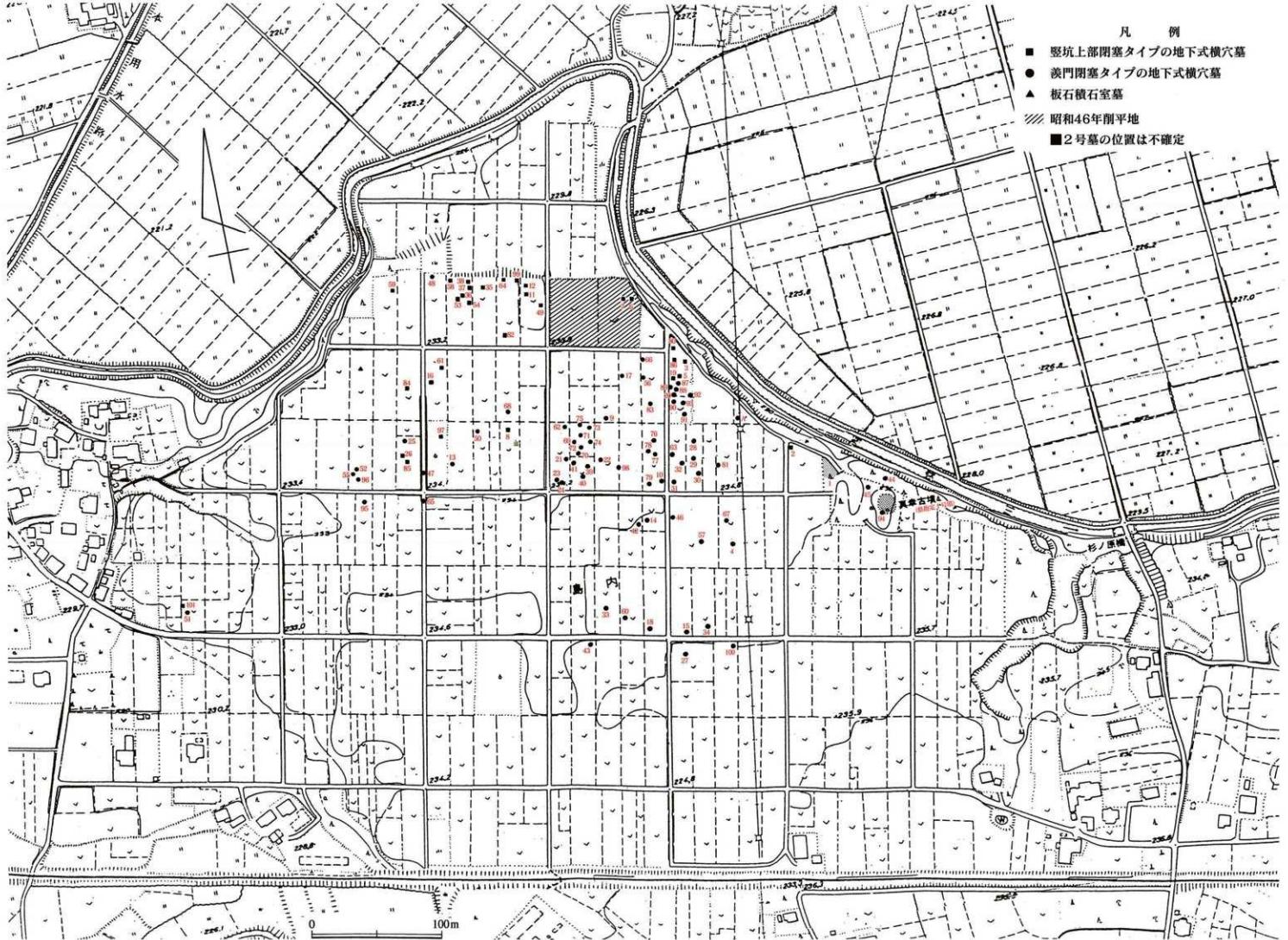
ST-19 (第31図)

分布域の北東密集部に位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。堅坑上部は未調査であるが、4枚の板石を確認した。羨道は退化し、玄室床面は0.20m低くなる。

玄室は平入り両袖隅丸略方形を呈し、幅1.50~1.90m、奥行き1.60mを測る。天井は、寄せ棟型と思われる。被葬者は2体で、初葬の2号人骨は西頭位、頭骨に赤色顔料が塗布されている。1号人骨は東頭位で、頭骨に赤色顔料が塗布され、頭骨左側に鉄劍1振(430)と主頭鎌1本(99・100)が副葬されている。

凡 例

- 壁坑上部閉塞タイプの地下式横穴墓
- 畑門閉塞タイプの地下式横穴墓
- ▲ 板石積石室墓
- ▨ 昭和46年削平地
- ■号墓の位置は不確定

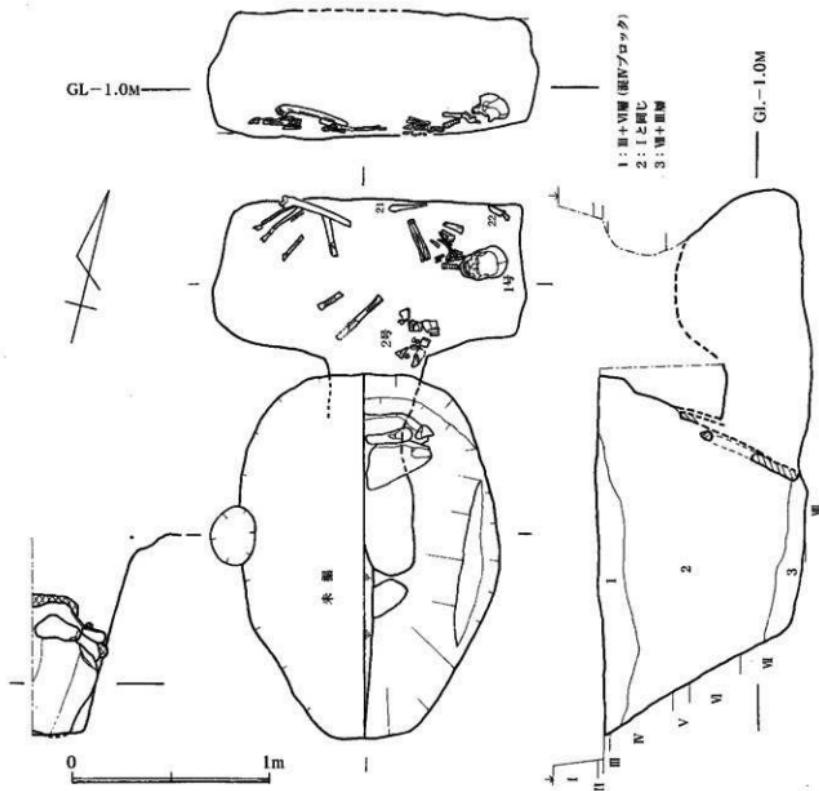


第24図 島内地下式横穴墓群 分布図 (1 : 2,500)

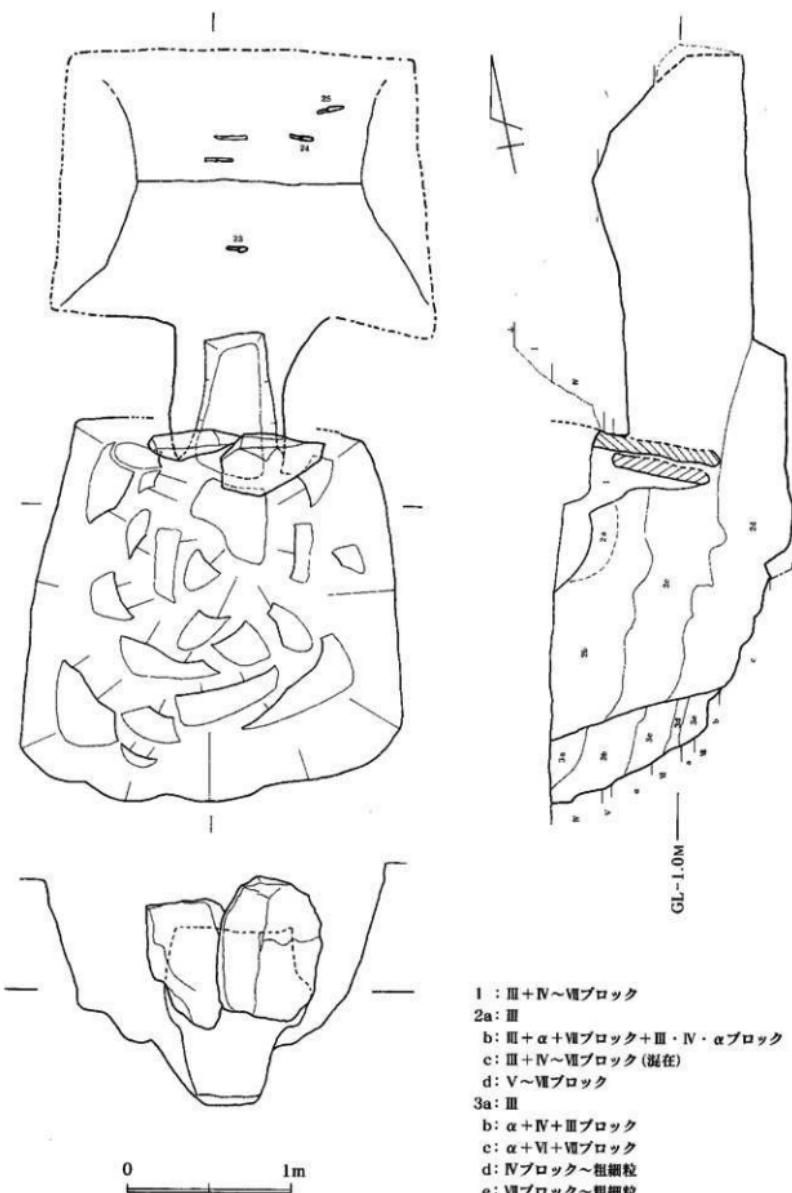
ST-20 (第33図)

分布域の北東密集部に位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、羨門を塞ぐ2枚の板石を確認した。羨道は幅0.62~0.86m、長さ0.50m内外を測る。

玄室は平入り両袖隅丸台形を呈し、奥壁が短い。幅は1.50~2.42m、奥行き2.05m、高さ0.96mを測る。被葬者は東頭位4体と、南頭位1体で、遺存状態から1号→2号→3号→4号→5号の順に埋葬されたことがわかる。1号人骨は痕跡程度で、副葬品も無い。他の人骨頭部と5号人骨の上半身には、赤色顔料が塗布されている。3号は男性で、2・3号の頭部右横には、刀子各1点(114・116)が副葬されている。4号人骨(男性)頭部の横には、圭頭鐵1本(101)と、骨鐵19本(117~135)、少し離れて圭頭鐵1本(102)が副葬されている。5号人骨は女性で、上半身右側に鉄剣1振



第25図 ST-13 遺構実測図



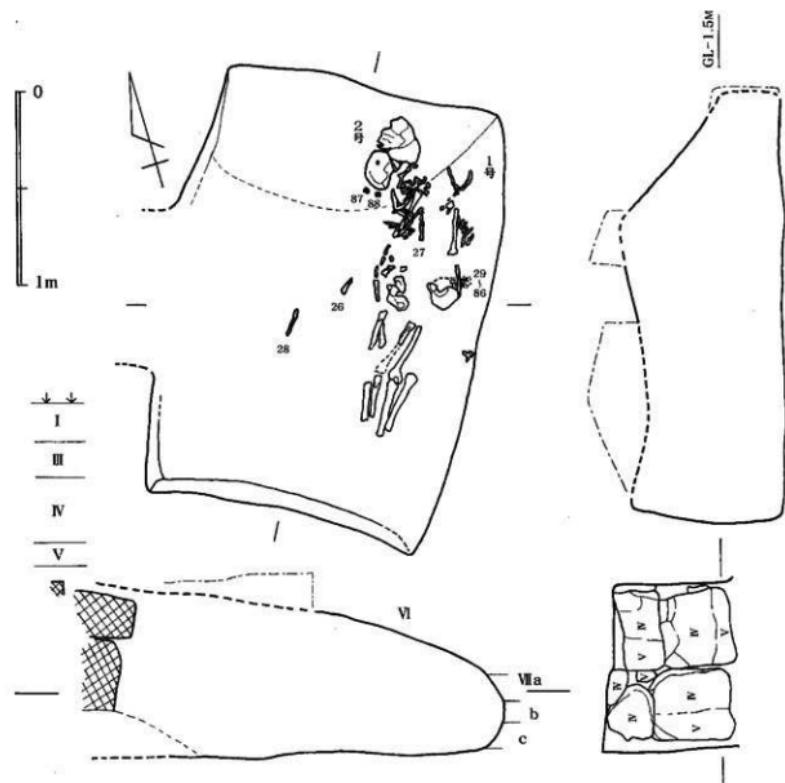
第26図 ST-14 遺構実測図

(431)と、主頭鎌11本(103~113)、刀子1本(115)が副葬されている。鉄劍は鹿角装で、直弧文が施され、塗朱される(第71図)。骨鎌は長さ12.5~14.5cmのもの殆どで、裏面に櫛腔痕を残すものが多い。

ST-21 (第36図)

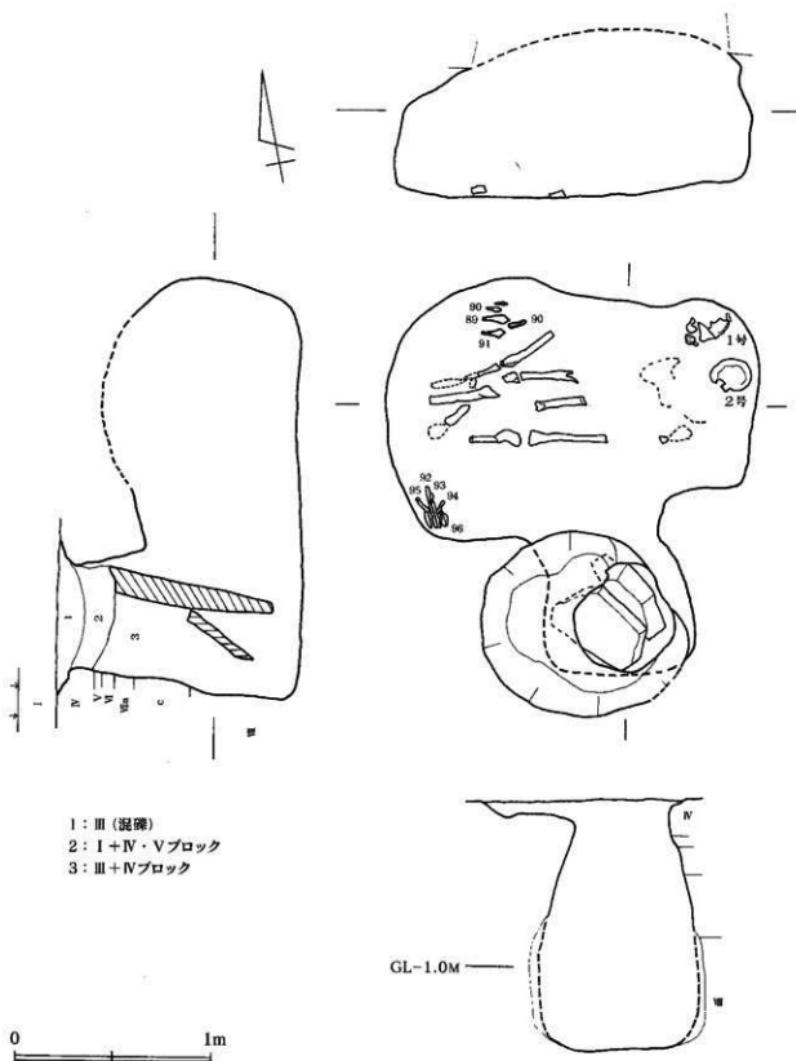
分布域のほぼ中央部に位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。羨坑は未調査であるが、板石で閉塞している。羨道は、幅0.50~0.62m、長さ0.50m、高さ0.51~0.64m(推定)を測る。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、天井は寄せ棟である。幅は2.0~2.18mで奥壁が若干広く、奥行きは1.80m、高さは推定0.84mである。壁面の中位~上位は、赤色顔料が塗布されている。被葬者は東頭位3体で頭部に赤色顔料が塗布され、遺存度には段階的差がある。初葬は1号人骨(男性)で、頭部と少量の骨の痕跡を残す程度であるが、前肩を側壁に向かた横矧板錦留短甲1領(146)と、横矧板錦留衝角付冑1鉢(147)、蛇行劍1振(139)、鉄矛1本(138)、冑の下から鉄斧1点(136)と刀



第27図 ST-15 遺構実測図

子1本(145)、蛇行剣の下から鉈1本(137)と刀子1本(143)、圭頭鏡2本(148・149)が副葬されたと思われる。短甲と背の間に位置する蛇行剣の把は背の横から出土しており、当剣は立て掛けであったものと推定される。3号人骨(男性)の頭骨は鉄鎌集中部に遺存していたが、図化していない。



第28図 ST-16 遺構実測図

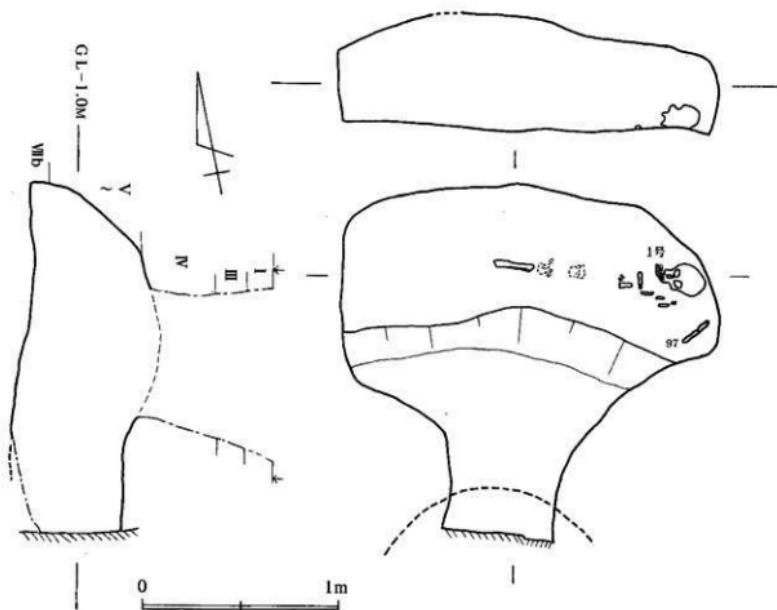
骨の遺存度も悪いが、胸部左側に蛇行剣1振(141)と刀子1本(144)、長頭鎌16本(150~171)が副葬されていたと思われる。鉄鎌は一括として扱ったが、主頭鎌2本を3号人骨に帰属させた。2号人骨(女性)は遺存度が良く、頭骨と屍床に赤色顔料が塗布されている。頭部左横には、蛇行剣1振(140)と刀子1本(142)が副葬されていた。

短甲は、前胴の高さ33.8cm、後胴の高さ43.6cm、幅44.4cm、くびれ部の幅29.5cm、重さ4.85kgであり、厚さ2mmの横矧板を前胴6枚、後胴7枚、約1cm重複させて銛留めしている。覆輪から豊上にかかる網製のワタガミ繒を固定する孔は、前胴に1対2孔、後胴に3対6孔がある。蝶番は右側に2ヶ所あり、左第1長側は短い鉄板で継がれている。⁽³⁾

胄は、4枚の横矧板で19.6×25.6cmの鉢を作り、衝角付き伏板で覆って銛留される。高さは14.5cm、重さは1.5kgを測る。頂部には、3対6孔が縦長に穿たれている。綒は3枚で、端部には革組覆輪が遺存する。

ST-22 (第42図)

分布域の中央やや東寄りに位置し、主軸を北にとる漢門閉塞タイプである。豊坑は未調査である



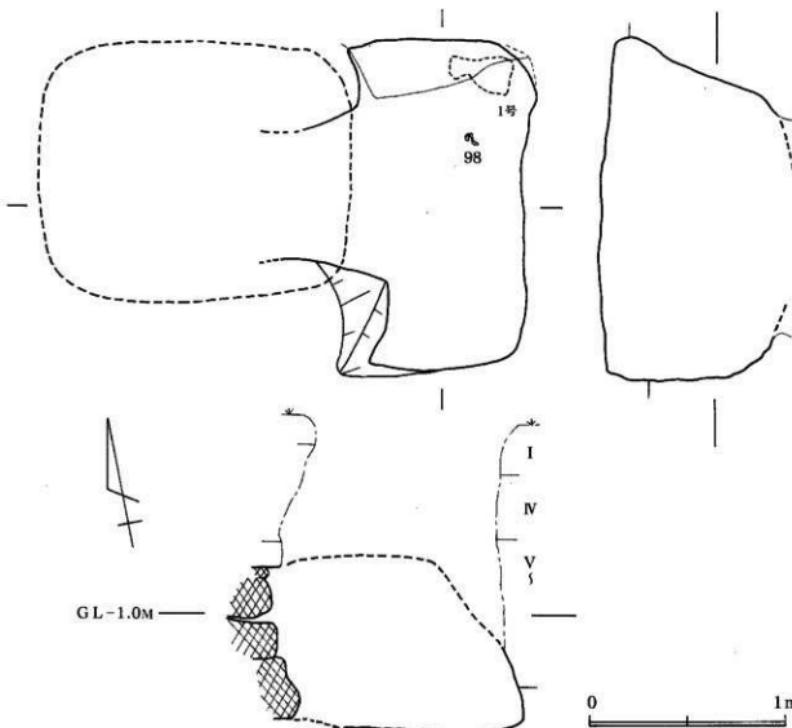
第29図 ST-17 遺構実測図

が、羨門を板石で閉塞している。羨道は幅0.50~0.70m、長さ0.82m、高さ0.70m内外を測り、長いのが特徴である。そのせいか、玄室との主軸がズれている。

玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈し、幅2.0~2.2m、奥行き1.70m、高さ1.0mを測る。被葬者は南頭位の4体であるが、4号人骨は遺存していない。人骨の遺存度からみると4号→1号→2号→3号の順に埋葬されたと推定される。4号には鉄剣1振(174)が、1号頭骨(男性)の右側・2号頭骨の右後には、刀子(172)と圭頭鎌7本(175~181)が副葬されている。3号人骨(男性)頭部左横には、刀子1本(173)が副葬されている。

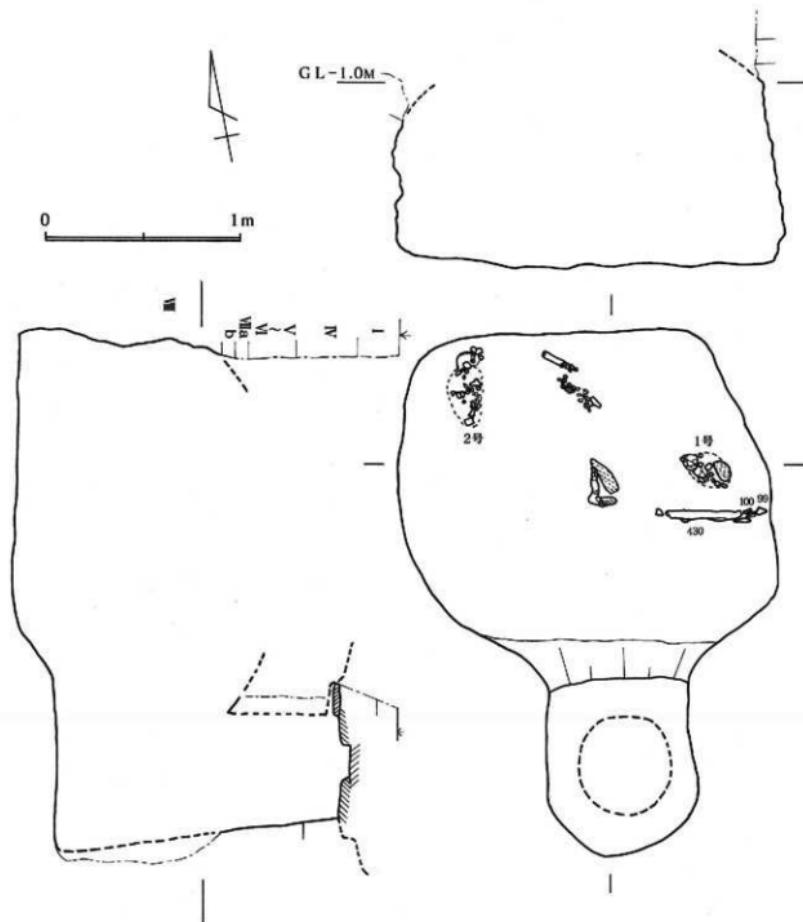
ST-23 (第43図)

分布域のほぼ中央に位置し、主軸を北に向ける羨門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、IV層ブロックと板石の閉塞がみられ、前者は初葬時、後者は追葬時の閉塞材と思われる。羨道は幅0.74m内外、長さ0.70m、高さ0.54m前後を測る。

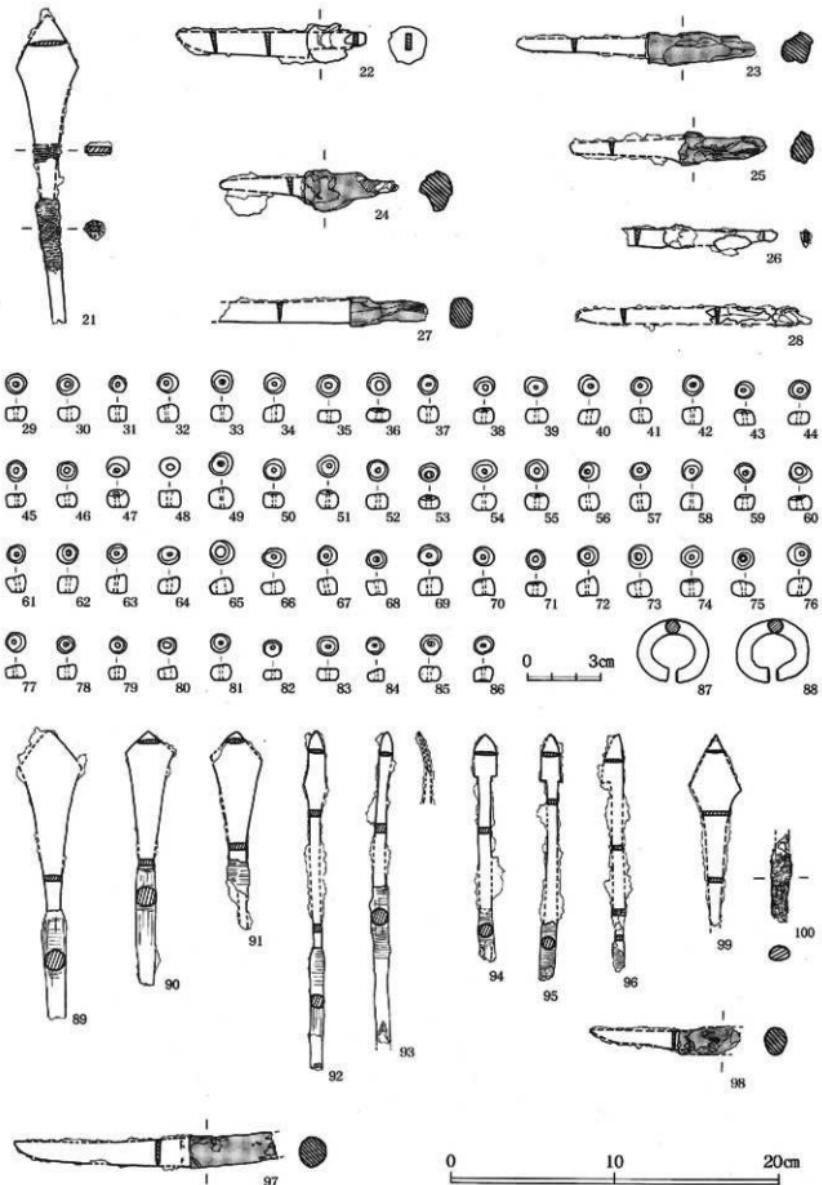


第30図 ST-18 遺構実測図

玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈するが、北西隅は大きく彎曲する。最大幅は2.78m、奥行きは1.80m、高さ0.64~0.74mを測る大型である。人骨の遺存状態から、3号→2号→1号の順に埋葬されたと思われる。3号は人骨が遺存しないが、副葬品の位置関係から、西か東の頭位で、主頭鎌3本(183~185)と刀子1本(186)が副葬されたと推定した。2号人骨は歯だけ遺存していたが、南頭位で、左前腕に貝鏡1点(288)を着装、右腕横に刀子2本(187・188)を副葬している。1号人骨は南頭位で、頭部に赤色顔料が塗布されている。右横に鉄刀1振(432)、腹部に鉄剣1振(182)、左足横には長頭鎌38本(189~230)と骨鎌43本以上(237~287)が束になって漆塗り容器に入れられ（漆



第31図 ST-19 遺構実測図



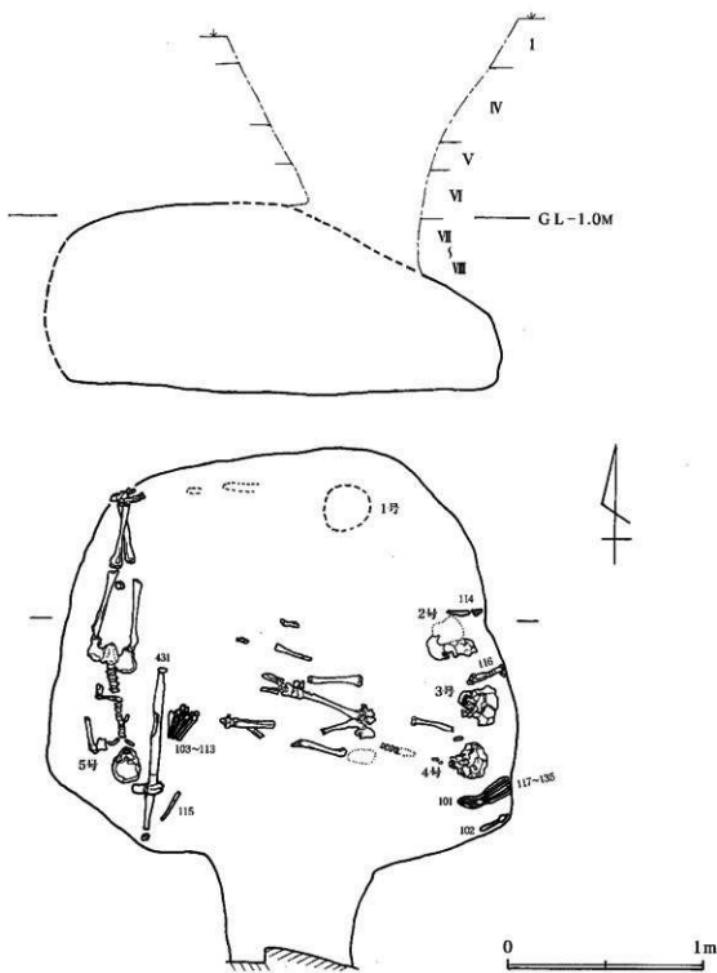
第32図 ST-13~19 出土遺物実測図

21~22: ST-13, 23~25: ST-14, 26~88: ST-15, 89~96: ST-16,
97: ST-17, 98: ST-18, 99~100: ST-19 アミ目は鹿角

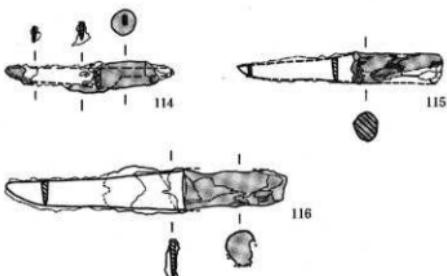
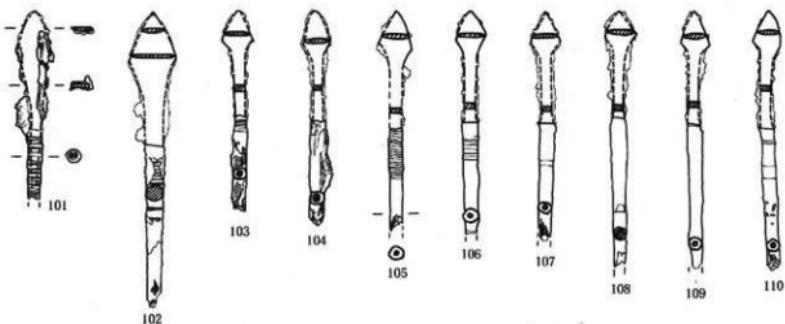
膜が出土)で副葬されている。182の鉄劍は折損し且つ腹部に鎧があり、副葬品よりも殺傷物としての可能性が高い。

ST-24 (第44図)

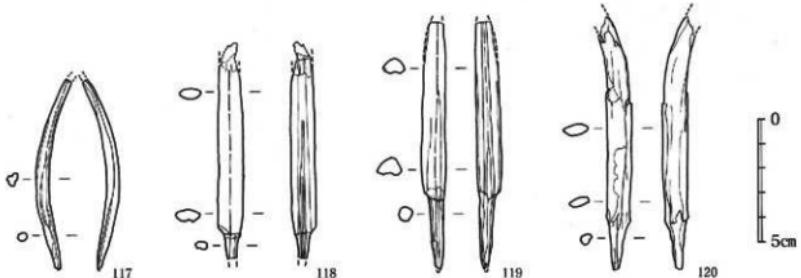
ST-23の南東に位置し、主軸を北北東にとる羨門閉塞タイプである。堅坑および羨道は未調査であ



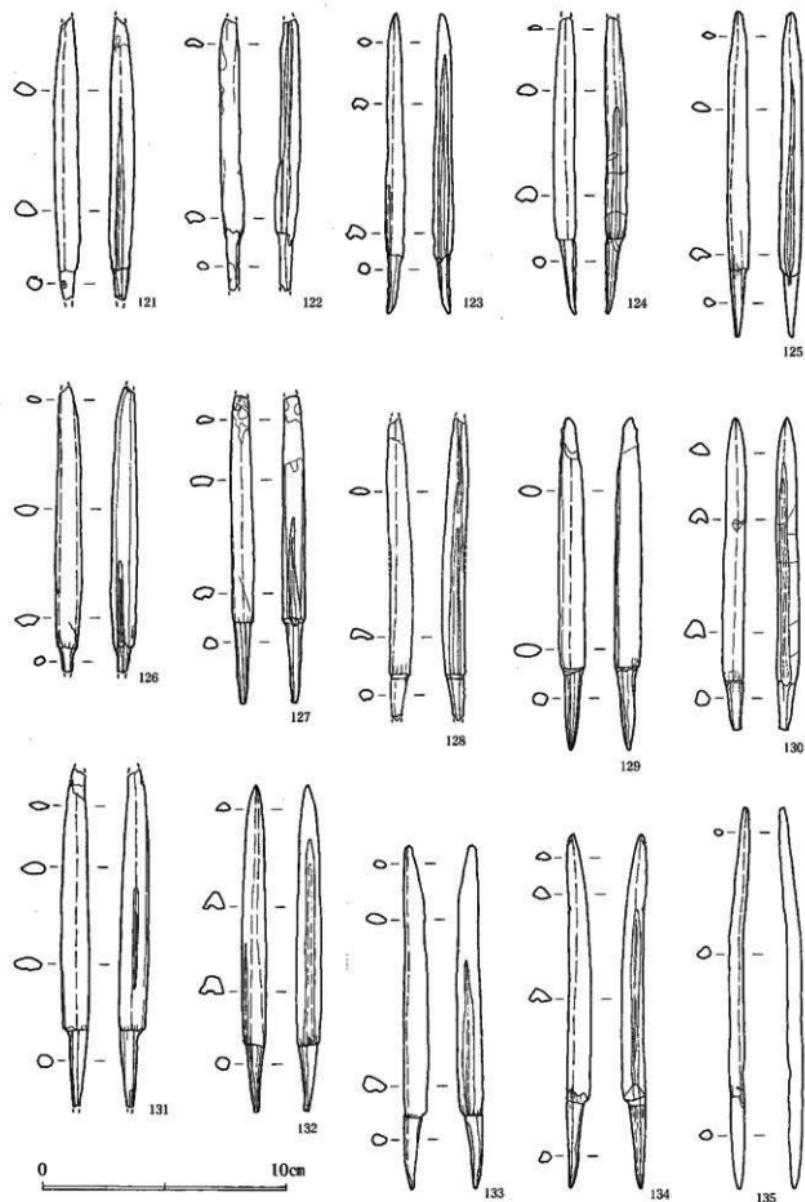
第33図 ST-20 遺構実測図



0 10cm



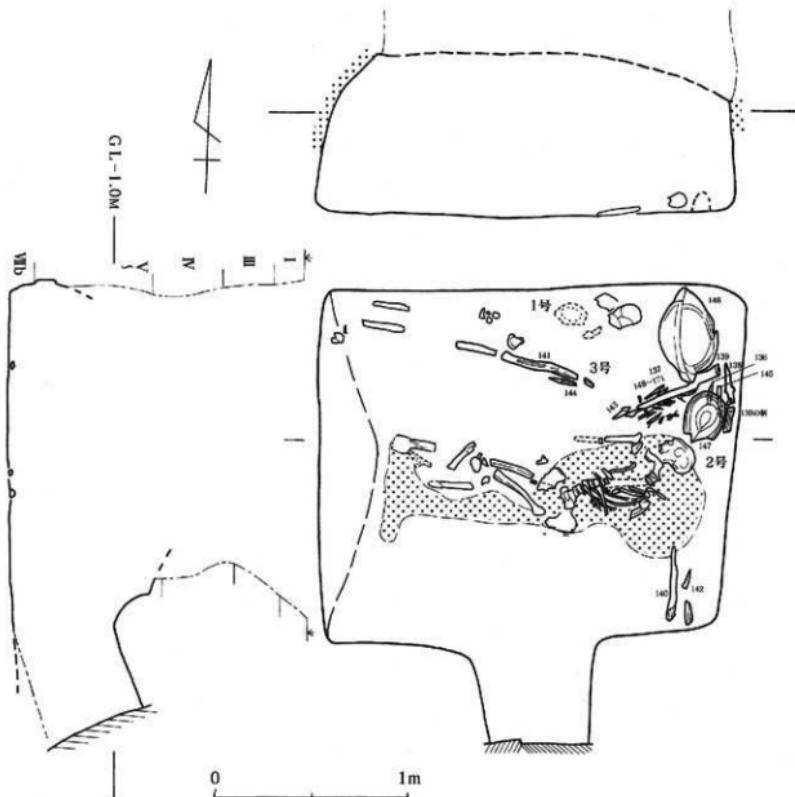
第34図 ST-20 出土遺物実測図(1)



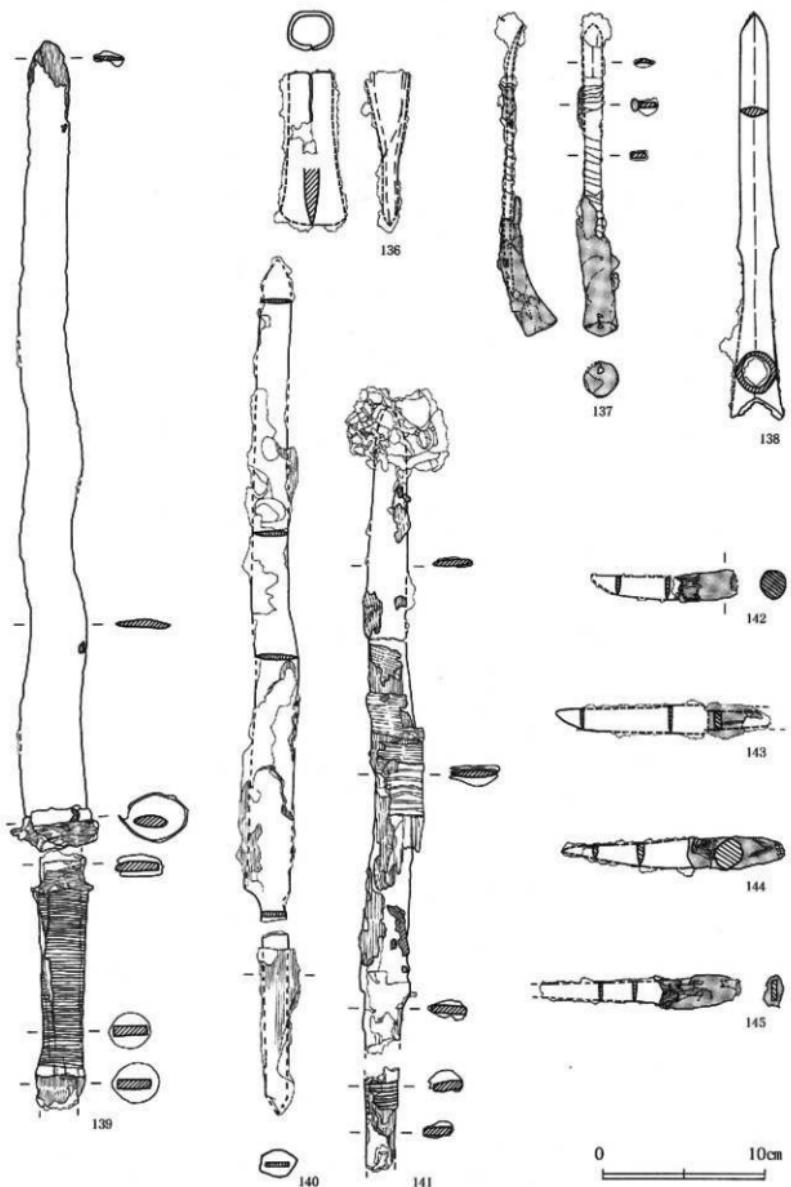
第35図 ST-20 出土遺物実測図(2)

るが、狭道の幅は0.60m前後、高さ0.76m前後と思われる。狭門閉塞材は、板木と推定される。

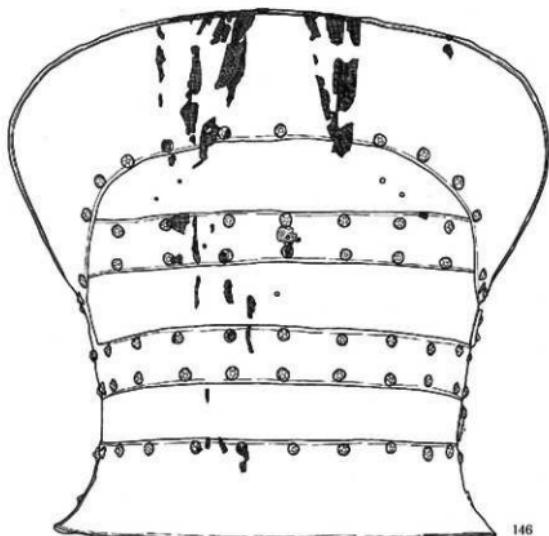
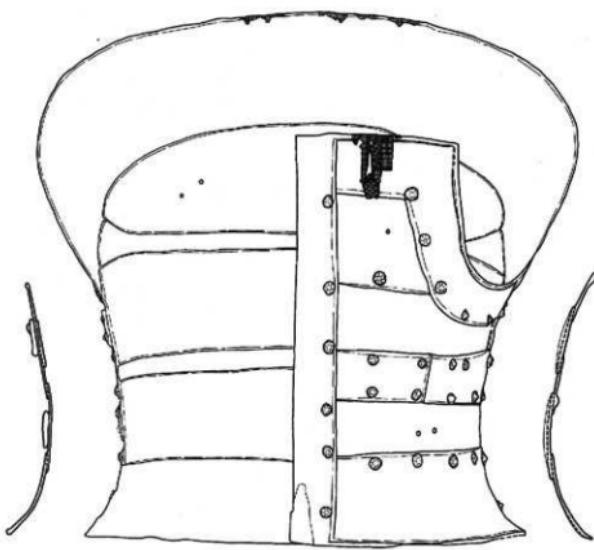
玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈し、天井は崩落が著しいために形状不明である。幅は2.0~2.39m、奥行き1.70mを測る大型タイプである。被葬者は3体と推定され、人骨の依存度から3号→2号→1号の順に埋葬されたと思われる。3号人骨は遺存せず頭位も不明であるが、圭頭鏡1本(231)と三角形鏡2本(232・233)、骨鏡2本(289・290)を副葬している。2号人骨は女性で南頭位、副葬品は無い。1号人骨は男性で南頭位、左腕横に蛇行剣1振(236)、下肢部に箆1本(234)と刀子1本(235)、足先に骨鏡22本(291~312)が副葬されている。236の把部には、鹿角装具が遺存していた。



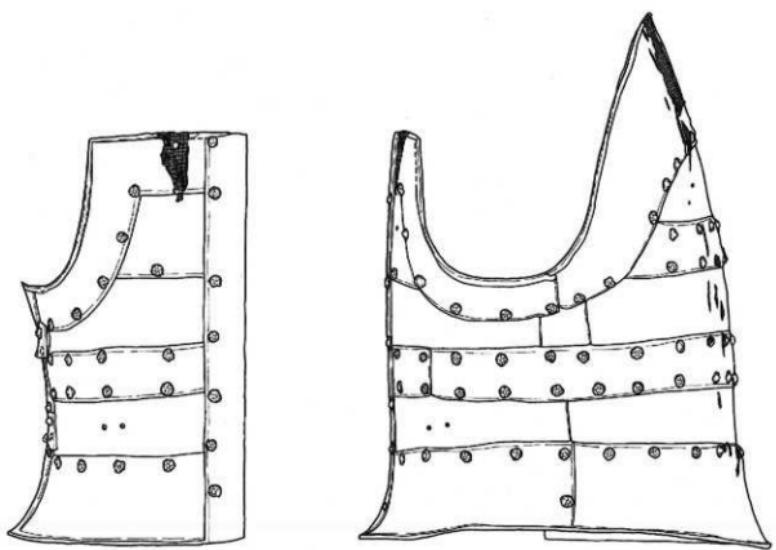
第36図 ST-21 遺構実測図 アミ目は赤色顔料



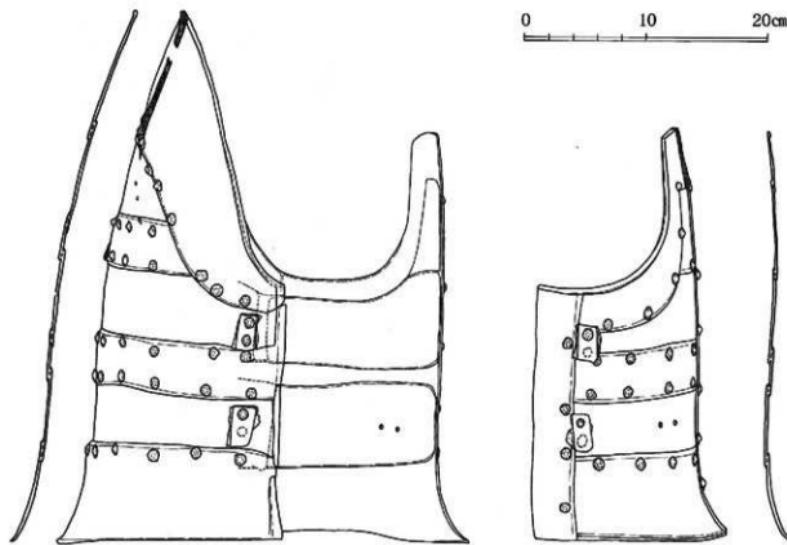
第37図 ST-21 出土遺物実測図(1)



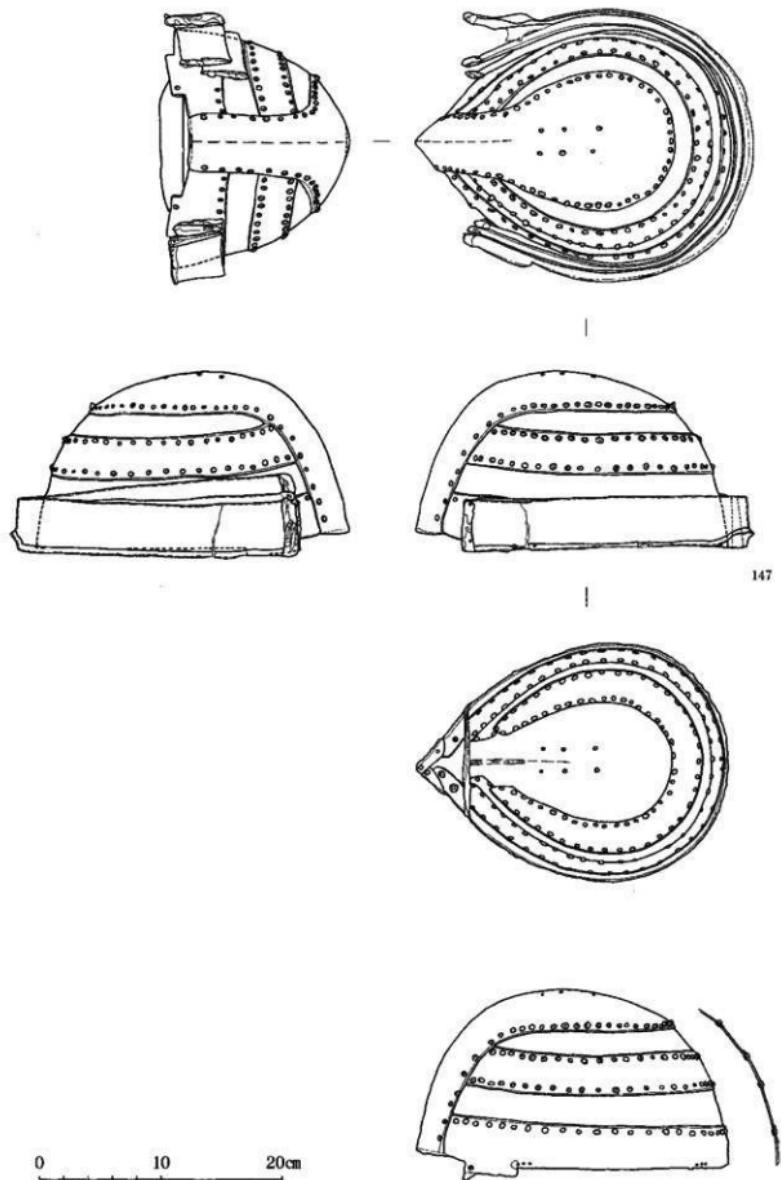
第38図 ST-21出土 横矧板紙留短甲 実測図(1) 右前胸を除く前面、後面



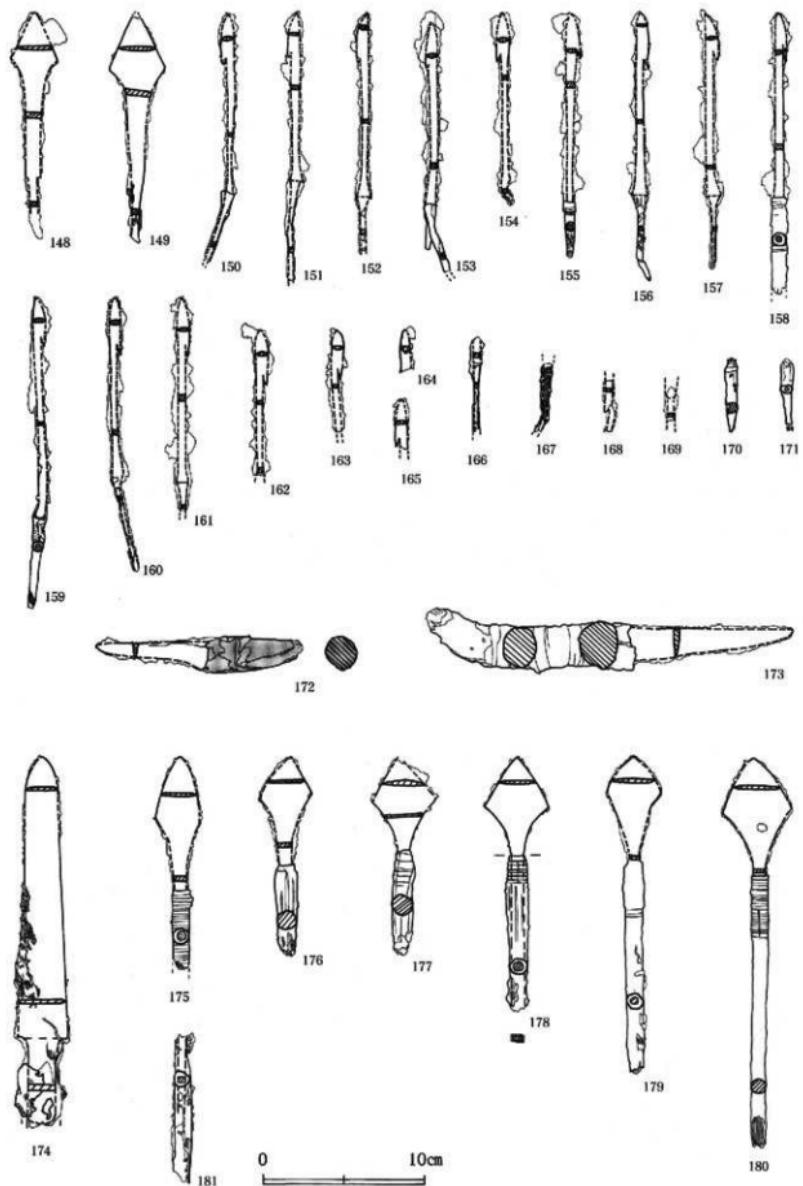
0 10 20cm



第39図 ST-21出土 横矧板銅留短甲 実測図(2) 右前胸前面、左侧面、右侧面、右前胸側面



第40図 ST-21出土 横矧板紙留衝角付冑 実測図



第41図 ST-21 出土遺物実測図(2)(148~171), ST-22 出土遺物実測図

ST-25 (第44図)

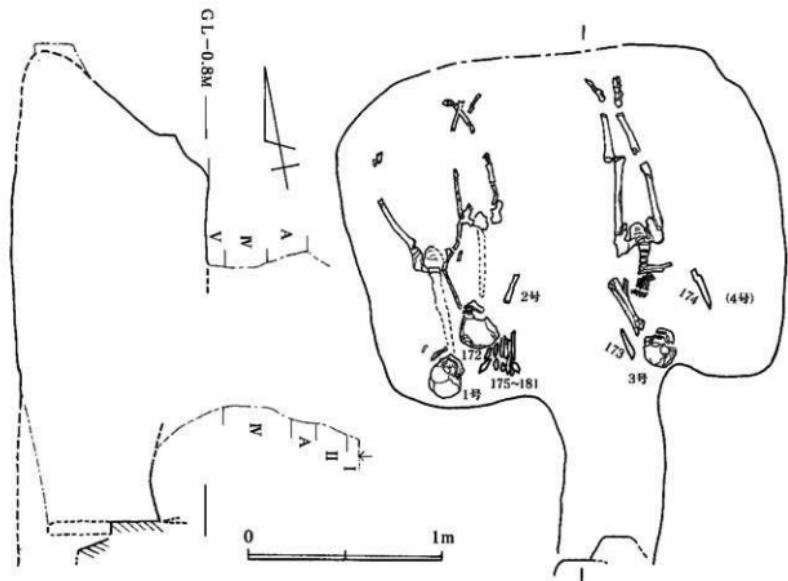
分布域の中央西寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、羨門が板石で塞がれている。羨道の長さは0.50m内外、幅は0.45~0.60mを測る。

玄室は平入り両袖隅丸台形を呈し、奥壁が狭い。幅は1.82~2.15m、奥行き1.80mであるが、天井の形状は不明である。被葬者は東頭位3体で、密着して埋葬されている。1号人骨は男性で、右足横に鉄刀1振(433)と腸抉柳葉鎌1本(313)、石突1点(314)が副葬されている。2号人骨は幼児、3号人骨は女性で、副葬品は無い。

ST-26 (第52図)

ST-25の南に位置し、主軸を北にとる堅坑上部閉塞タイプである。堅坑上面の検出はしていないが、板石で塞がれている。羨道の長さは0.30m内外、幅0.54m内外である。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、天井は寄せ棟である。幅は1.76~1.80m、奥行き1.34mを測る。被葬者は東頭位3体と北頭位1体で、3号人骨が最も遺存度が良く対角線上に埋葬されている。1号人骨は性別不明、2号人骨は女性、4号人骨は小児で、いずれも副葬品が無いが、2号人骨の左前腕に貝釧10個を着装している。1・2号人骨の頭骨には、赤色顔料が塗布されている。3号人骨の下半身左横には、鉄刀1振(434)と土頭鎌2本(315・316)が副葬されている。

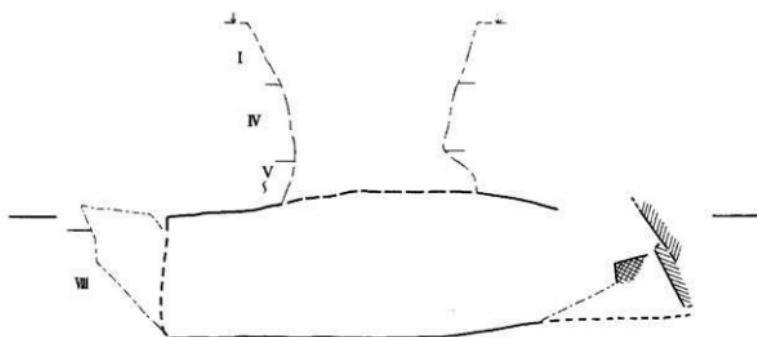
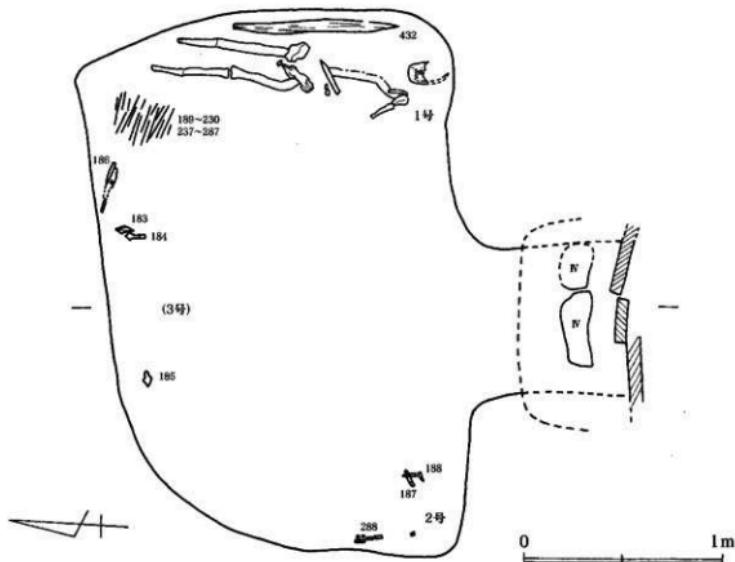


第42図 ST-22 遺構実測図

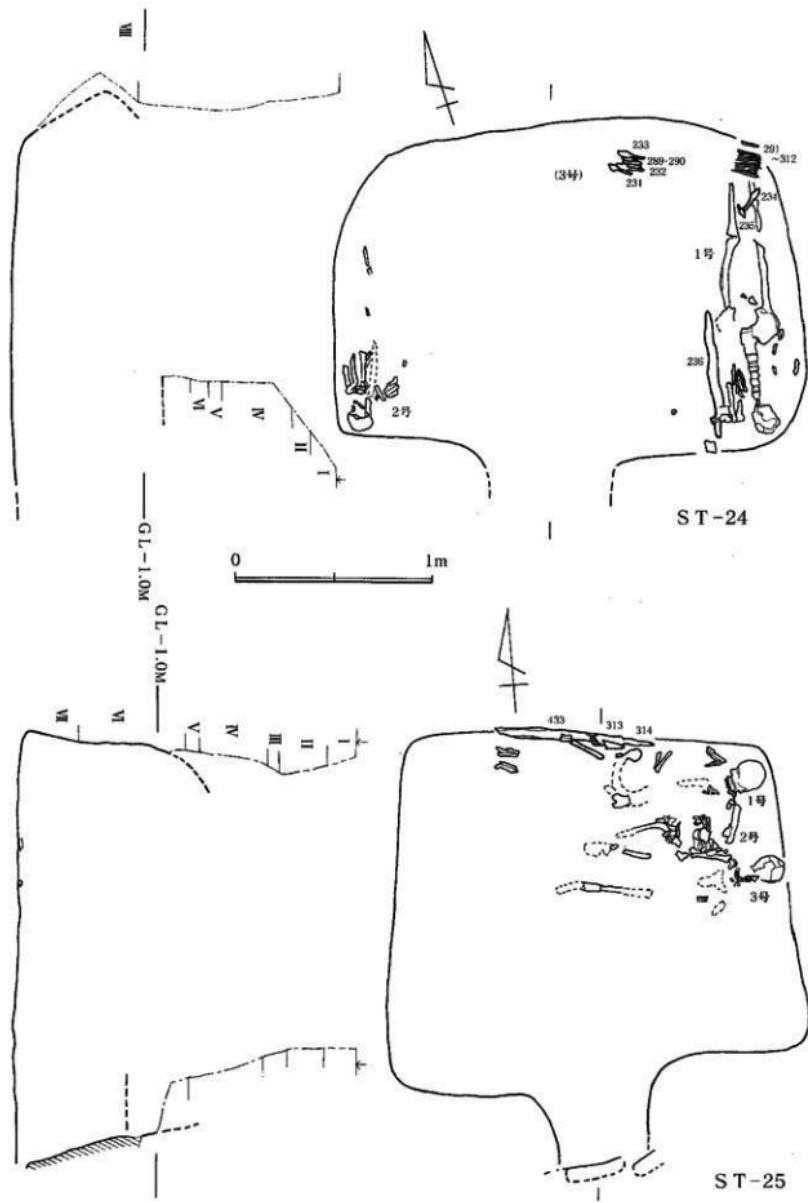
ST-27 (第53図)

分布域の東南部に位置し、主軸を東にとる羨門閉塞タイプである。竪坑は未調査であるが、閉塞材が確認されなかつたので板による閉塞と思われる。羨道の長さは0.65m内外、幅0.64~0.84m、高さ0.73mを測る。

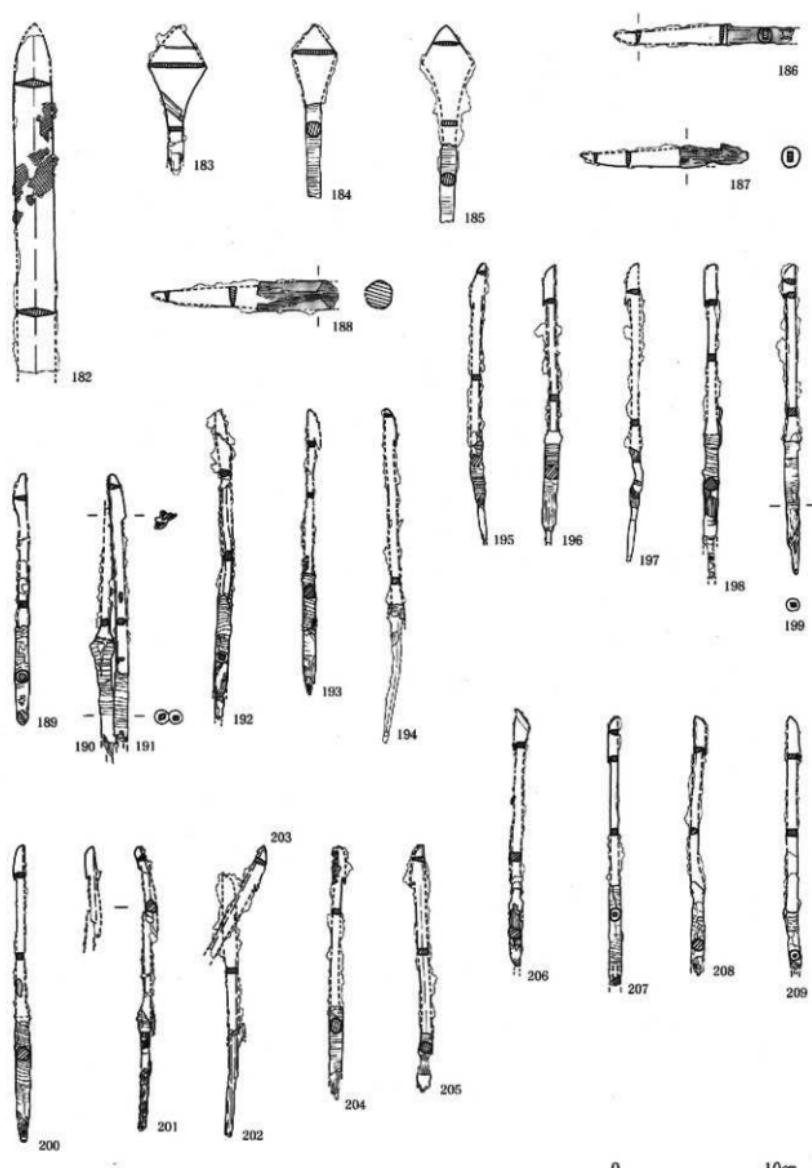
玄室は平入り両袖長方形（左右非対象）を呈し、天井は寄せ棟である。幅は2.09~2.40m、奥行き1.32~1.74m、高さ0.90mを測り、南頭位の被葬者1体（1号）が遺存し、腰部左横に長頭



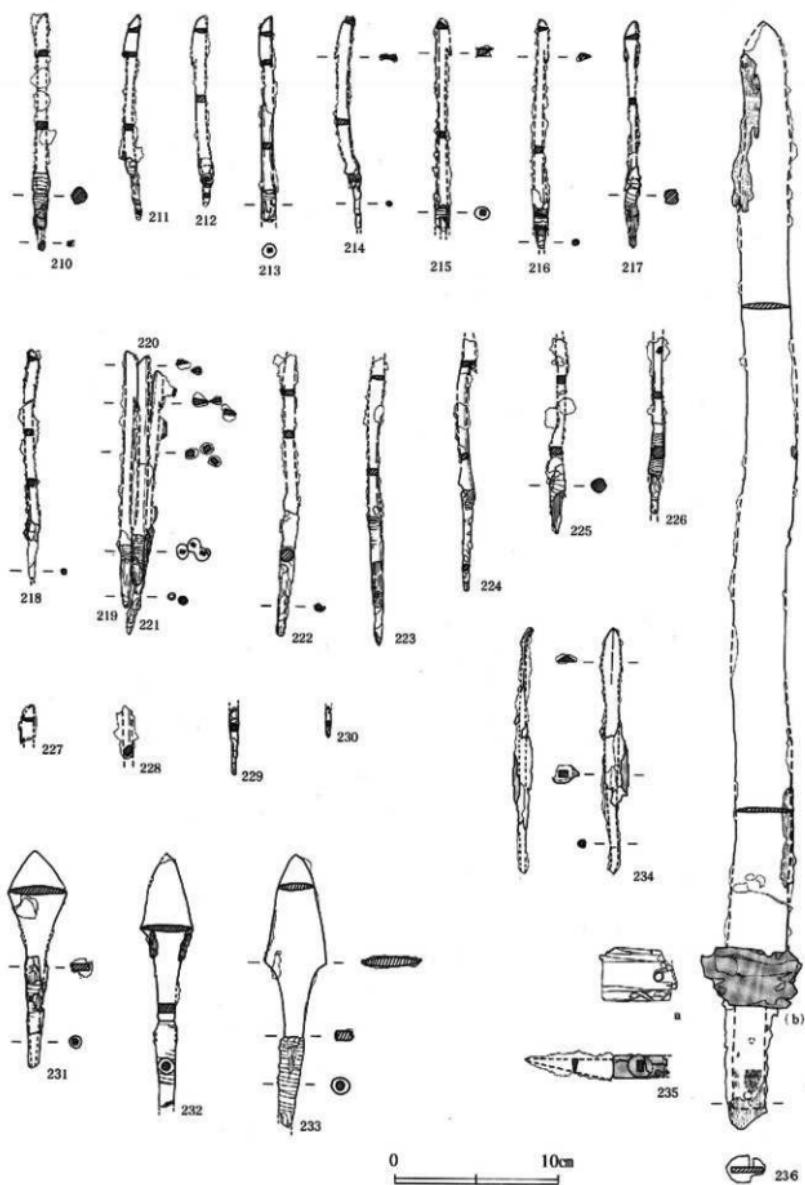
第43図 ST-23 遺構実測図



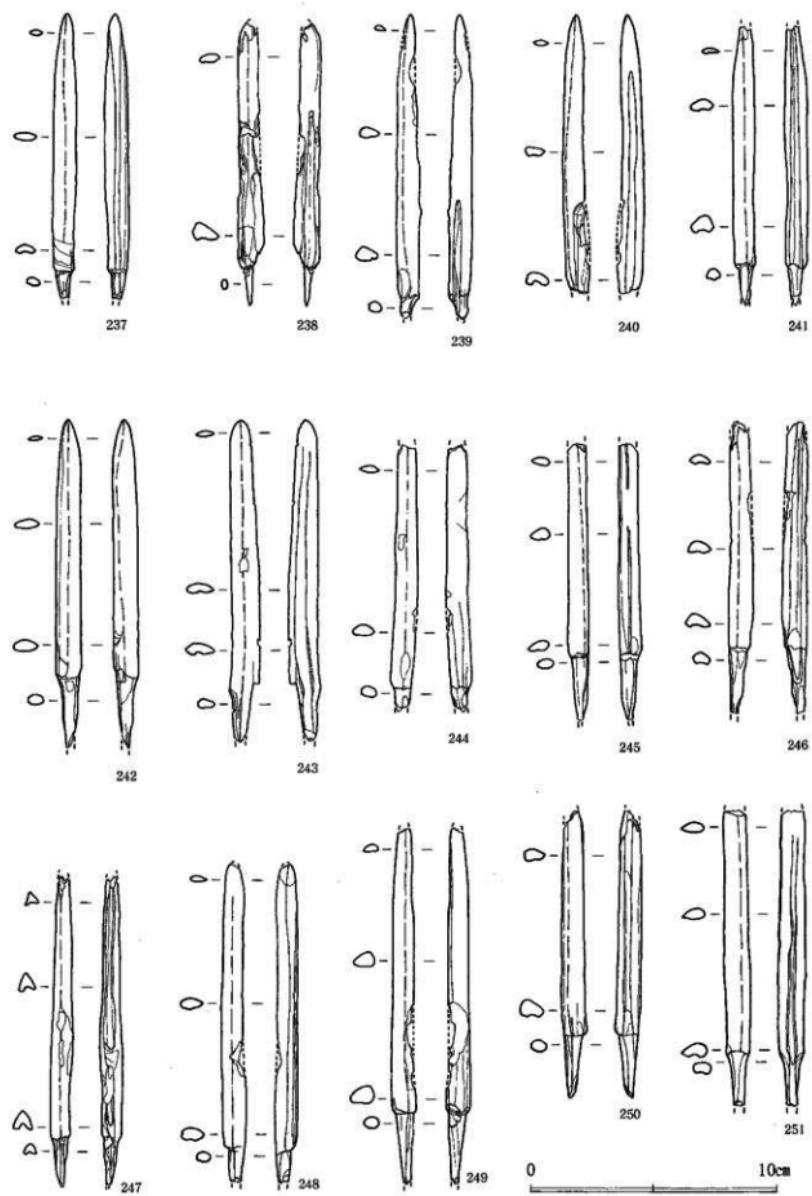
第44图 ST-24·25 遗構実測図



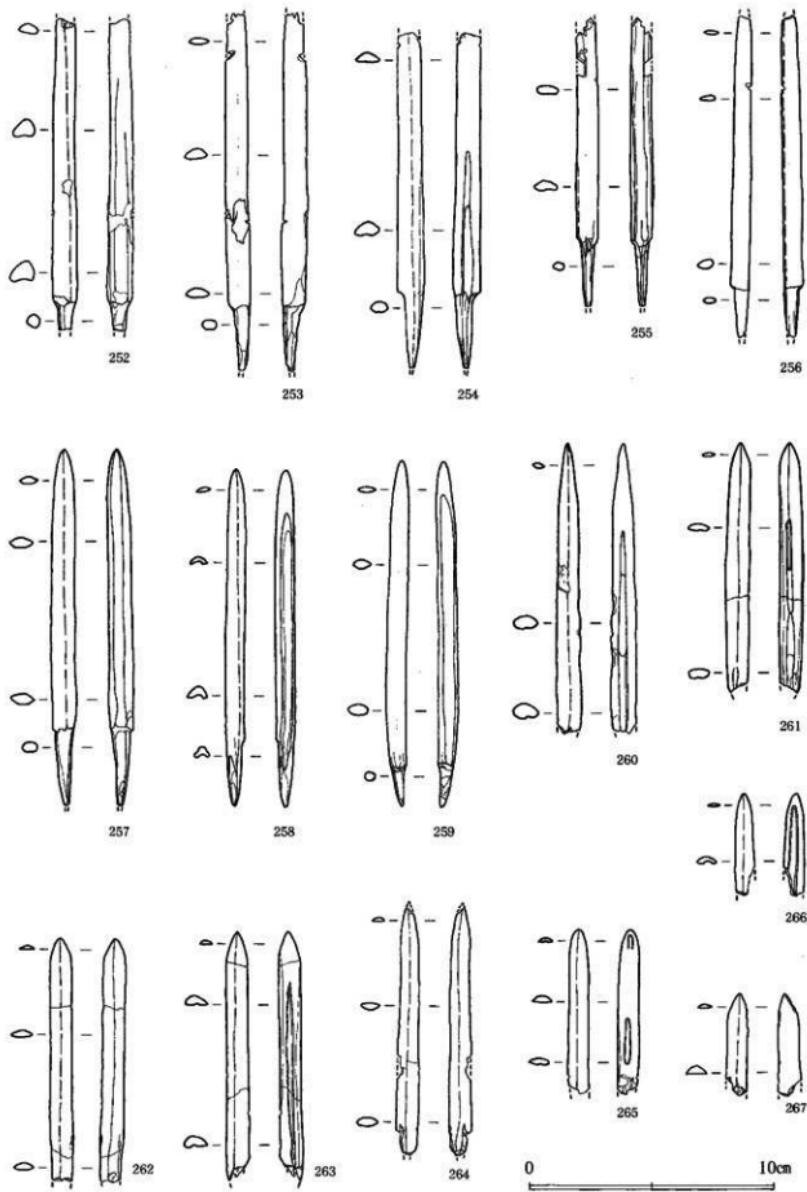
第45図 ST-23 出土遺物実測図 (1)



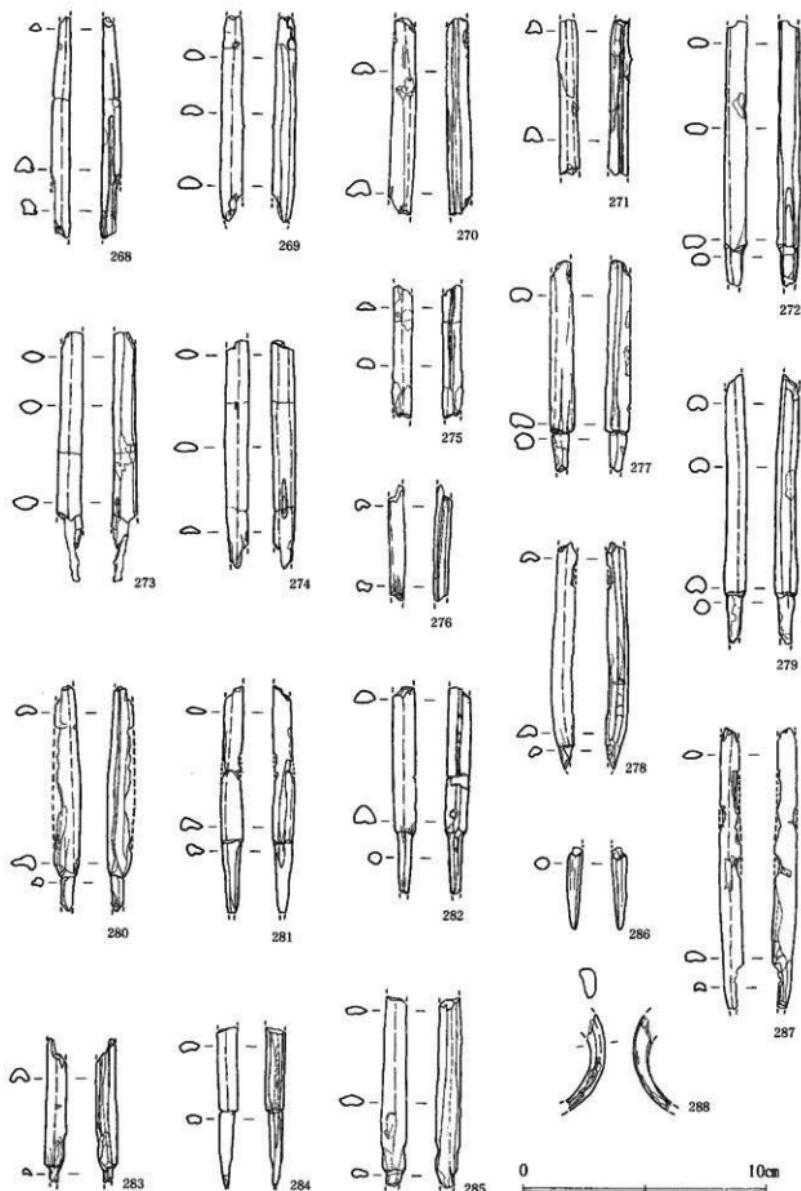
第46図 ST-23 出土遺物実測図(2) (210~230), ST-24 出土遺物実測図(1)



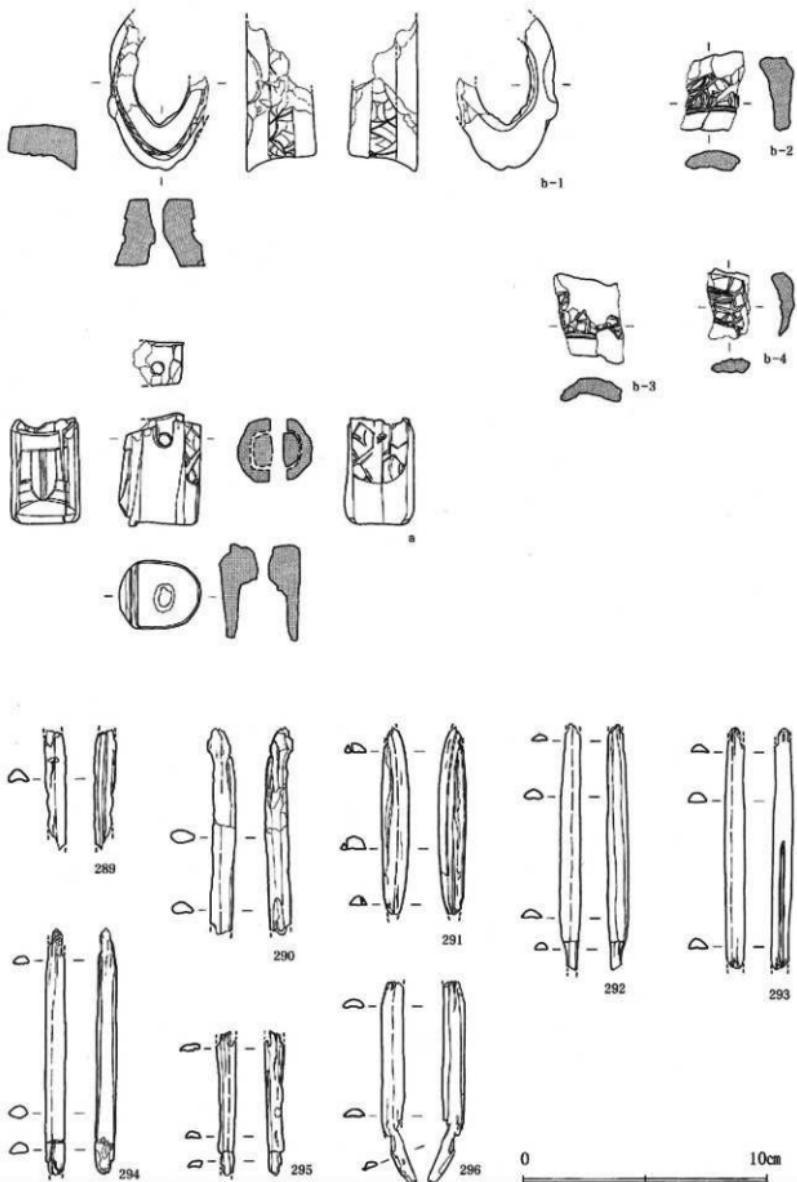
第47図 ST-23出土 骨鑑実測図(1)



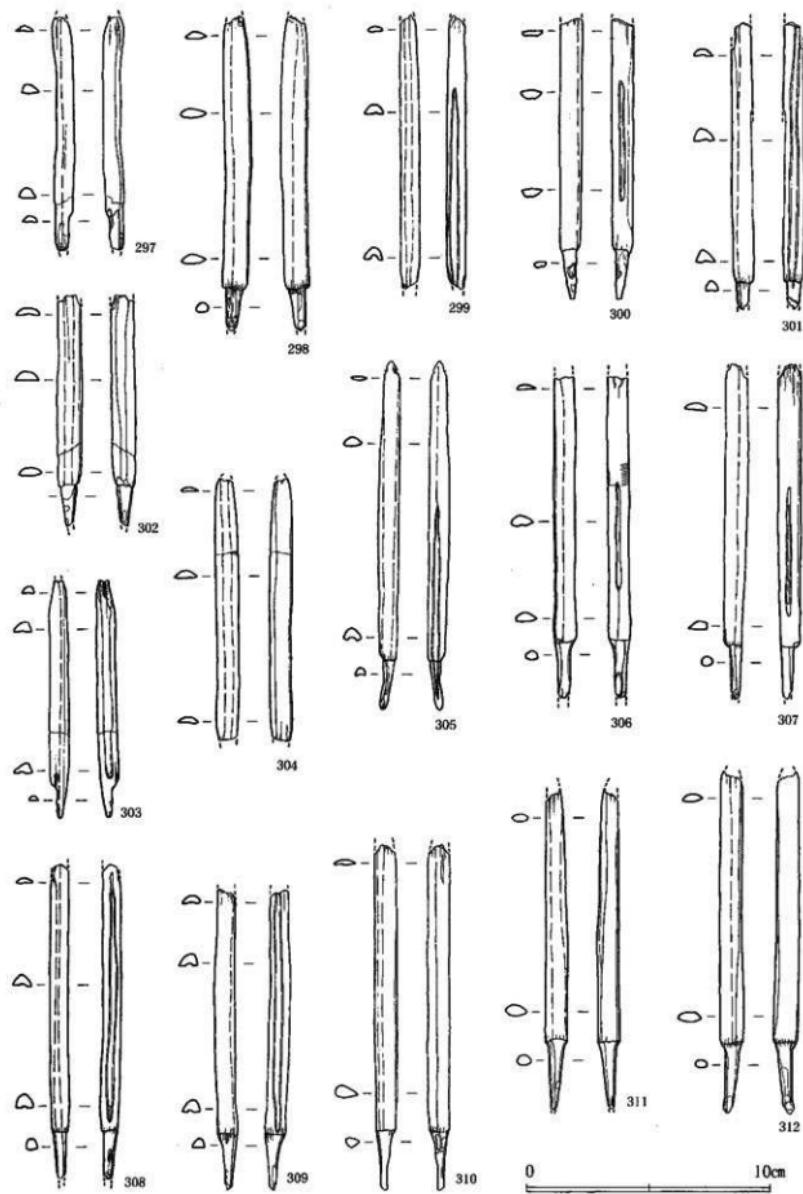
第48図 ST-23出土 骨器実測図 (2)



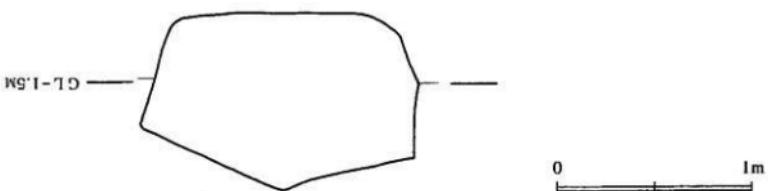
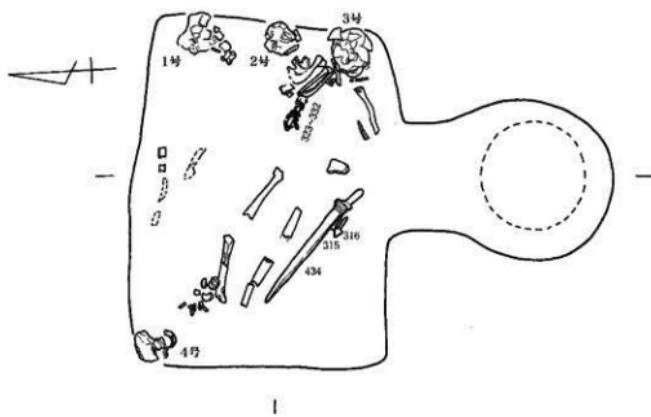
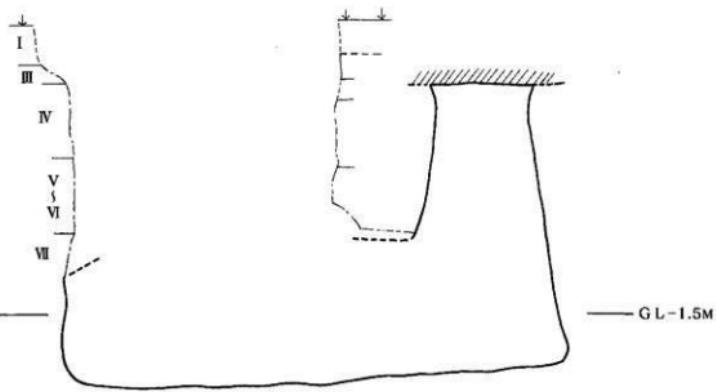
第49図 ST-23出土 骨鏃実測図(3) 貝釧実測図



第50図 ST-24出土 a・b-1~b-4 : 鹿角装具実測図 (236), 骨礫実測図 (1)



第51図 ST-24出土 骨錐実測図(2)



第52図 ST-26 遺構実測図

鐵1本(319)を副葬している。頭部には赤色顔料が塗布されている。317・318は刀子であるが、1号人骨とは離れすぎているため、幼児～小児の2号人骨を想定できる。

ST-28 (第53図)

分布域の北東寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。豎坑は未調査であるが、板石で閉塞している。羨道の長さは0.50m内外、幅0.36～0.50m、高さ0.51～0.61mを測る。

玄室は平入り両袖隅丸不整台形を呈し、天井は寄せ棟である。幅は1.60～1.78m、奥行き1.34m内外、高さ0.80mを測り、東頭位で頭部に赤色顔料を塗布された2体の被葬者がある。1号人骨は女性で、短剣1振(320)と刀子2本(321・322)が副葬されている。2号人骨は男性であるが、副葬品は無い。

ST-29 (第55図)

ST-28の南に位置し、主軸を東にとる羨門閉塞タイプである。豎坑は未調査であるが、IV層ブロックで閉塞している。羨道の長さは0.50～0.60m、幅は0.39～0.50m、高さ0.70mを測る。

玄室は平入り両袖隅丸長方形に近く、西側両隅が突出する。幅は2.30～2.39m、奥行き1.70mを測り、奥壁中央部は外方へ0.10m突出する。床面両側は、5cm内外低い屍床が設けられている。被葬者は4体で、4号が他と離れている。東頭位の1号人骨は女性で、右足先に刀子1本(333)が副葬されている。左肩部には幼児骨(2号)があり、母子と思われる。3号人骨は男性で、1号人骨の右大腿骨に頭を載せ、羨道部(北西)方向へ足を向けている。左前腕中程は、明瞭な骨折痕がある。4号人骨は東頭位の幼児で、頭骨左外方に圭頭鐵5本(334～338)と三角形鐵1本(339)が副葬されている。

ST-30 (第55図)

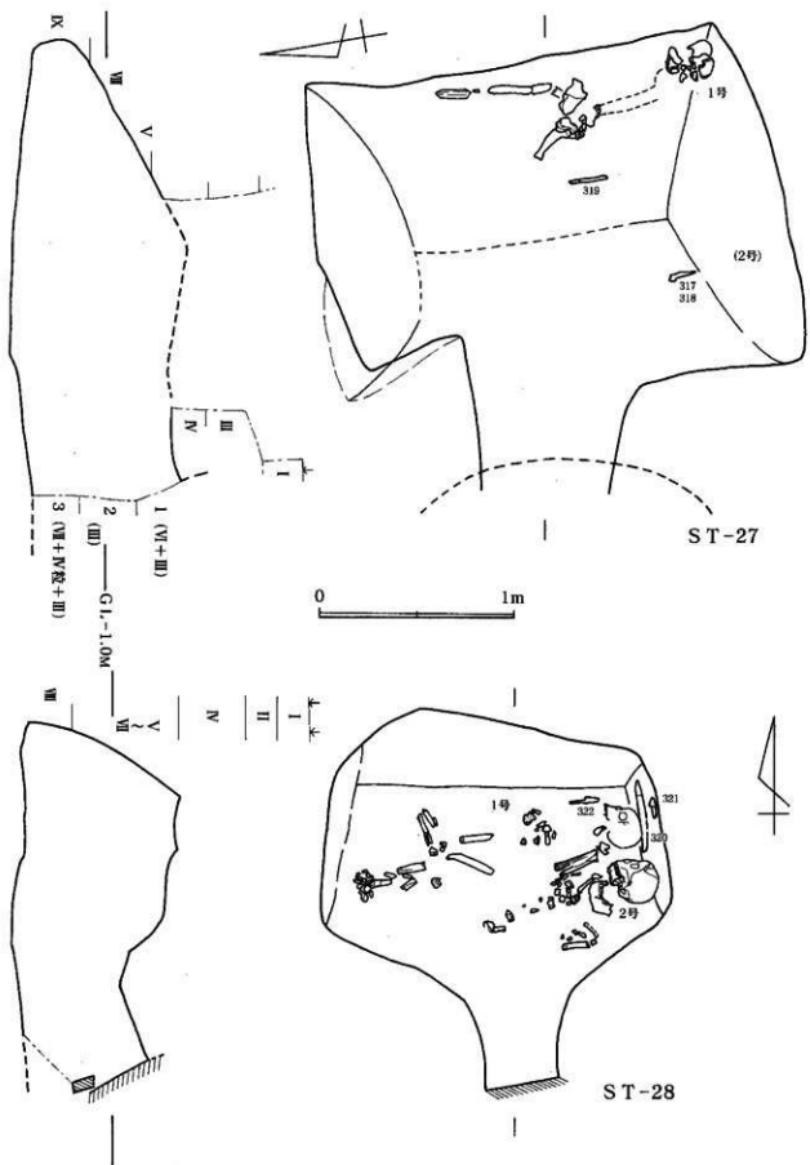
ST-29の南に位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。豎坑は未調査であるが、IV～VI層ブロックで羨門を閉塞している。羨道の長さは0.60m内外、幅0.43m内外、高さ0.60m内外を測る。

玄室は平入り両袖隅丸台形に近いが、左右非対称である。天井は寄せ棟である。被葬者は、南頭位の女性1体で、頭骨左横に鉄鐵と刀子各1本が副葬されていたが、紛失した。

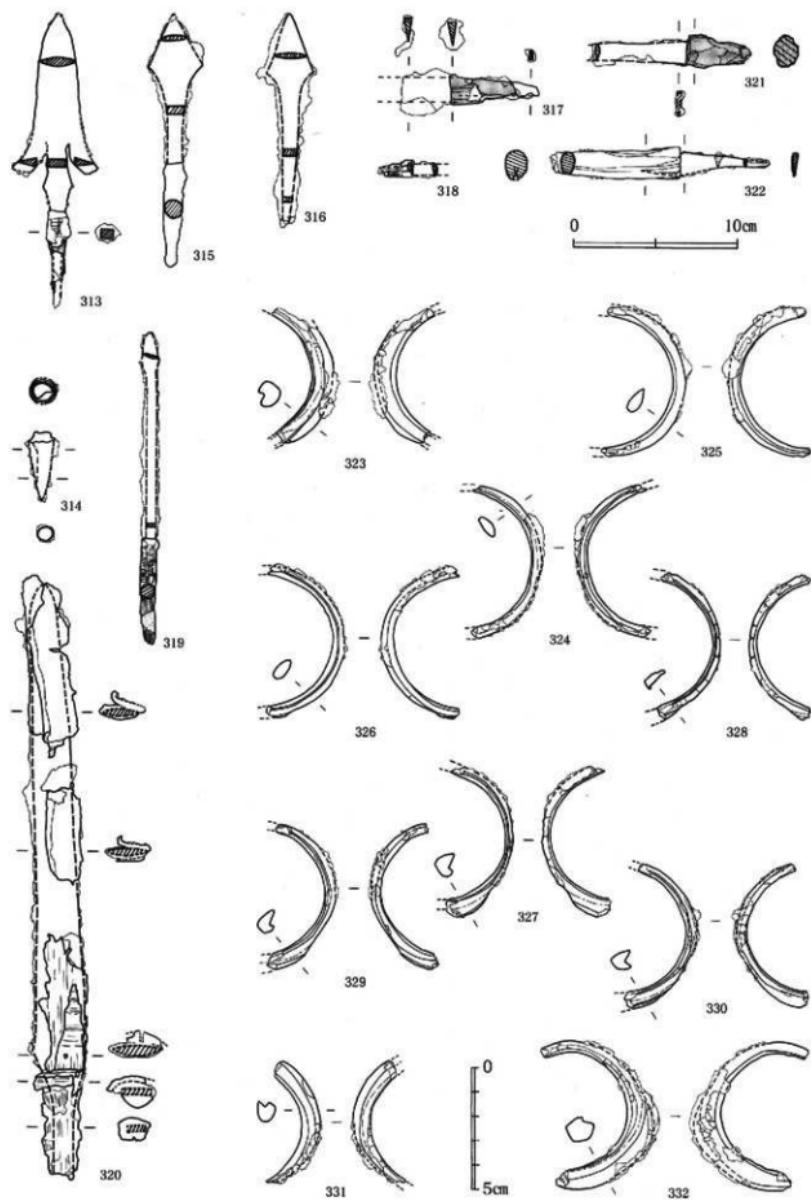
ST-31 (第56図)

分布域のやや中央寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。豎坑は未調査であるが板石で塞いでいる。羨道の長さは0.60m内外、幅0.70m内外、高さ0.50～0.70mと推定される。

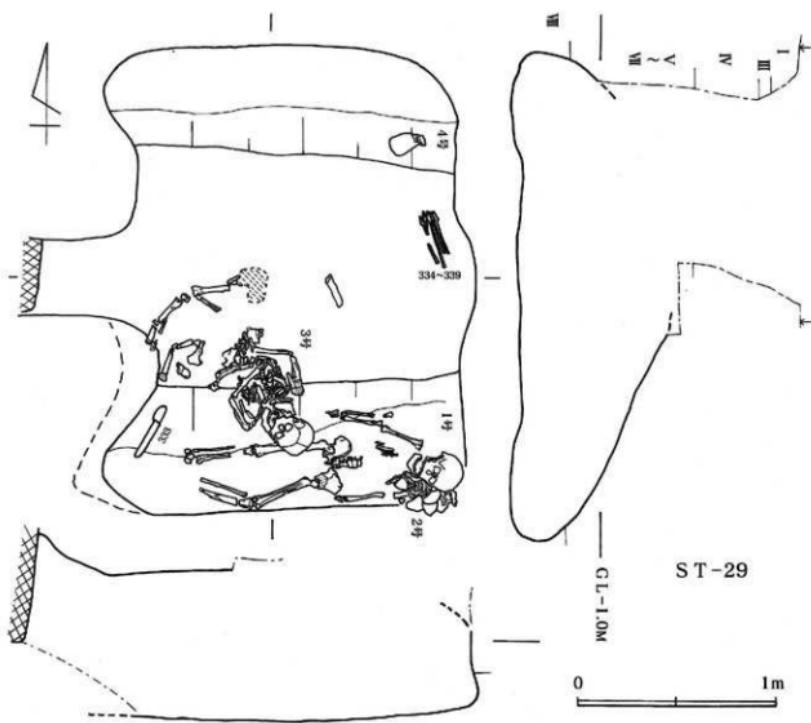
玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈し、最大幅は2.94m、奥行き1.85mを測る大型である。被葬者は、南頭位5体と東頭位2体で、7号以外の頭骨に赤色顔料が塗布されている。人骨の遺存度からみると、5号→4号・3号・7号・6号→1号→2号もしくは7号→6号→5号→4号→3号→1



第53図 ST-27・28 遺構実測図



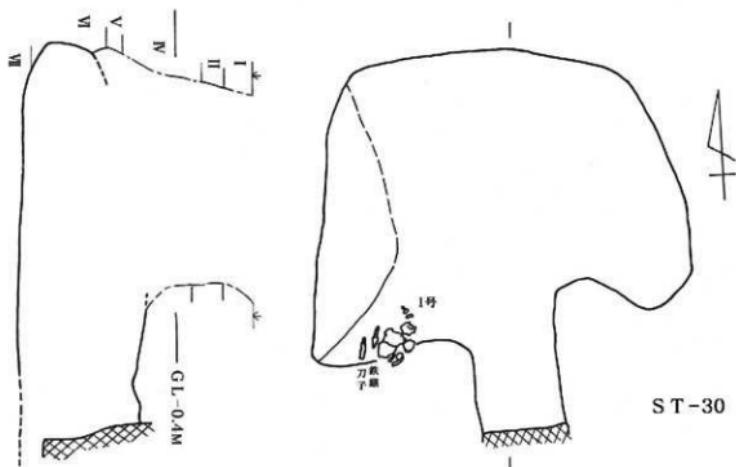
第54図 ST-25~28 出土遺物実測図 313-314:ST-25, 315-316-323~332:ST-26, 317~319:ST-27, 320~322:ST-28



ST-29

GL-1.0M

1m



ST-30

GL-0.4M

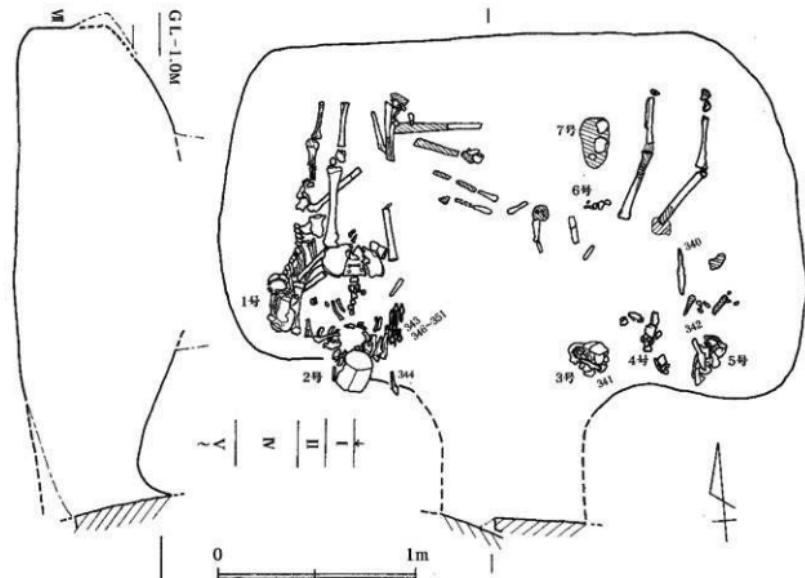
第55図 ST-29・30 遺構実測図

号→2号の順に埋葬されたと思われる。5号人骨は男性で、刀子1本(340)を副葬、4号人骨は女性で刀子1本(342)を副葬、3号人骨は小児で刀子1本(431)を副葬、7号は成人、6号は小児、1号は女性、2号は男性で小刀1振(351)と三角形鐵1本(349)と脇挾三角形鐵2本(343・350)、圭頭鐵5本(344~347)が頭部右横に副葬されている。

ST-32 (第57図)

ST-31の北・ST-29の南西に位置し、主軸を北西にとる狭門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、板石で塞いでいる。狭道の長さは0.60m内外、幅は0.78m内外、高さ0.64mを測り、玄室床面は5cm低くなる。

玄室は平入り両袖隅丸台形を呈し、天井は寄せ棟で傾斜の急な棚状施設（庇）と断面三角形に掘り込まれた隅木のレリーフを有する。幅は2.10~2.40m、奥行き1.95mを測り、南頭位の男性1体が埋葬されている。頭骨には朱が塗布され、右腕横には蛇行剣1振(361)と刀子1本(379)が、足先には長頭鐵17本(362~378)と骨鐵1本(380)が鉈を右側壁に向けて副葬されていた。

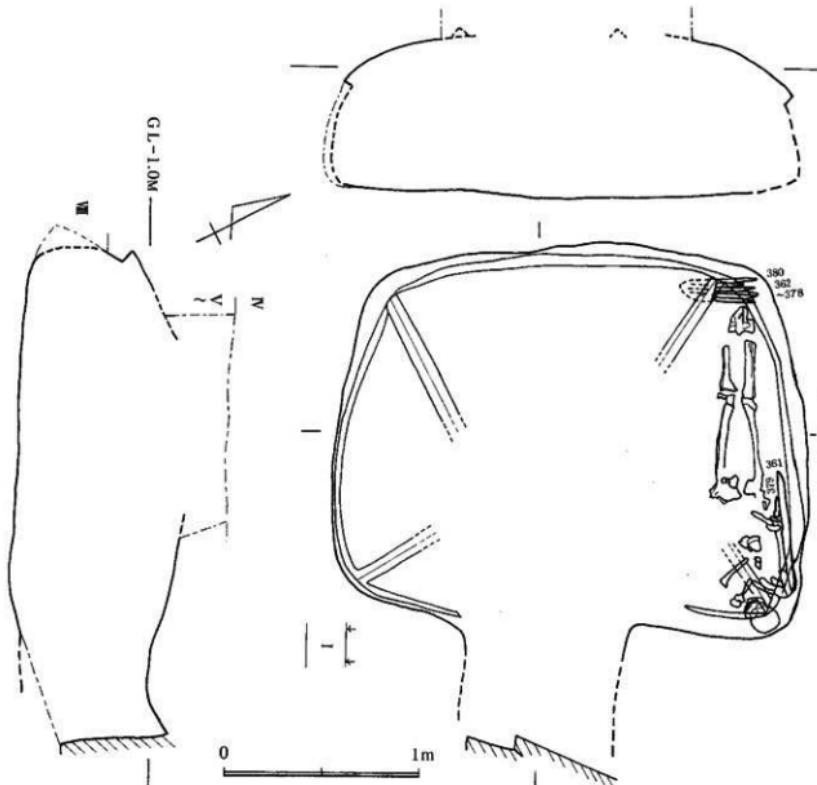


第56図 ST-31 造構実測図

ST-33 (第58図)

分布域の中央南縁寄りに位置し、主軸を北西にとる羨門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、IV層を主とするブロックで閉塞している。羨道の長さは0.70m以上、幅は0.82m内外、高さは0.90m内外を測る。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、幅1.80~1.92m、奥行き1.50mを測る。中央やや南寄りに砾床が構築されているうえに貼り床を有することを勘案すると、砾を調達できるまで掘削して堆土を戻して床面とし、砾床を造ったと思われる。反面、砾床の上には人骨が遺存せず、その前後に、北東頭位で刀子各1本(353・354)を副葬する被葬者が確認された。

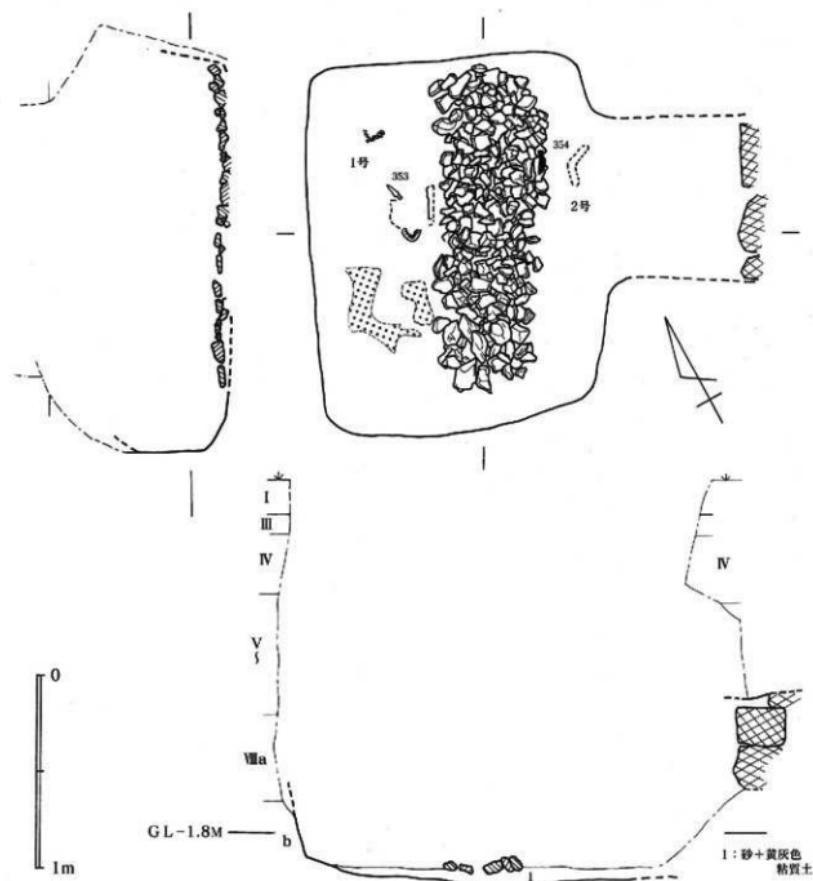


第57図 ST-32 造構実測図

ST-34 (第59図)

分布域の東南部に位置し、主軸を東にとる狭門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、IV層を主とするブロックで閉塞している。

玄室は平入り両袖台形を呈し、幅1.32m、奥行き1.54~1.75mを測る。被葬者は西頭位2体で、中央やや奥壁方向に向かって置かれている。人骨の遺存度からみると、2号人骨（男性）が初葬と思われる。2号人骨の頭部には赤色顔料が塗布され、三角形鐵1本(356)と脇挟三角形鐵3本(358~360)、主頭鐵1本(357)、刀子1本(355)が副葬される。1号人骨は小児で、刀子1本(354)が副葬されている。

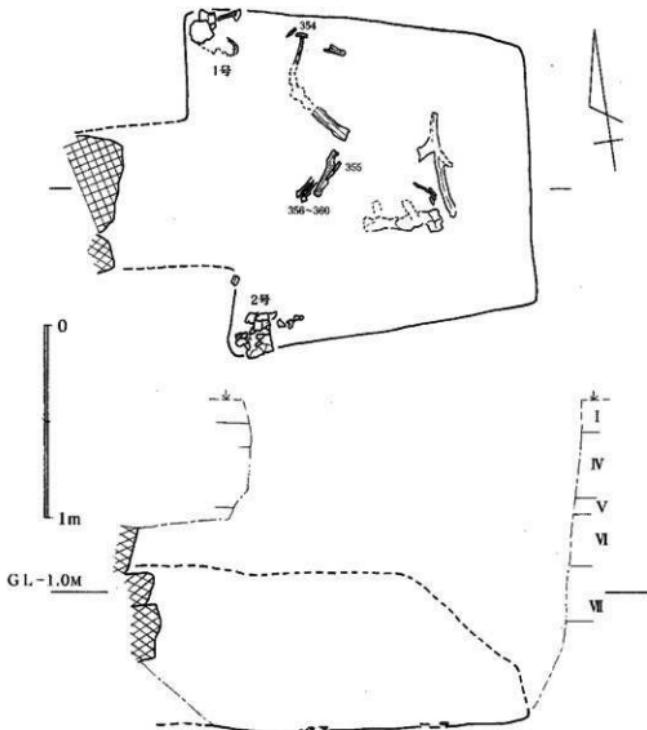


第59図 ST-33 遺構実測図 アミロは赤色顔料

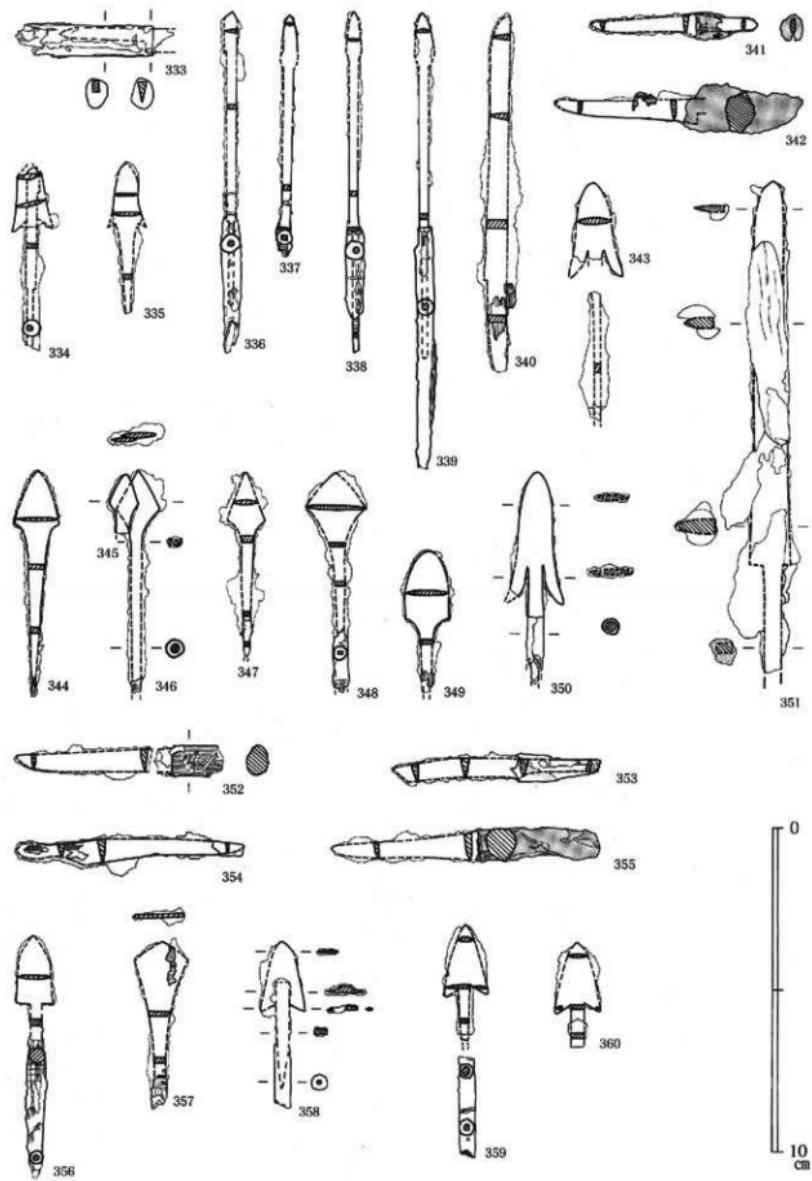
ST-35 (第62図)

分布域の北縁中央部に位置し、主軸を北北東にとる竪坑上部閉塞タイプである。竪坑平面は隅丸台形を呈し、長軸1.88m、短軸1.58mを測る。玄室側は緩やかに掘削され、南縁が深い。最深部は検出面から0.43mを測り、覆土の断面観察による追葬も確認できた。2段目の竪坑は直径0.42m前後の円形を呈し、1段目竪坑のほぼ中心に穿たれ、1枚の板石で閉塞されている。羨道は、無いに等しい。

玄室は平入り両袖梢円形（不整円形）を呈し、最大幅1.61m、奥行き1.50mを測る。天井はドーム型である。被葬者は、東頭位4体であり、1・2号の頭骨には赤色顔料が塗布されている。1号人骨は女性で左前腕に貝釧8個(414~420)を着装し、右足先に柳葉鐵1本(385)と脛抉三角形鐵3本(386~388)が副葬されている。2号人骨（壯年）と4号人骨（男性か）には副葬品は無いが、3号人骨（小兒）の頭部右壁側には短剣1振(381)と柳葉鐵3本(382~384)が副葬されている。

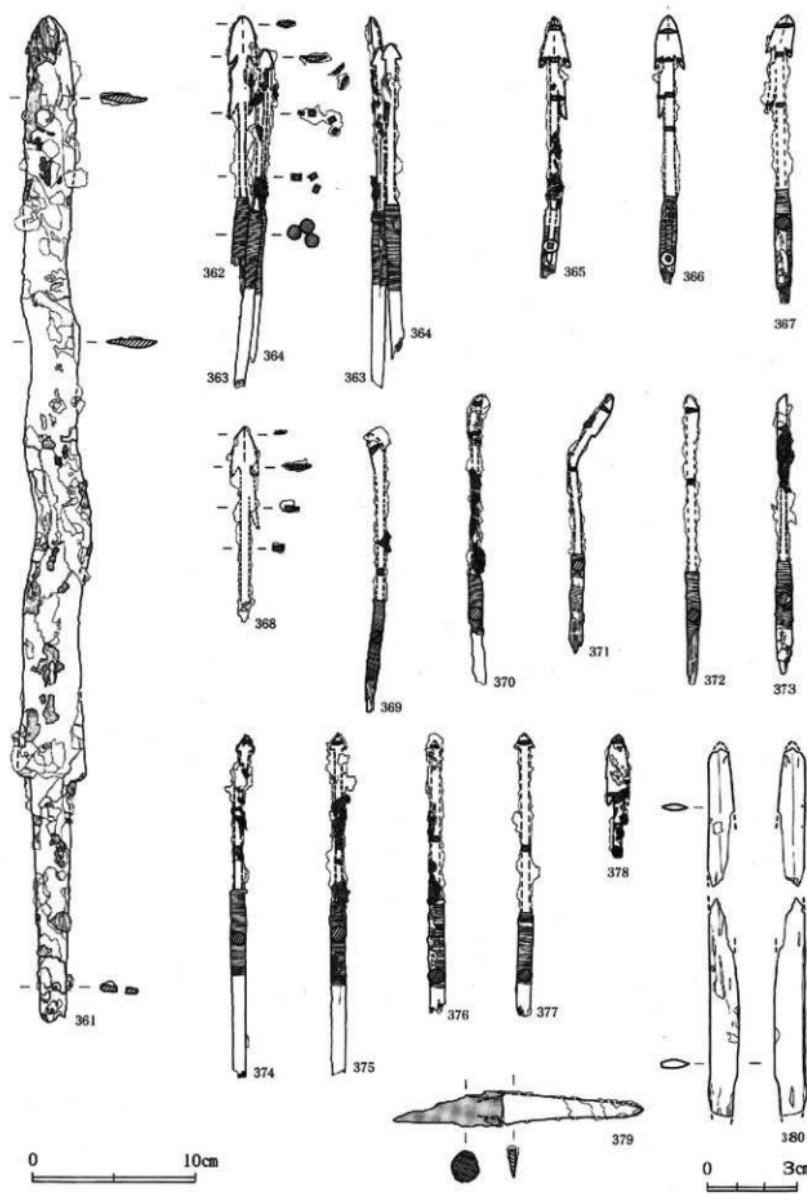


第59図 ST-34 遺構実測図

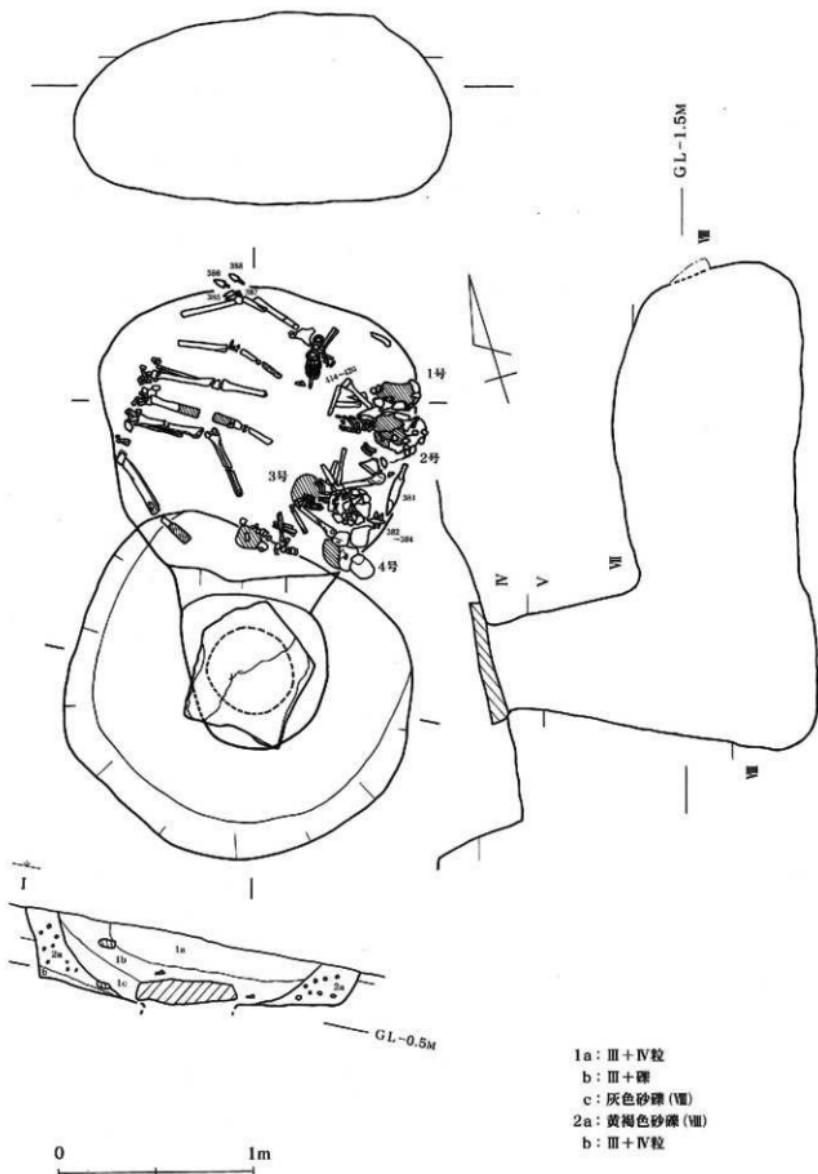


第60図 ST-29・31・33・34 出土遺物実測図

333~339:ST-29, 340~351:ST-31, 352~353:ST-33,
354~360:ST-34



第61図 ST-32 出土遺物実測図



第62図 ST-35 遺構実測図

ST-36 (第63図)

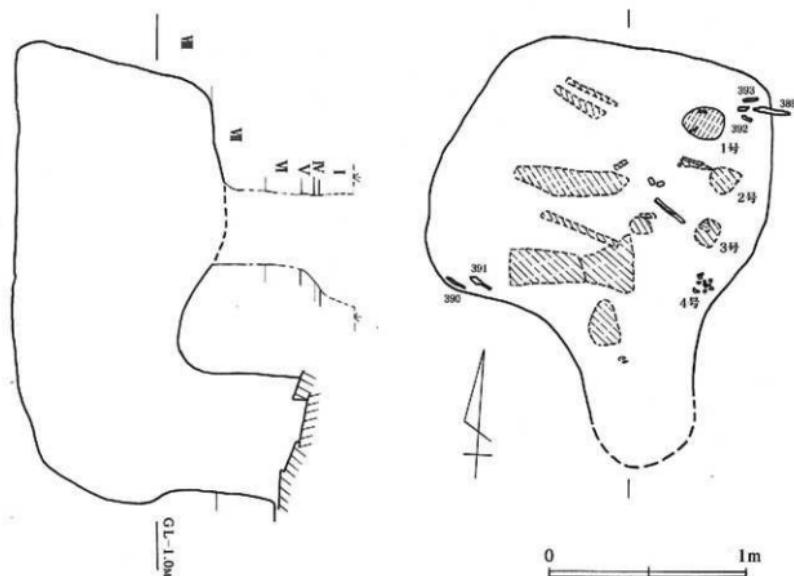
ST-35の西に位置し、主軸を北にとる堅坑上部閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、板石4枚以上で塞がれている。羨道は、長さ0.20m前後で不明瞭である。

玄室は平入り両袖隅丸不整長方形～台形を呈し、片袖に近い。幅は1.30～1.70m、奥行き1.30～1.40m、高さ1.08mを測り、天井はドーム型に近い。被葬者は東頭位4体で、1・2号に赤色顔料が塗布されている。1号人骨の頭部右には、短剣1振(389)と圭頭鏡2本(392・393)が副葬されている。2・3号人骨には副葬品は無く、4号人骨の左足先部に柳葉鏡1本(390)と圭頭鏡1本(391)が副葬されている。

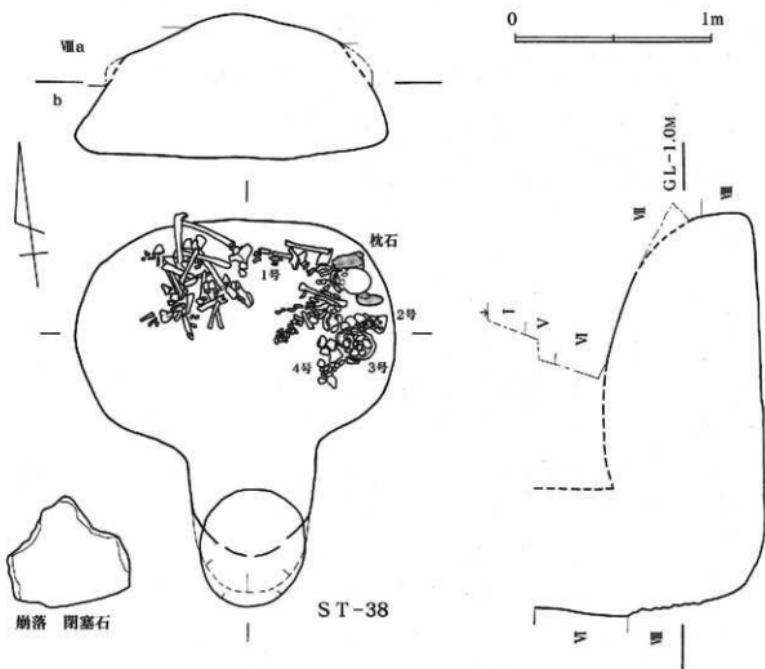
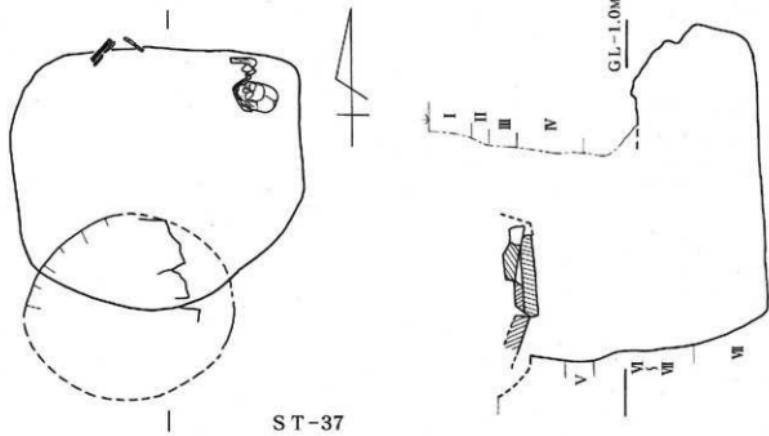
ST-37 (第64図)

ST-36の南西に位置し、主軸を北にとる堅坑上部閉塞タイプである。閉塞には、小さめの板石4枚以上が使われる。堅坑底面と玄室が一体となる、かなり退化したタイプである。

玄室は平入りで袖無し、隅丸長方形を呈する。幅は1.45m、奥行き0.75mを測る。被葬者は東頭位1体で、頭部に赤色顔料を塗布した女性である。副葬品は無い。



第63図 ST-36 遺構実測図



第64図 ST-37・38 遺構実測図

ST-38 (第64図)

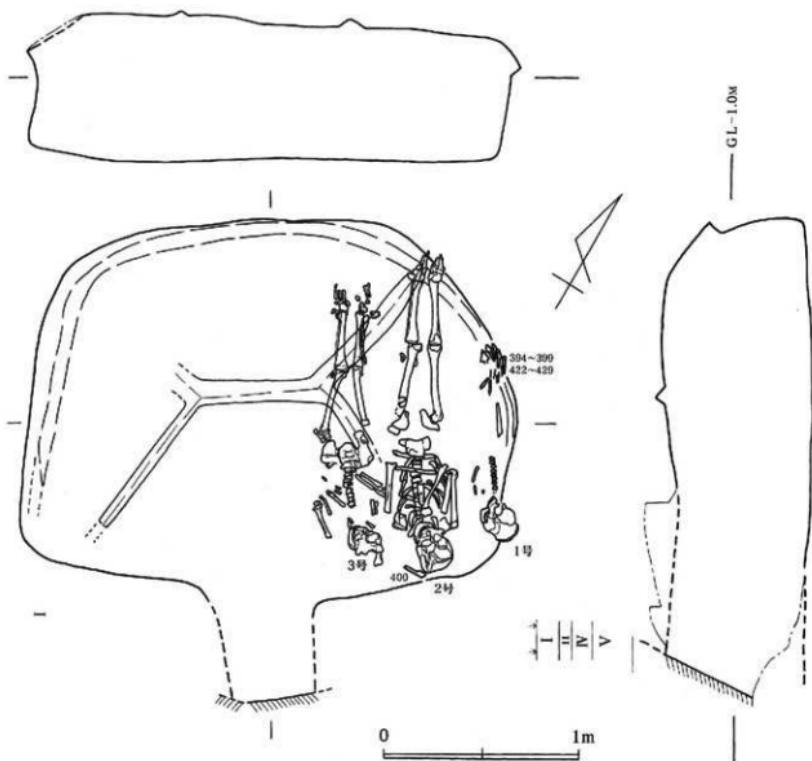
ST-37の北に位置し、主軸を北にとる竪坑上部閉塞タイプである。竪坑は崩落し、閉塞石1枚が崩落していた。羨道は退化し、玄室と直結する。

玄室は平入り両袖楕円形で、天井はドーム型である。幅は1.64m、奥行き1.10m、高さ0.75mを測る。被葬者は東頭位4体で、1～3号人骨に赤色顔料が塗布されている。1号人骨は女性で、頭部左右に石枕を有する。2号も女性、3号は男性、4号は小児で、いずれも副葬品が無い。

ST-39 (第65図)

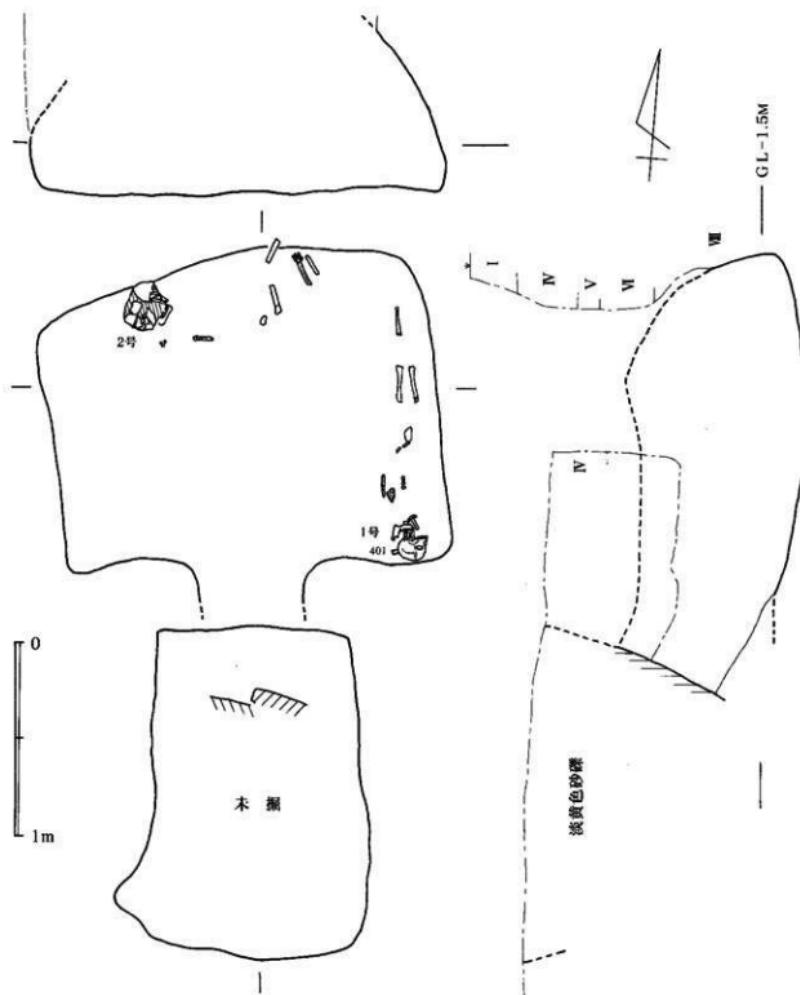
分布域の中央寄りに位置し、主軸を北西にとる羨門閉塞タイプである。竪坑は未調査であるが、板石で閉塞している。羨道の長さは0.50m内外、幅0.42～0.58m、高さ0.67m内外を測る。

玄室は平入り両袖隅丸台形を呈し、ST-32と同様の棚状施設（底）と隅木のレリーフがある大



第65図 ST-39 遺構実測図

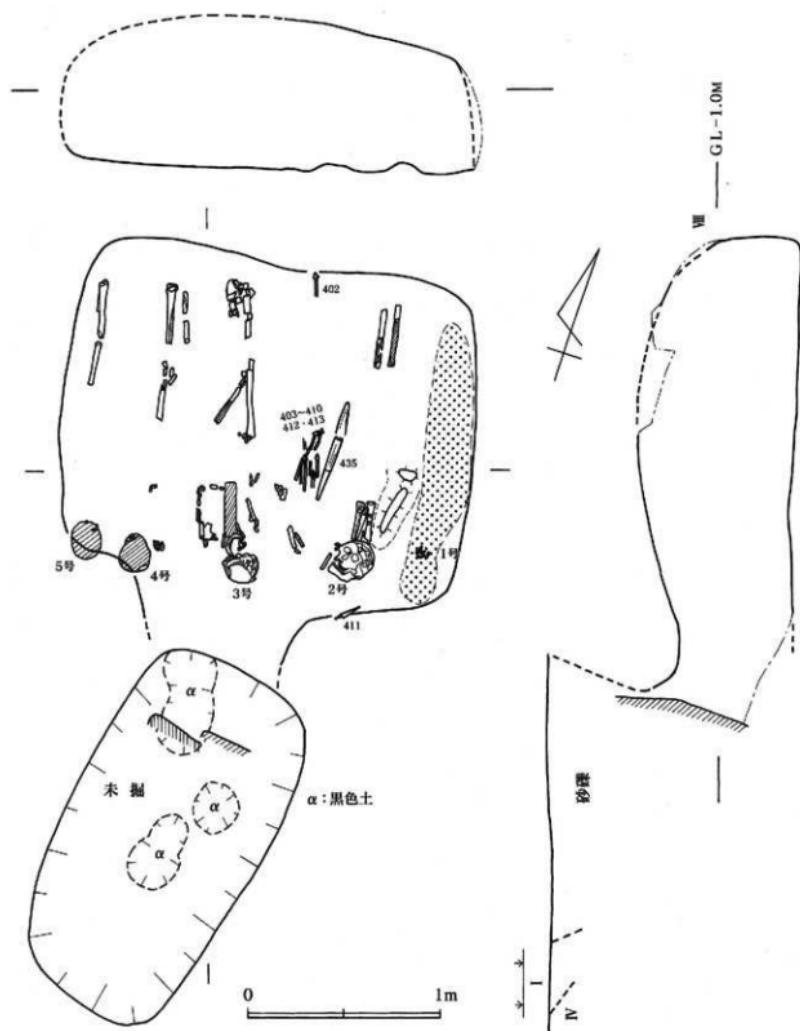
型タイプである。幅は2.48m、奥行き1.90m、高さ0.74mを測る。被葬者は3体で1・2号の頭部と3号の全身に赤色顔料が塗布されている。1号人骨は女性で、無茎鐵1本(394)と梯葉形鐵1本(395)、圭頭鐵3本(396・398・399)、長頭鐵1本(397)が右足部に副葬されている。2号人骨は男性で、頭部左横に刀子1本(400)が副葬されている。3号人骨は小児で、副葬品は無い。



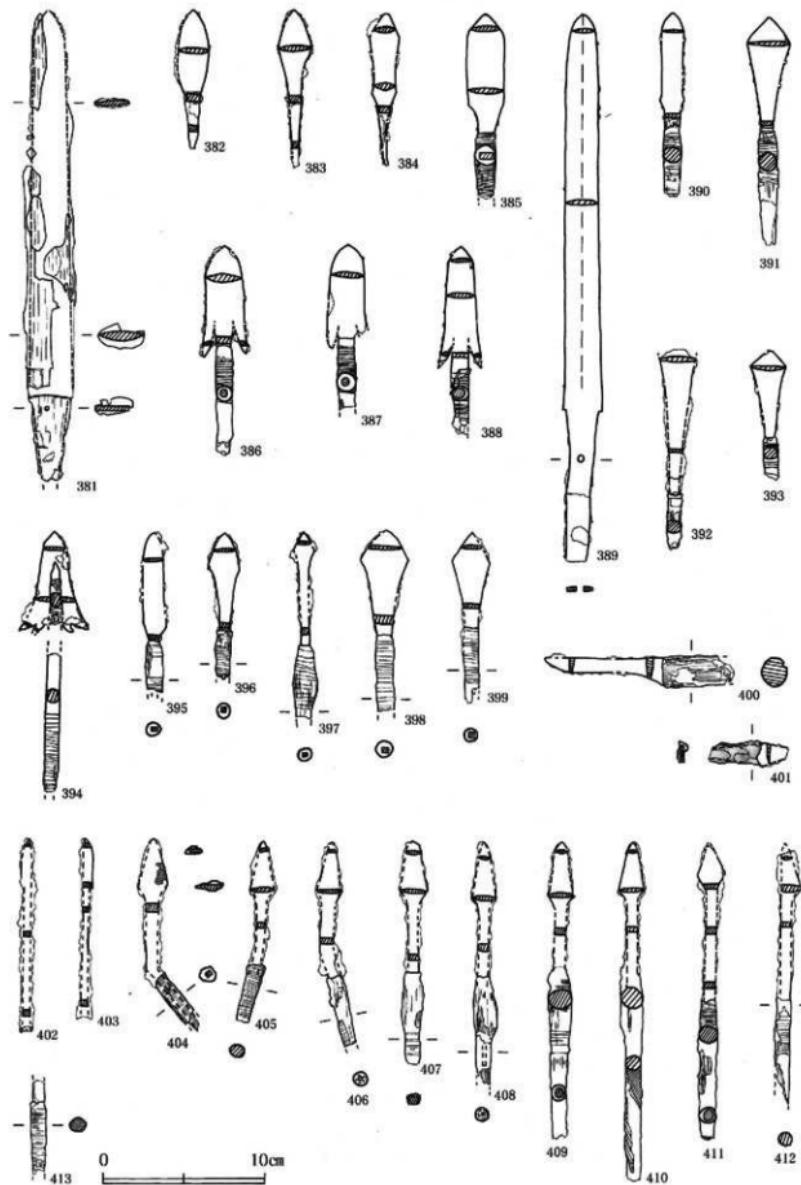
第66図 ST-40 造構実測図

ST-40 (第66図)

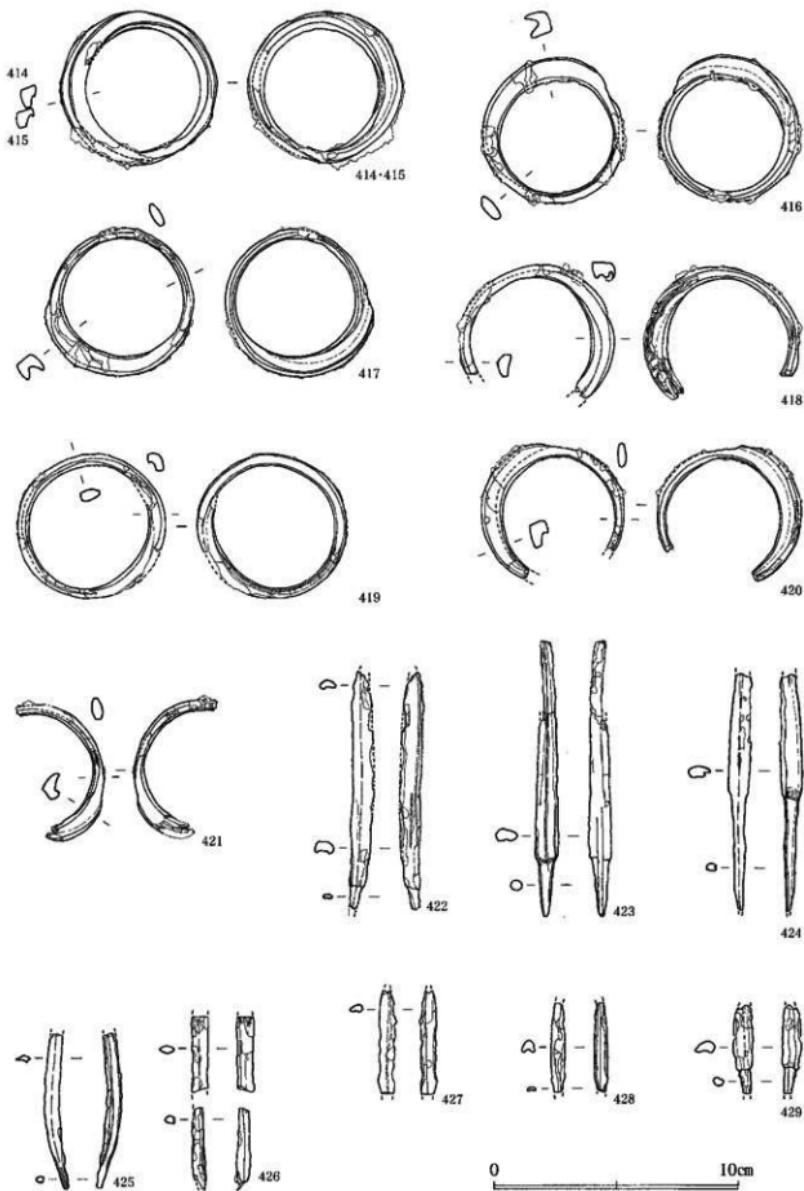
ST-39の南西に位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。豊坑はプランを検出しただけで、未調査であるが、長さ1.70m内外、幅1~1.1m内外の略長方形を呈し、短辺に羨門がある。



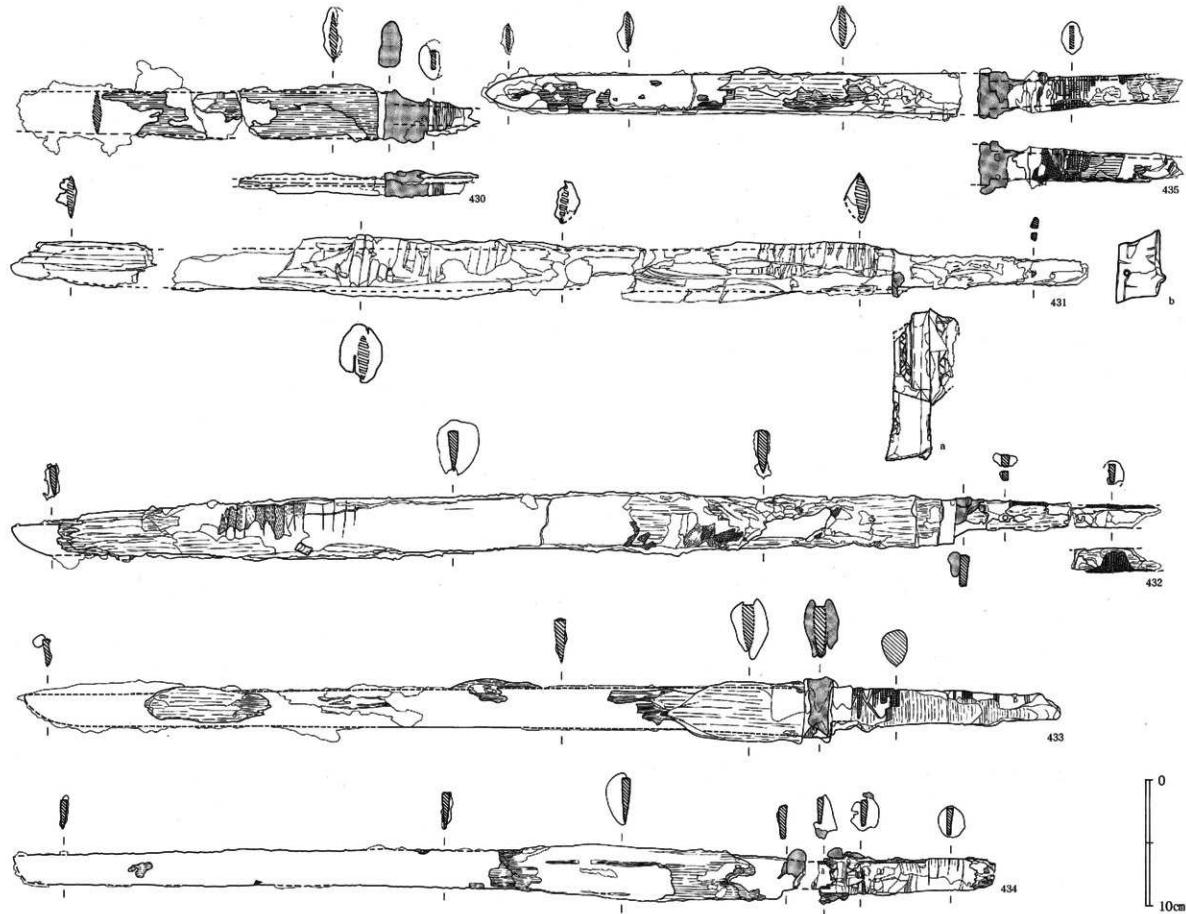
第67図 ST-41 遺構実測図 アミ目は赤色顔料



第68図 ST-35・36・39~41 出土遺物実測図
381~388: ST-35, 389~393: ST-36,
394~400: ST-39, 401: ST-40, 402~413: ST-41

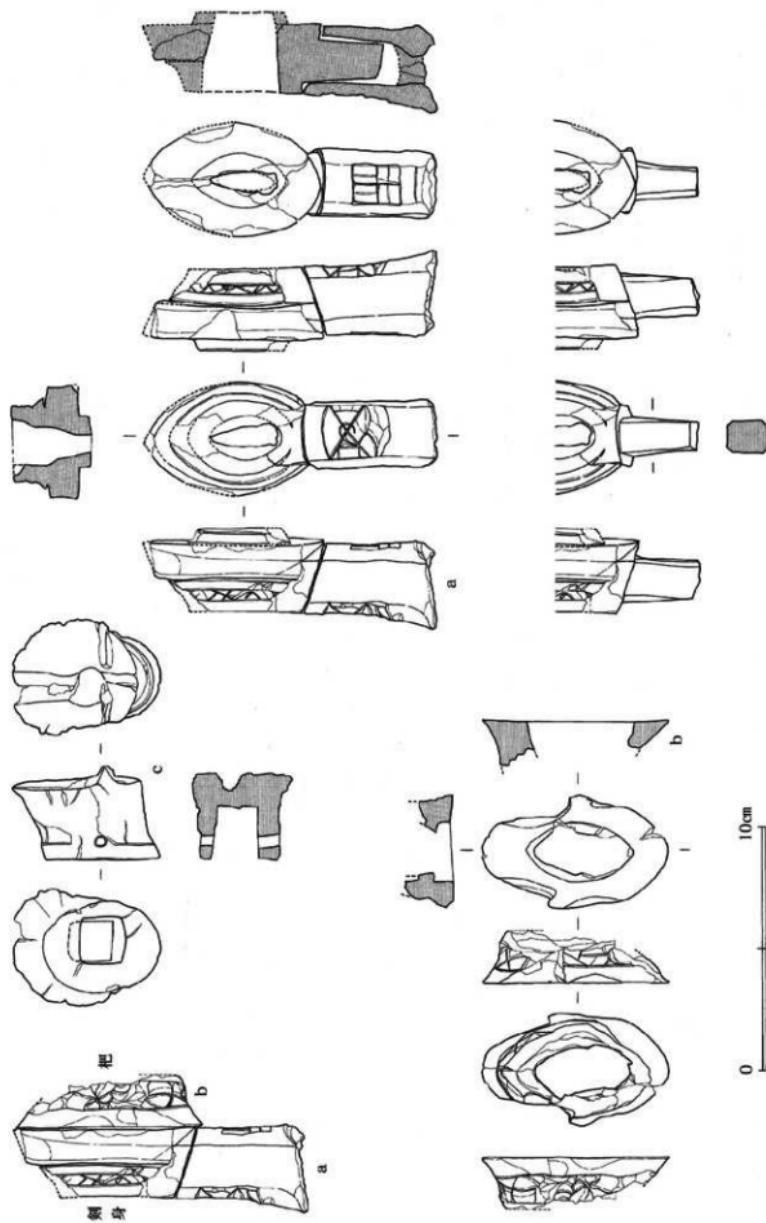


第69図 ST-35出土貝釧、ST-39出土骨針実測図



第70図 ST-19・20・23・25・26・41出土 刀剣実測図

430:ST-19, 431:ST-20, 432:ST-23, 433:ST-25, 434:ST-26, 435:ST-41



第71図 ST-20出土 銅劍(431)の鹿角装具実測図

義道は長さ0.70m内外、幅0.53m内外、高さは0.70m内外である。

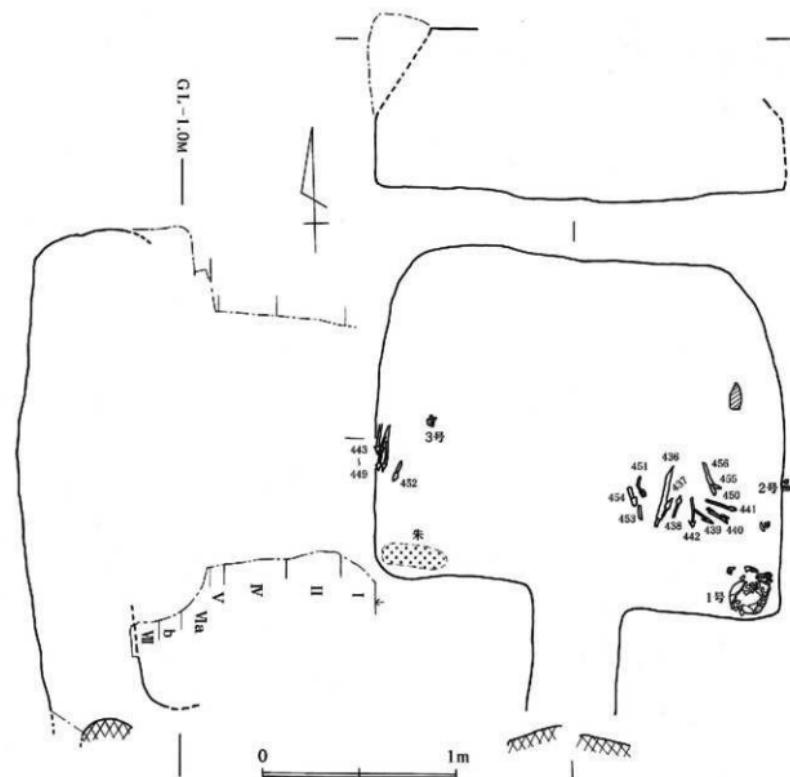
玄室は平入り両袖長方形を呈し、天井は寄せ棟である。幅は2.0m内外、奥行き1.60mを測る。被葬者は女性2体で、西頭位の2号人骨の方が遺存度が悪く、初葬の可能性が高い。1号人骨は南頭位で赤色顔料が塗布された頭骨左下部に刀子1本(401)が副葬されている。

ST-41 (第67図)

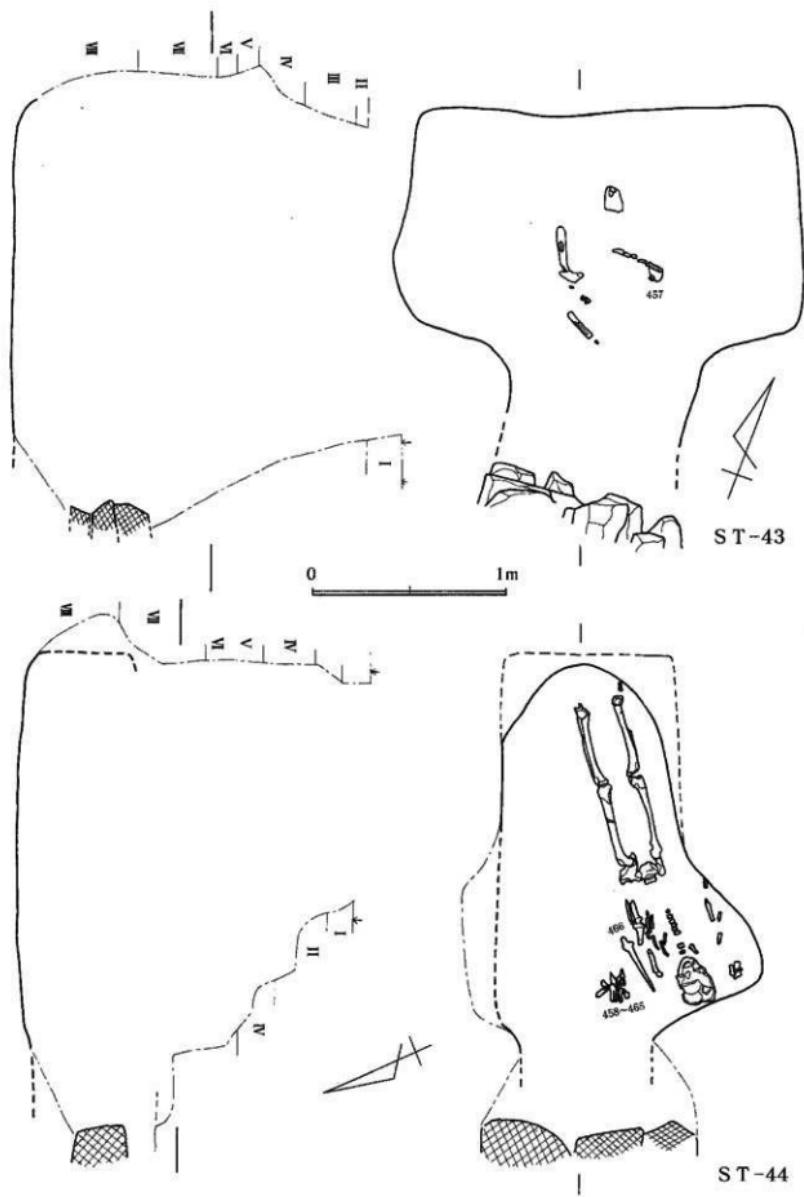
分布域の中央部、甲冑が出土したST-21の南東に位置し、主軸を北北西にとる義門閉塞タイプである。竪坑は長さ1.90m、幅1m内外の隅丸長方形を呈し、やや東寄りの主軸をとる。検出面では、北西隅と中央付近に直径18~28cmのPitを検出、竪坑の目印が立っていたものと思われる。

義門は西寄りに開口し、義道の長さは0.5~0.6m、幅0.70m内外、高さ0.58mを測る。

玄室は主軸がズレるもの、平入り両袖隅丸長方形を呈し、天井はドーム型である。幅は2.0~

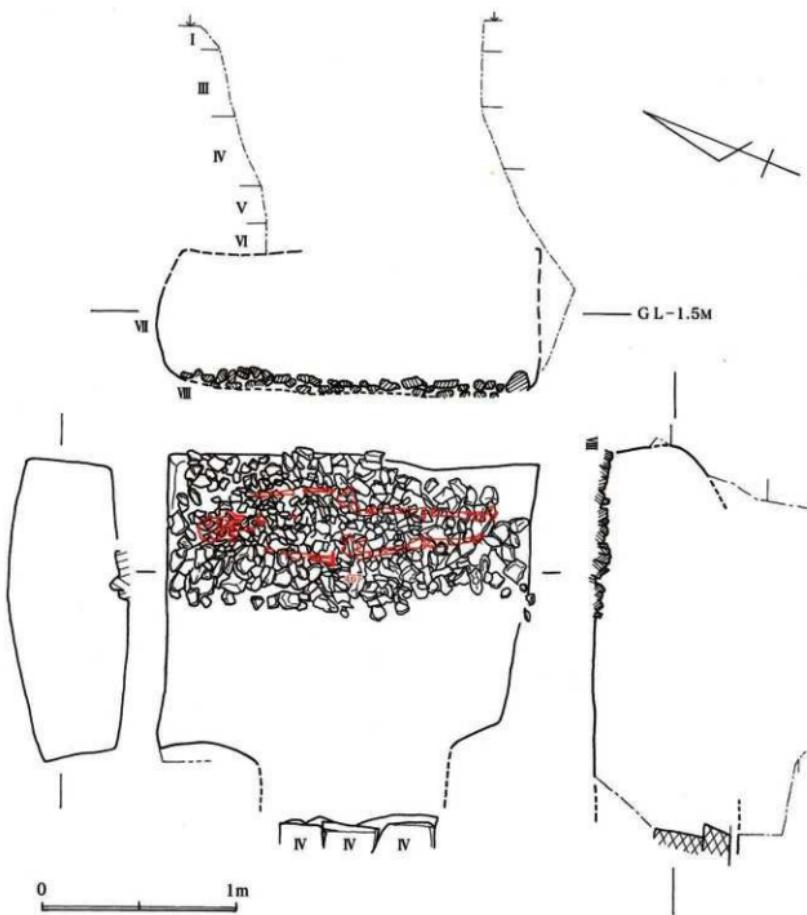


第72図 ST-42 遺構実測図

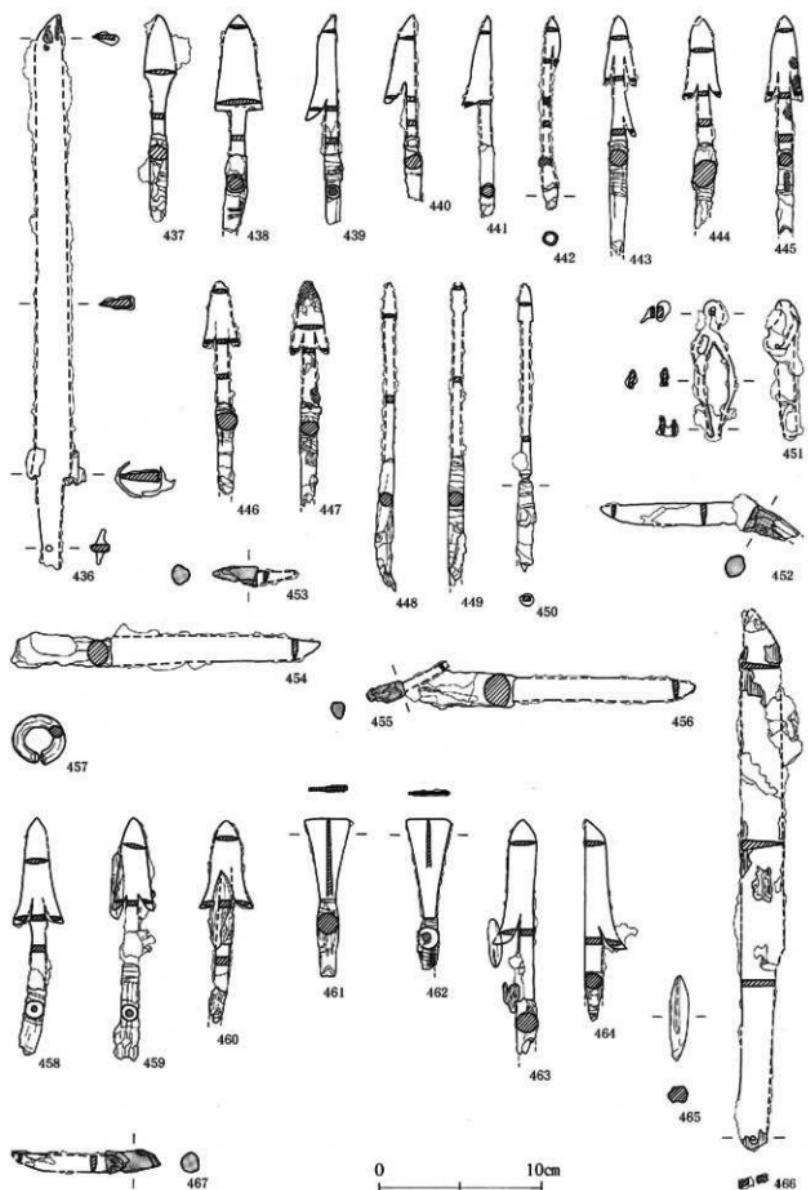


第73図 ST-43・44 遺構実測図

2.13m、奥行き1.70m、高さ0.80mを測る。被葬者は南頭位5体で、1号は人骨が遺存しないが、屍床に赤色顔料が塗布されている。2番目の被葬者は2号か5号であるが、定かでない。1号と2号の間には、高さ6cm程度の掘り残しがある。2号人骨は男性で、頭部後に長頸鐵1本(411)が副葬されている。また、3号人骨との間には鉄刺1振(435)と長頸鐵9本(403~410・412・413)が、足先部にも長頸鐵1本(402)が副葬されているが、帰属は定かでない。5・4号人骨は性別不明で副葬品も無い。3号人骨は女性で、赤色顔料が塗布されている。



第74図 ST-45 遺構実測図



第75図 ST-42~45 出土遺物実測図

436~456: ST-42, 457: ST-43, 458~466: ST-44, 467: ST-45

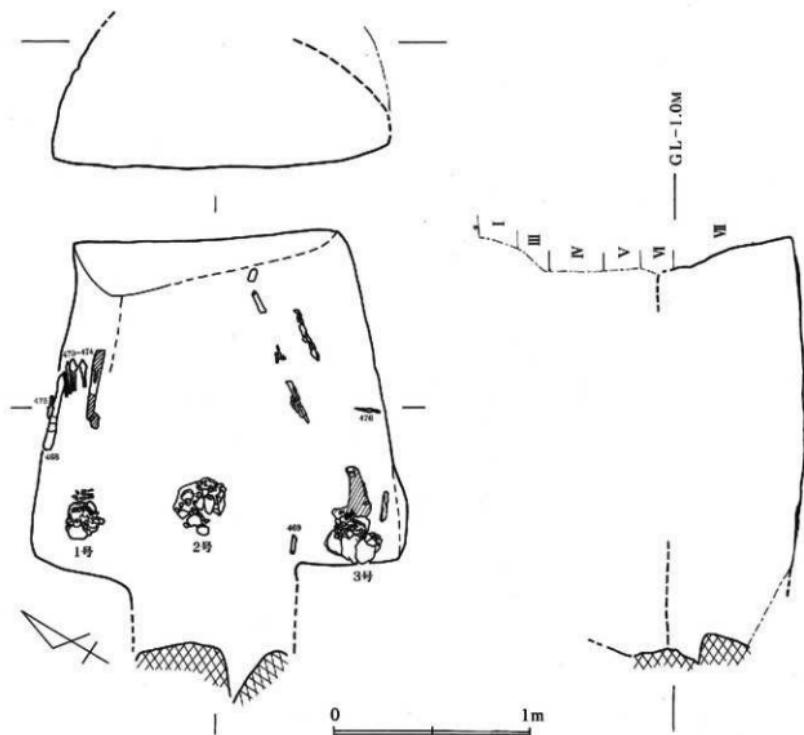
ST-42 (第72図)

分布域の中央部南東寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。竪坑は未調査であるが、IV層を主とするブロックで塞がれている。羨道は長さ0.60m内外、幅0.44m内外、高さ0.50mを測る。

玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈し、幅1.60m~2.08m、奥行き1.70mを測る。被葬者は3体であるが、遺存度が悪い。1号人骨は女性で、赤色顔料が塗布されている。2号人骨は小児で、左側に鉄刀1振(436)、三角形鏡2本(437・438)、片刃鏡3本(439~441)、長頸鏡2本(442・450)、鍤子1点(451)、刀子4点(453~456)が副葬されている。3号人骨の左側には、腸抉三角形鏡4本(444~447)と長頸鏡3本(443・448・449)、刀子1本(452)が副葬されている。

ST-43 (第73図)

分布域の南縁中央寄りに位置し、主軸を北北西にとる羨門閉塞タイプである。竪坑は未調査であ



第76図 ST-46 遺構実測図

るがIV層を主とするブロックで塞がれている。羨道は長さ0.80m以上、幅0.90m内外を測る。

玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈し、幅2.0m、奥行き1.15mを測り、若干の人骨と耳環1点(457)が出土した。

ST-44 (第73図)

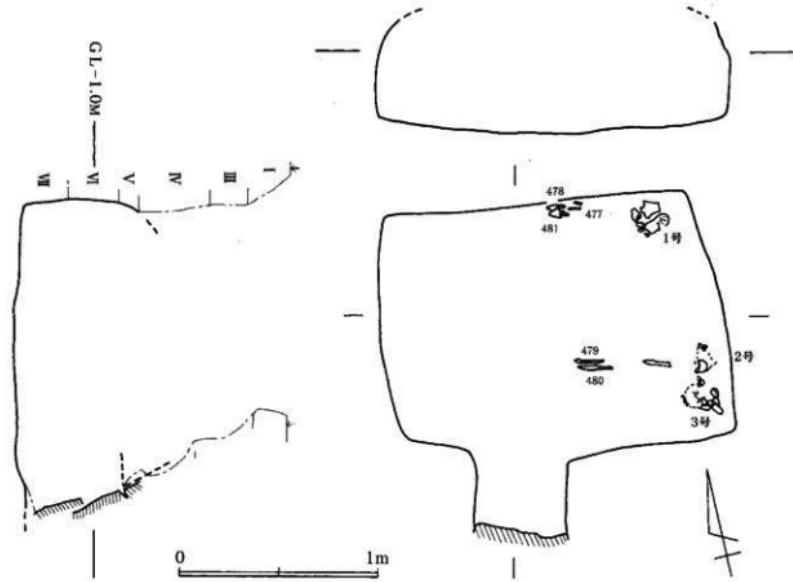
県指定1号墳の北約12mに位置し、主軸を東南東にとる羨門閉塞タイプである。竪坑は未調査あるが、IV層を主とするブロックで塞がれている。

玄室は不整形であるが、掘削当初は平入り両袖の予定であったものを嵌入りタイプに変更した様子が窺える。奥壁床面上0.52mのレベルには長方形を意識した掘削があり、その根拠になる。幅は0.81~1.37m、奥行き1.95mを測るが、天井の形状は不明である。被葬者は西頭位の男性1体で、小刀1振(466)、脇挾三角形鐵3本(458~460)、方頭鐵2本(461・462)、片刃鐵2本(463・464)が副葬されている。

ST-45 (第74図)

1号墳の北西約12mに位置し、主軸を東北東にとる羨門閉塞タイプである。竪坑は未調査あるが、IV層を主とするブロックで塞がれている。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、天井は寄せ棟と推定される。幅は1.85m内外、奥行きは1.50m



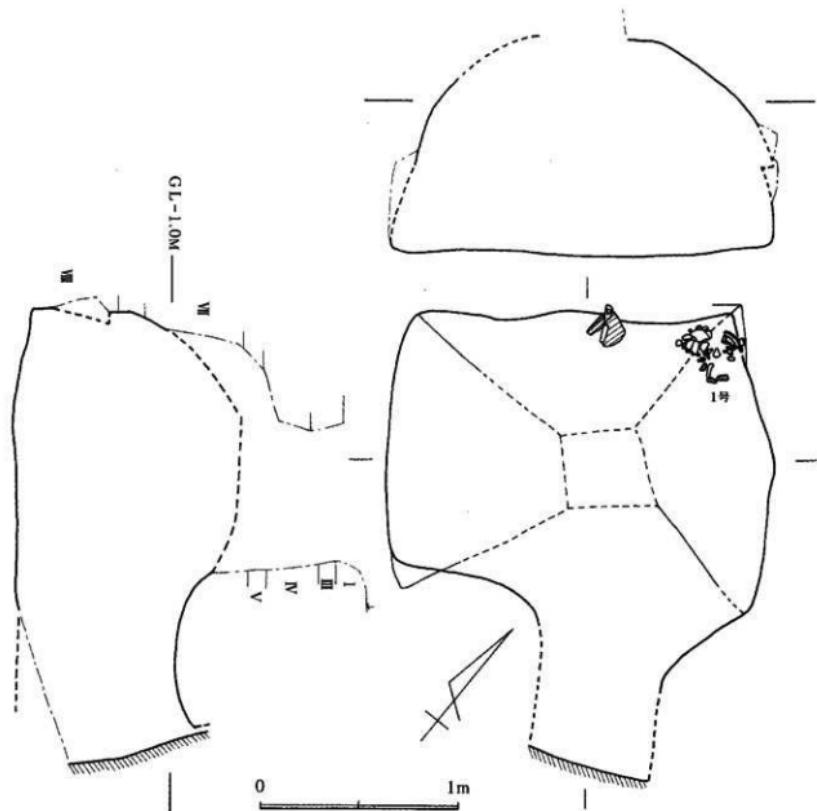
第77図 ST-47 遺構実測図

を測り、奥壁側に砾床が設けられる。被葬者は北西頭位の女性1体で、頭部に赤色顔料を塗布し、右手部に刀子1本(467)が副葬されている。

ST-46 (第76図)

分布域の中央やや東寄りに位置し、主軸を北東にとる羨門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、IV層を中心とするブロックで閉塞している。羨道の長さは0.40m以上、幅は0.82mである。

玄室は平入り両袖台形で、天井は寄せ棟タイプである。幅は1.34~1.87mで奥壁が狭く、奥行きは1.65mを測る。被葬者は南頭位3体で、若干の赤色顔料が認められる。埋葬順は不確定ながら、1号→3号→2号の順と思われる。1号人骨腰部の左横には、小刀1振(468)と三角形鐵2本(471~474)、方頭鐵2本(472~473)が副葬されている。3号人骨は女性で、腰部右横に刀子1本(476)



第76図 ST-46 遺構実測図

が副葬され、2号人骨との間に刀子1本(469)が副葬されている。

ST-47 (第77図)

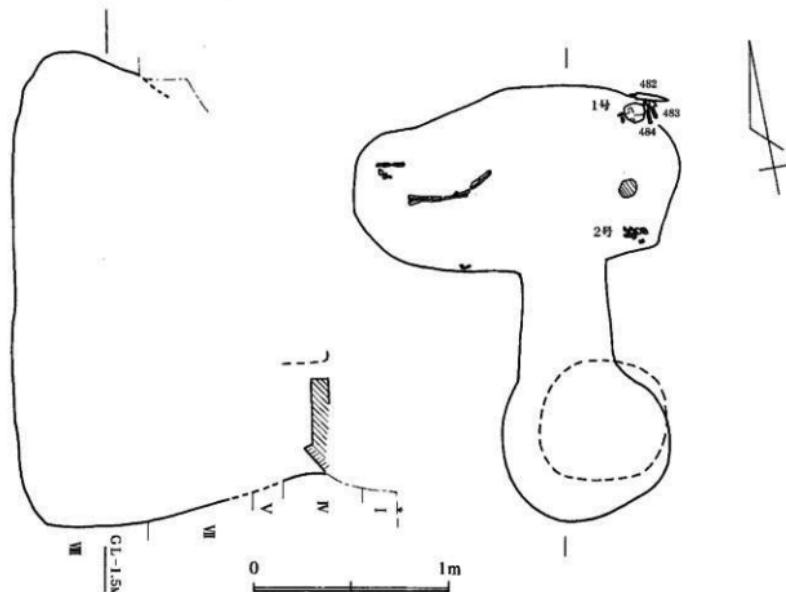
分布域の東南寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、板石で塞いでいる。羨道は長さ0.38m内外、幅0.45m、高さ0.54m内外を測る。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、幅1.55~1.75m、奥行き1.16~1.32mを測る。被葬者は東頭位3体である。1号人骨は赤色顔料を塗布した男性で、右側に圭頭鐵2本(477・478)と脇抉三角形鐵1本(481)が副葬されている。2・3号人骨の性別は不明で、どちらかに脇抉三角形鐵1本(479)と片刃鐵1本(480)が副葬されている。

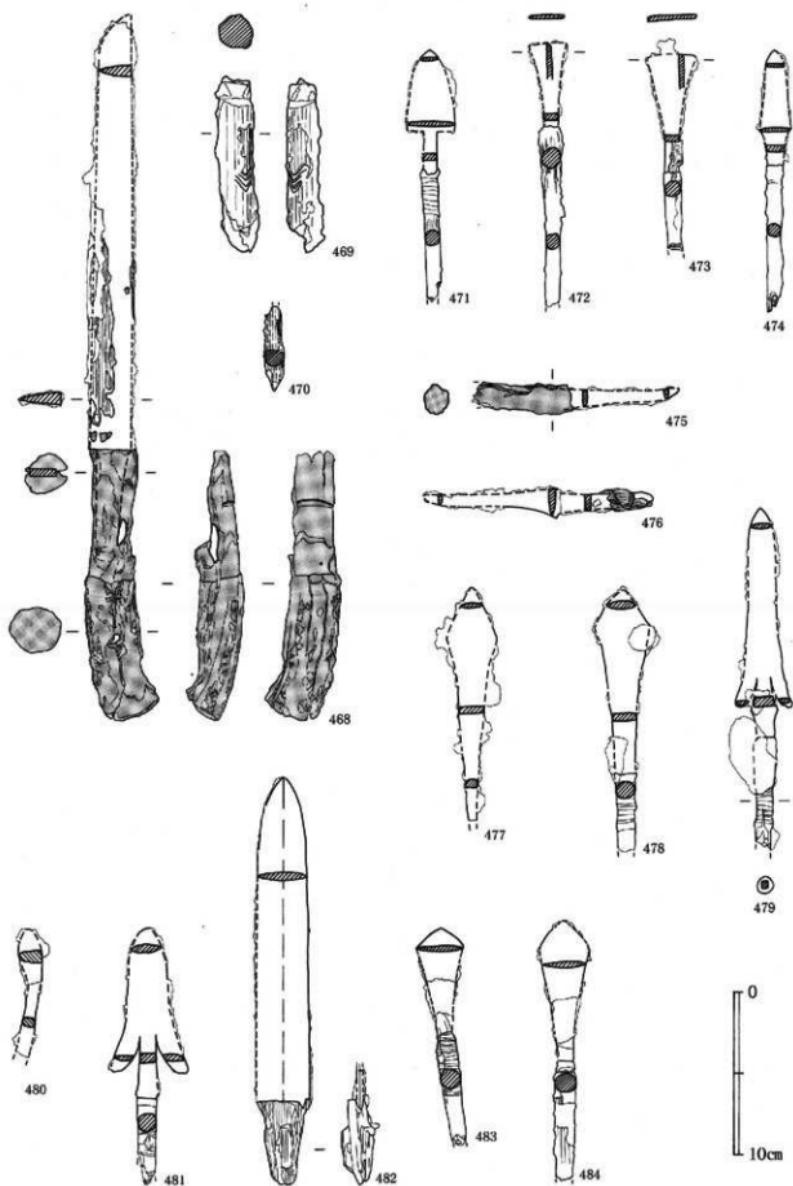
ST-48 (第78図)

分布域の北縁西寄りに位置し、主軸を北西にとる羨門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが板石で塞いでいる。羨道は長さ0.60m内外、幅0.62m内外、高さ0.80m内外を測る。

玄室は平入り両袖長方形タイプを呈し、幅2.0m、奥行き1.40mを測る。天井は寄せ棟タイプで棚状施設の痕跡を残す。被葬者は北東頭位の1体で、奥壁沿いに埋葬されていたようである。頭骨には若干の赤色顔料が塗布されているが、副葬品は無い。



第79図 ST-49 遺構実測図

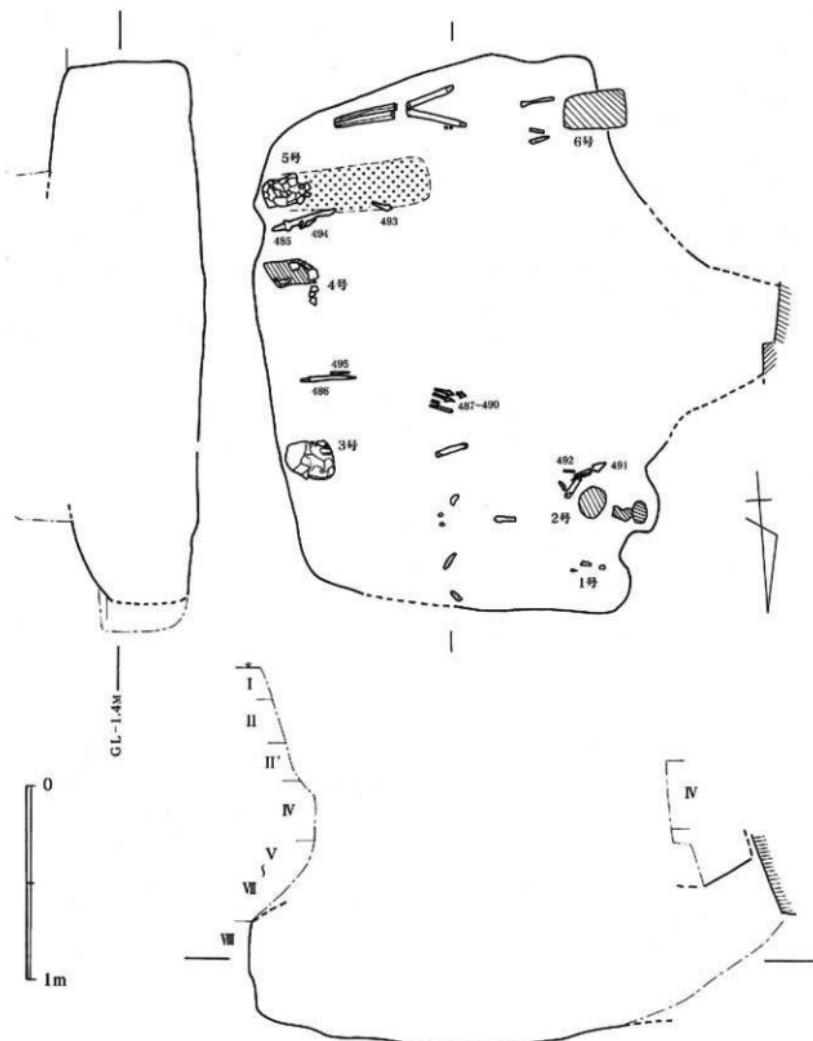


第80図 ST-46~49 出土遺物実測図

468~476: ST-46, 477~481: ST-47, 482~484: ST-49

ST-49 (第79図)

分布域の北縁やや東寄りに位置し、主軸を北にとる堅坑上部閉塞タイプである。堅坑上部は未調査である。羨道は長さ0.54m内外、幅0.44~0.48mを測る。



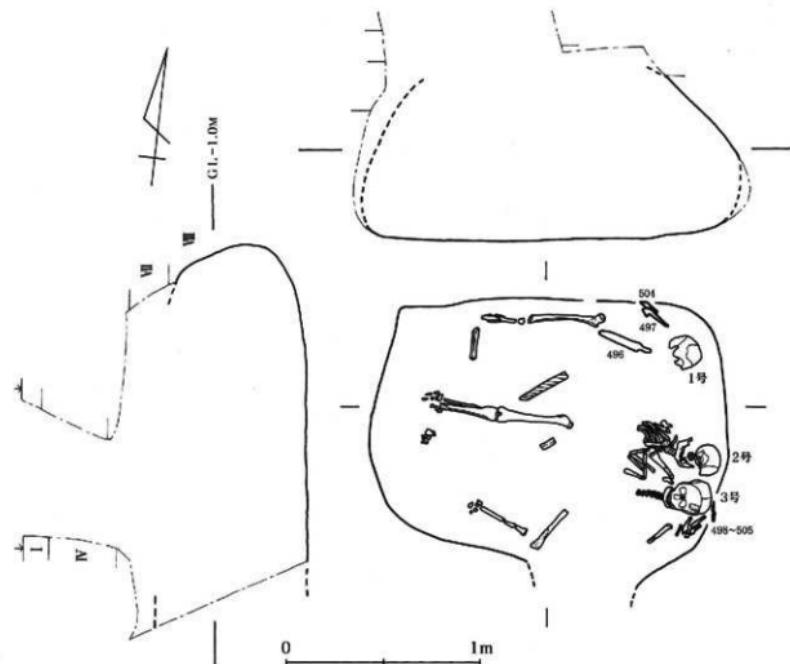
第81図 ST-50 遺構実測図

玄室は平入り両袖梢円形を呈し、最大幅1.67m、奥行き0.95mを測る。被葬者は東頭位2体で、性別不明である。1号人骨には赤色顔料がみられ、頭部後には短剣1振(482)と圭頭鐵2本(483・484)が副葬されている。2号人骨には副葬品は無い。

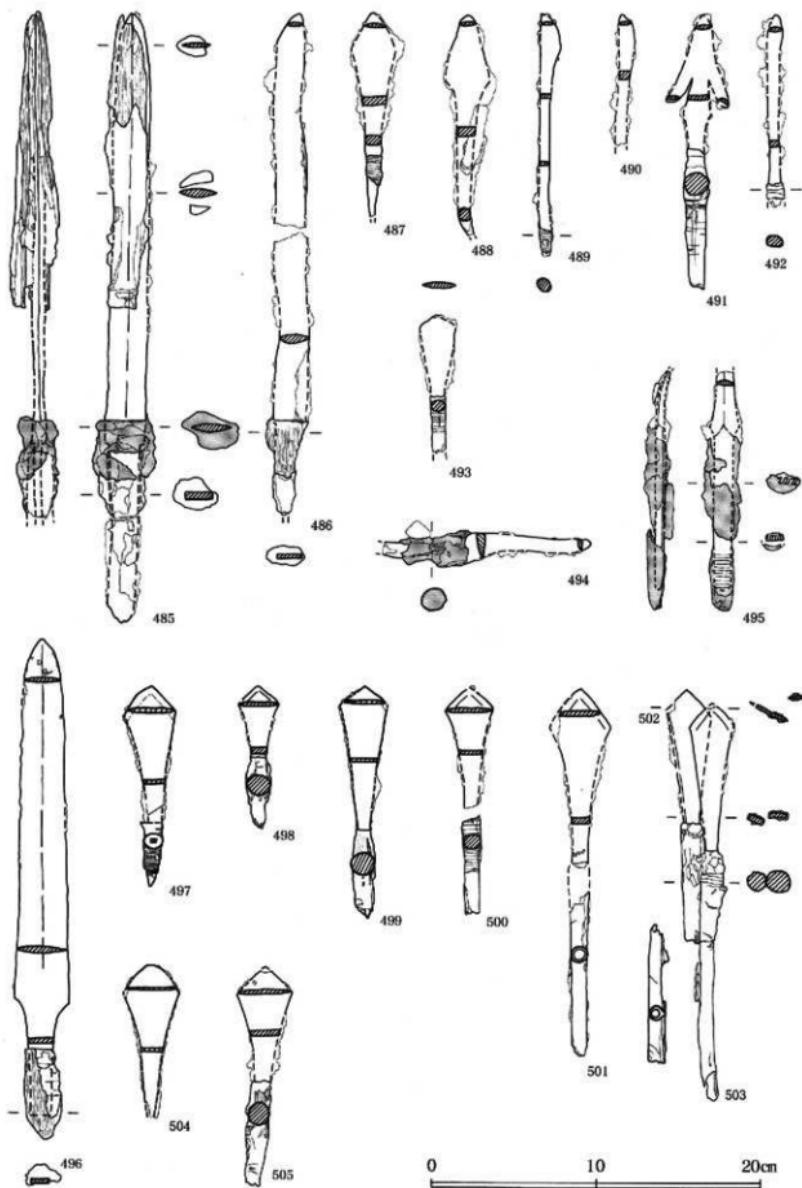
ST-50 (第81図)

分布域のやや西寄りに位置し、主軸を東にとる義門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、板石で閉塞している。

玄室は平入り両袖隅丸台形を呈し、天井は切妻タイプと推定される。幅は2.2~2.85m、奥行きは1.9~2.0m、高さ0.75~0.80mを測る大型タイプである。被葬者は遺存度の悪い6体で、埋葬順序は不明瞭である。1号人骨は西頭位で、副葬品は無い。2号人骨も西頭位で、脇挾三角形鐵1本(491)と長頸鐵1本(492)が頭部右横に副葬されている。3号人骨は東頭位の女性で、圭頭鐵2本(487・488)と長頸鐵2本(489・490)が伴うと思われる。赤色顔料を塗布された4号人骨と3号人骨頭部の間には短い蛇行剣1振(486)と鉈1本(495)があり、帰属は微妙である。5号人骨も東頭位で赤色顔料の屍床を有し、頭部右横に短剣1振(485)と刀子1本(494)、やや離れて圭頭鐵1本(493)



第82図 ST-51 遺構実測図



第83図 ST-50・51 出土遺物実測図

485~495: ST-50, 496~505: ST-51

が副葬されている。6号人骨は東頭位で、副葬品を持たない。以上を総合すると、1号→6号→2号→5号→4号→3号の順（1号と2号、5号と4号は殆ど時期差が無い）に埋葬されたと思われる。

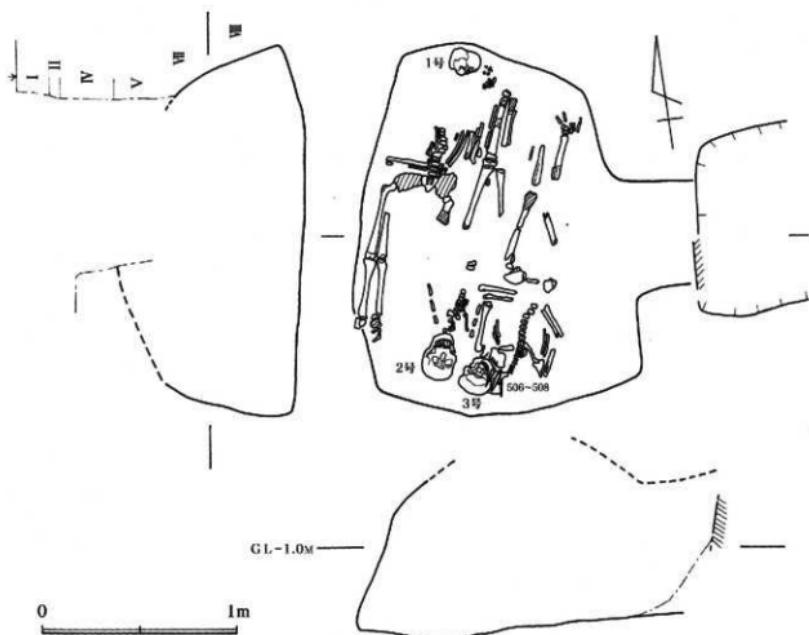
ST-51 (第82図)

分布域の西縁に位置し、主軸を北にとる渢門閉塞タイプである。豊坑は未調査で、閉塞材が遺存していないことから板閉塞と考えられる。

玄室は平入り両袖隅丸長方形～楕円形を呈し、天井はドーム型に近い、幅は1.50～1.84m、奥行き1.35mで、高さは0.90m前後と思われる。被葬者は、東頭位3体である。1号人骨は男性で赤色顔料が塗布され、胸部に短剣1振(496)と右肩横に圭頭鎌2本(497・504)が副葬されている。2号人骨も男性であるが、副葬品は無い。3号人骨は若年で、頭部左横に圭頭鎌7本(498～503・505)が副葬されている。

ST-52 (第84図)

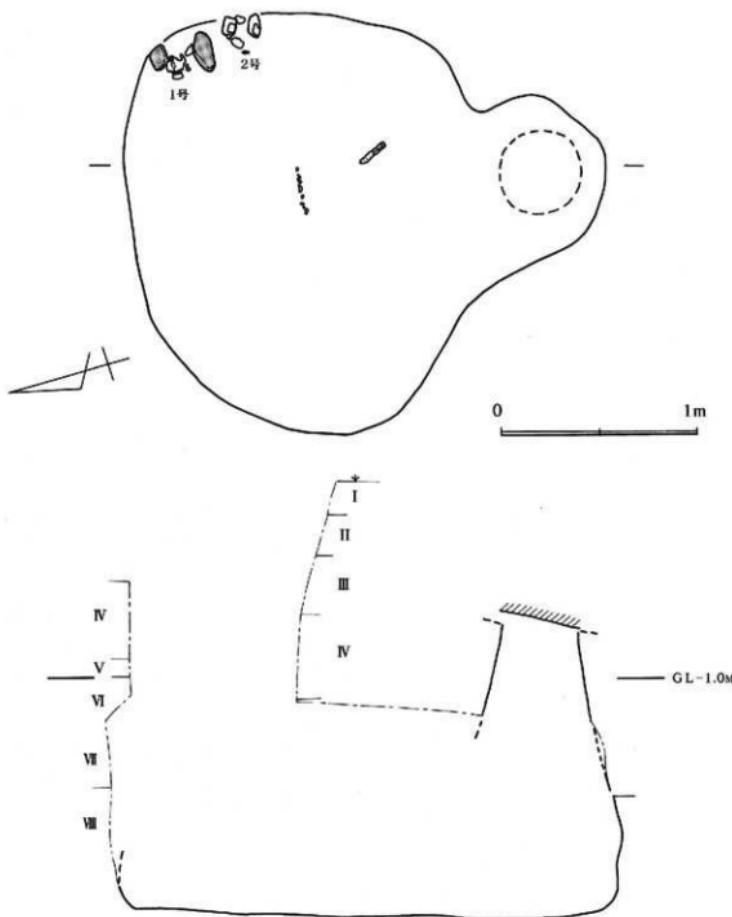
分布域の北西部に位置し、主軸を西にとる渢門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、板石で



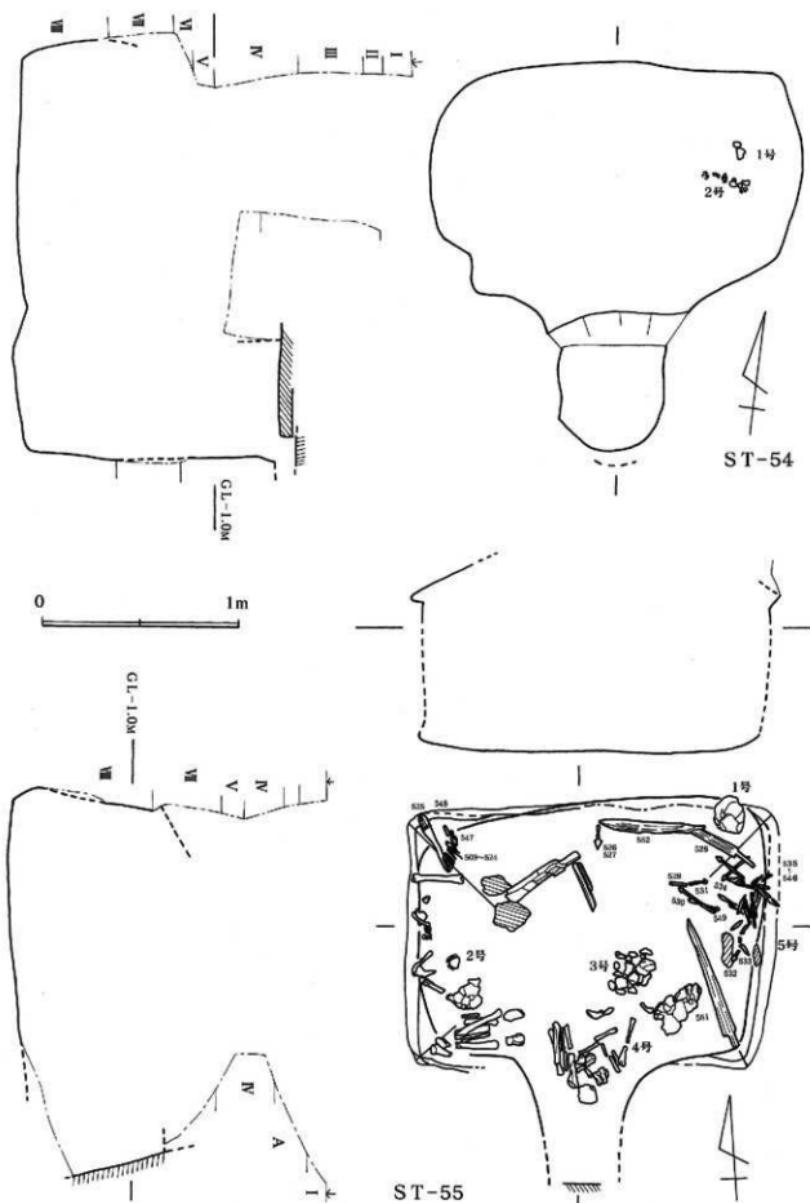
第84図 ST-52 遺構実測図

閉塞している。羨道は長さ0.40m内外、幅0.52~0.60m、高さ0.68m内外を測る。

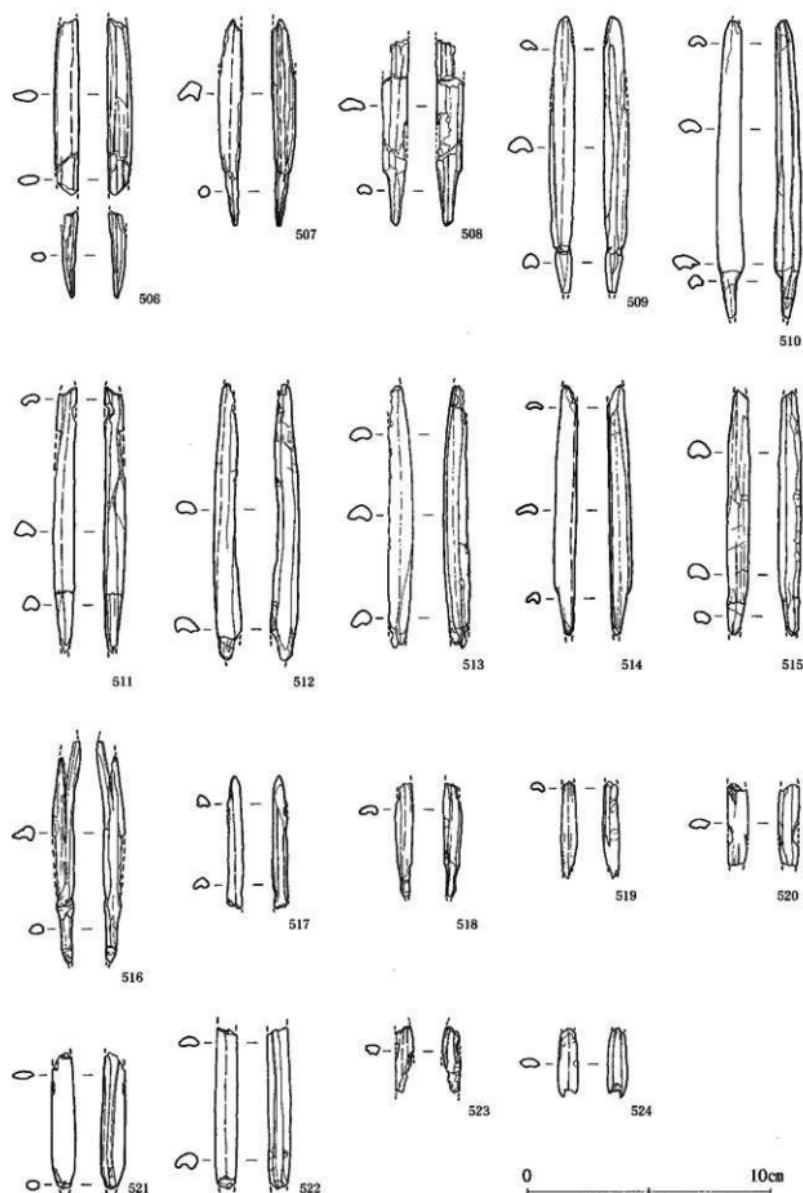
玄室は平入り両袖不整合台形を呈し、天井はドーム型である。幅は1.34~1.90m、奥行き0.92~1.44mで右側壁が短く、高さは0.92m内外を測る。被葬者は3体で、全て女性である。1号人骨は北頭位で赤色顔料が塗布されている。2・3号人骨は南頭位で、3号頭部の右下から骨鏡3本(506~508)が出土し、2号人骨に伴う可能性もある。



第85図 ST-53 遺構実測図

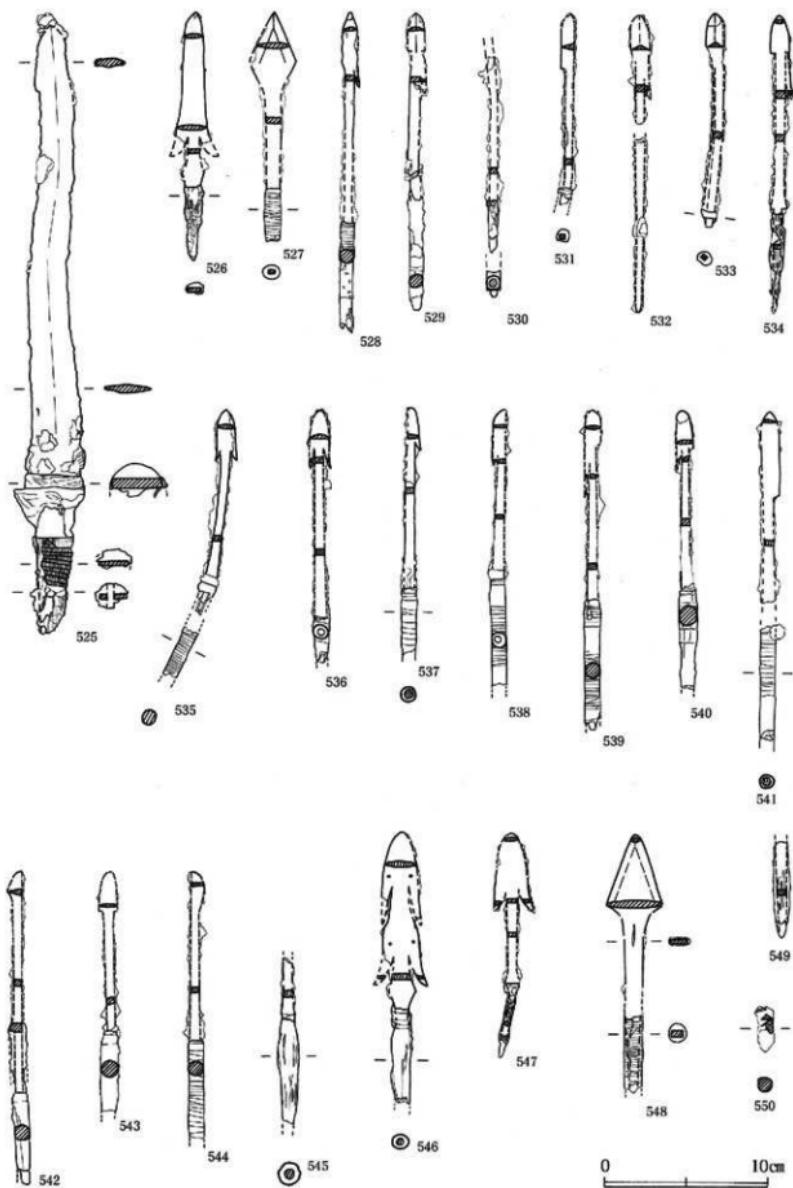


第86図 ST-54・55 遺構実測図



第87図 ST-52・55出土 骨鑑実測図

506~508 : ST-52, 509~524 : ST-55



第88図 ST-55 出土遺物実測図

S T - 5 3 (第85図)

分布域の北縁やや西寄りに位置し、主軸を北にとる竪坑上部閉塞タイプである。竪坑は未調査であるが、板石のレベルからみると、1段目の掘り込みは0.35~0.40mの深さがあることが推定される。竪坑2段口の直径は0.40m内外で、底面までの深さは1.50m内外を測る。羨道は退化している。

玄室は平入り両袖楕円形を呈し、左右非対象形である。最大幅は2.15m、奥行きは1.70mを測る。被葬者は東頭位2体である。1号人骨には石枕を有し、赤色顔料が塗布されている。副葬品は双方無い。

S T - 5 4 (第86図)

S T - 53の南東に位置し、主軸を北にとる竪坑上部閉塞タイプである。竪坑は未調査であるが、板石を確認した。羨道は殆ど退化しているが、竪坑と玄室の間に僅かな高まりがある。

玄室は平入り両袖隅丸長方形～楕円形を呈し、最大幅は1.90m、奥行き1.25mを測る。被葬者は東頭位2体で、副葬品は無い。

S T - 5 5 (第86図)

分布域の西縁部、S T - 52の南西に位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。竪坑は未調査であるが、板石で閉塞している。羨道の長さは0.64m、幅0.36~0.74m、高さ0.70m内外を測る。玄室は平入り両袖長方形を呈し、棚状施設を有する寄せ棟タイプである。幅は1.70~1.89m、奥行き1.30mを測る。被葬者は5体で、2号人骨のみ南頭位、他は東頭位である。1・2・5号の頭骨には、赤色顔料が塗布されている。被葬者は、人骨の遺存度などから1号→5号→2号→3号→4号の順に埋葬されたと思われる。1号人骨は男性で、鉄刀1振(552)と腸抉柳葉鎌1本(526)・長頸鎌1本(527)が副葬される。5号人骨との間には長頸鎌18本(528~545)と腸抉柳葉鎌1本(546)が散在するが、帰属は不確定である。鉄刀は奥壁に立て掛けられたものと思われ、途中で折れている。2号人骨の足先には、立て掛けられた短い蛇行剣1振(525)と刻印のある長頸鎌1本(548)、腸抉三角形鎌1本(547)、さらには骨鎌12本(509~524)が副葬されている。3号人骨は女性で、南西隅に足先を向ける。4号人骨は羨道にまで入り込む屈葬であり、鉄刀1振(551)が伴うと思われる。3・4号人骨埋葬時は埋葬スペースが狭小となり、屈葬せざるをえなかつたと思われ、3号人骨頭部から南東隅のスペースに鉄刀が置かれたものと推測する。

S T - 5 6 (第89図)

分布域の北西縁辺寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。竪坑は未調査であるが、板石で塞いでいる。羨道は長さ0.36mと短く、傾斜している。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、10cm低くなる。幅は2.18~2.50m、奥行き1.80m、高さ1.16mを測る。右側にはベンガラを塗布した石膏状施設があり、棺内と壁面にも塗布され、空間的にも

棺外とは分離されている。被葬者は棺内に2体、棺外に4体で、全て南頭位である。埋葬は、1号→2号→6号→5号→4号→3号の順と思われる。

1号人骨は幼児で両前腕に貝釧を、右側に3個、左側に6個着装している。足先から奥壁にかけて主頭鑓3本(570~572)と長頸鑓20本(573~578、579~603)、鉗1本(579)が副葬されている。

これら一群の遺物は散乱状態であり、奥壁に立て掛けられていた可能性もある。2号人骨の左横には曲剣1振(553)と短剣1振(567)、主頭鑓2本(568・569)が副葬されている。6号人骨の頭部左横には、曲剣1振(566)と鉄剣1振(555)が立て掛けられており、左腰部には長頸鑓14本(606~621)と骨鑓4本(624~627)が副葬されている。5号人骨は男性で、右足先には鉄剣1振(554)と主頭鑓(604)、無頭鑓(605)が副葬されている。4・3号人骨は若年で、副葬品は無い。

ST-57 (第90図)

分布域の東南寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。竪坑は未調査であるが、板石で閉塞している。羨道は長さ0.40m、幅0.60m内外、高さ0.60m内外を測る。

玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈し、人骨頭部後面が突出する。幅は1.70~2.10m、奥行き1.65mを測り、天井は寄せ棟に近い。被葬者は南頭位1体で、頭部に赤色顔料が塗布されている。頭部右横に刀子1本(623)、右足外方に鉄鑓1本(622)が副葬されている。鉄鑓は頸部のみであるが、長頭鑓と思われる。

ST-58 (第95図)

分布域の北縁西寄りに位置し、主軸を北にとる竪坑上部閉塞タイプである。竪坑のプランは確認したが、掘り込んではいない。長軸1.13m、短軸0.84mの長D字形を呈し、2段目の直径は0.50m深さ1.40mを測る。羨道は退化し、玄室床面は6cm内外高くなる。

玄室は膨らみのある隅丸台形を呈し、最大幅1.95m、奥行き1.14m、竪坑下部まで含めると、1.63mを測る。被葬者は東頭位2体である。1号人骨は女性で、頭部には赤色顔料が塗布され、石枕を有する。右肩部には、脇抉柳葉鑓2本(629・630)と柳葉鑓1本(631)、主頭鑓2本(632・633)が副葬されている。2号人骨は男性で、左肩外方に鉄矛1本(628)が副葬されている。

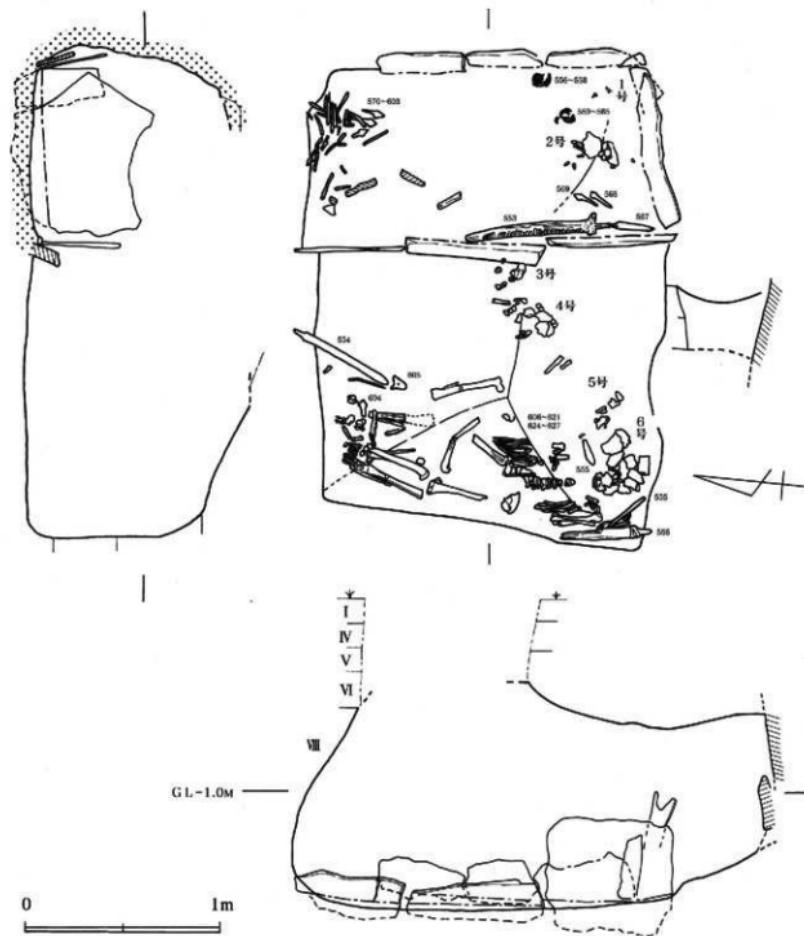
ST-59 (第96図)

分布域の北西端部に位置し、主軸をやや西寄りにとる竪坑上部閉塞タイプである。竪坑は検出～半截～全掘調査を実施した。竪坑1段目の長軸は長さ1.09m、短軸は0.98mを測る卵型を呈し、北端に直径0.50m、深さ1.12mの2段目が掘り込まれる。上部は、板石3枚で閉塞される。羨道は長さ0.46m内外、幅0.88mと広く、高さは一定でない。

玄室は平入り両袖台形を呈し、奥壁右側が彎曲している。天井はドーム型で、幅1.76~1.34m、奥行き0.80m、高さ0.63mを測る。被葬者は、東頭位の女性1体で、赤色顔料が塗布されている。

ST-60 (第97図)

分布域の東南部に位置し、主軸を北西にとる羨門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、IV層を主とするブロックで閉塞されている。羨道の幅は1.04~1.10mと広く、高さは0.64mを測る。玄室は平入り両袖隅丸不整長方形~台形を呈し、天井はドーム型である。幅は1.66m、奥行きは1.30m前後を測り、右側壁は長さ0.86mと短い。被葬者は北東頭位2体で、2号→1号の順に埋葬されたと思われる。2号人骨は幼児の頭骨片が1号頭骨に接して遺存している。奥壁沿い中央に副葬品の刀子1本(637)がある。1号人骨は若年で、下半身屍床に赤色顔料が塗布されている。



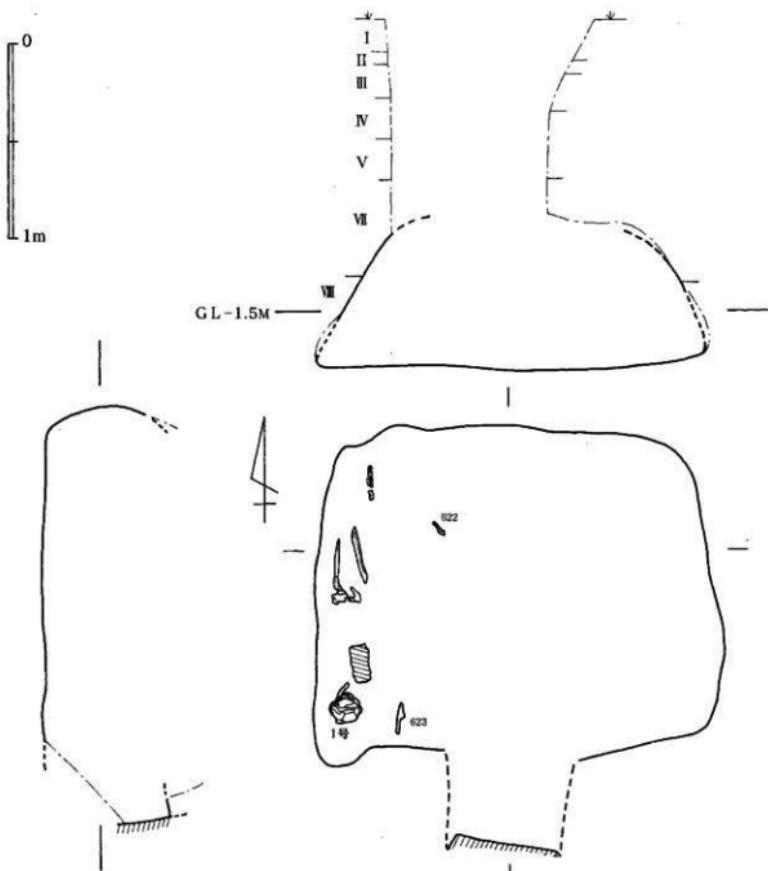
第89図 ST-56 遺構実測図 アミ目はベンガラ塗布

頭部壁側には耳環1対(634・635)と刀子1本(636)がある。

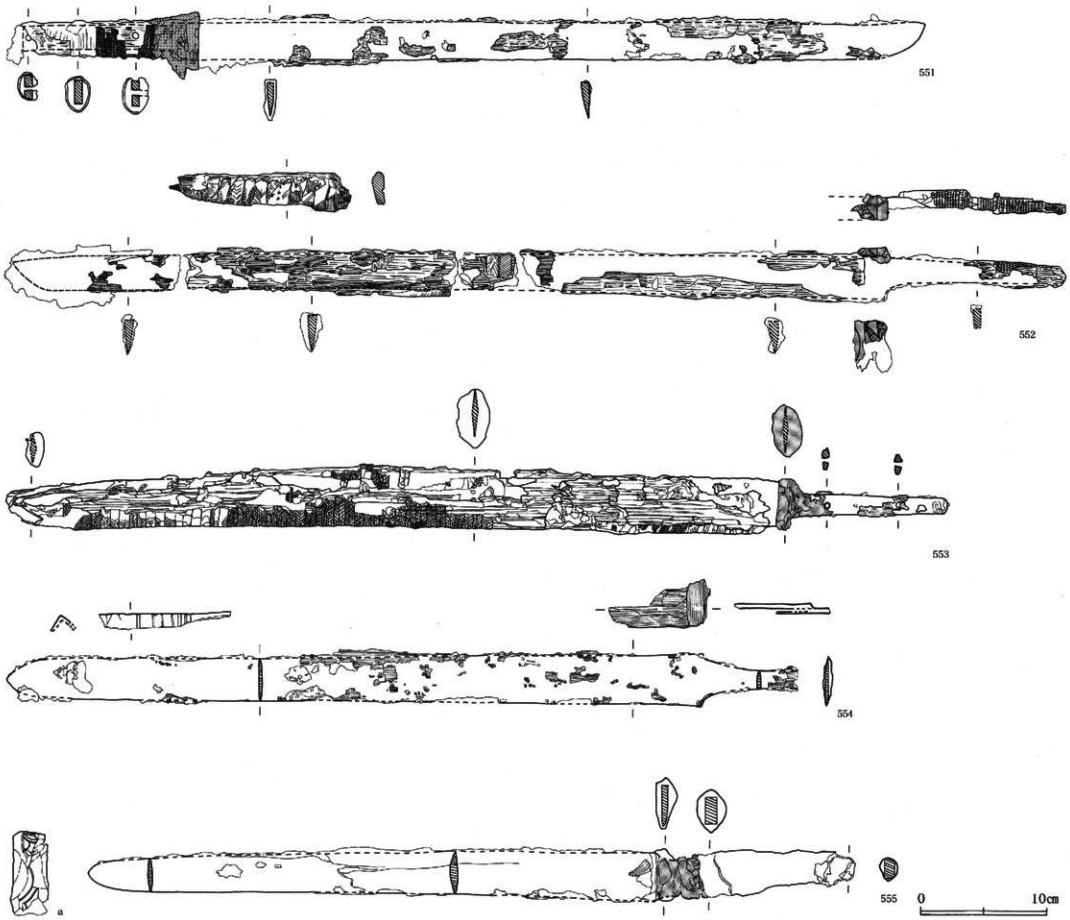
ST-61 (第98図)

分布域の中央北西寄りに位置し、主軸を北北東にとる堅坑上部閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、1段目底面が傾斜していることを確認した。

玄室は平入り両袖台形を呈し、天井は寄せ棟と思われる。右袖は僅かに形状を示す程度で、右奥壁が突出する左右非対象形である。幅は1.74~1.86m、奥行き1.38~1.61mを測る。被葬者は東

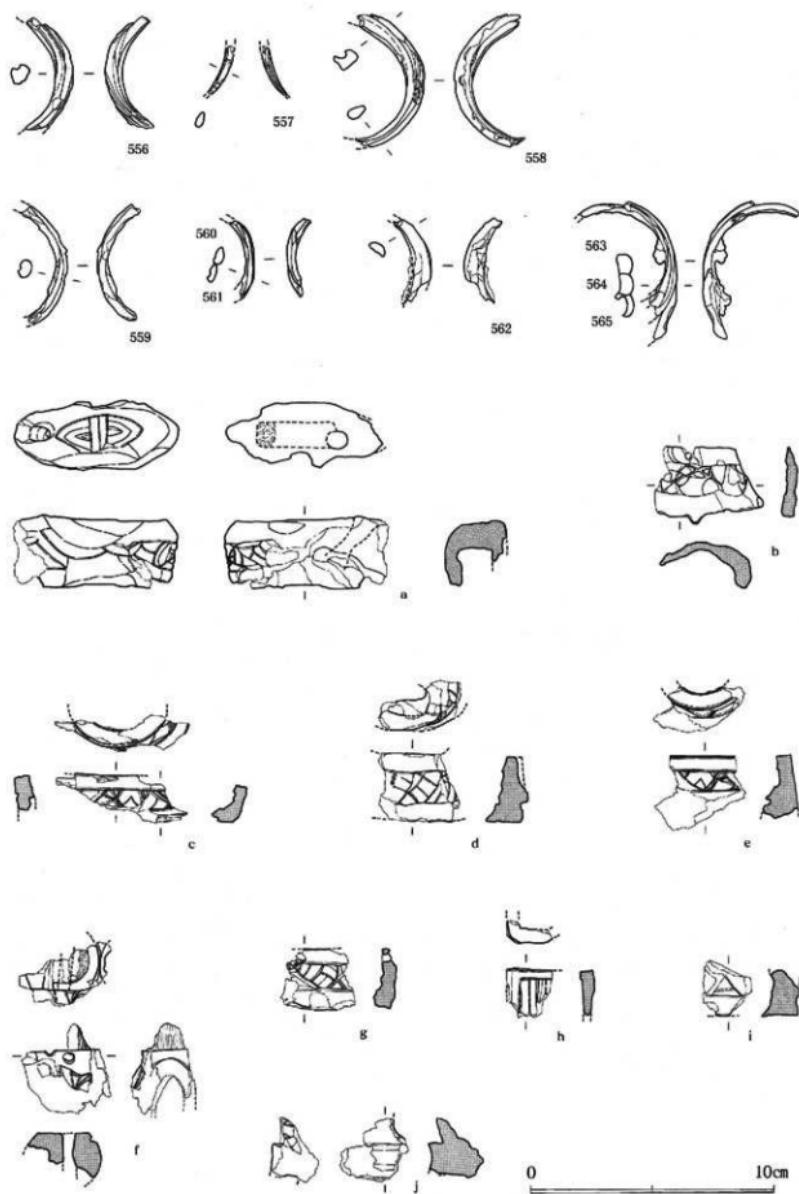


第90図 ST-57 遺構実測図



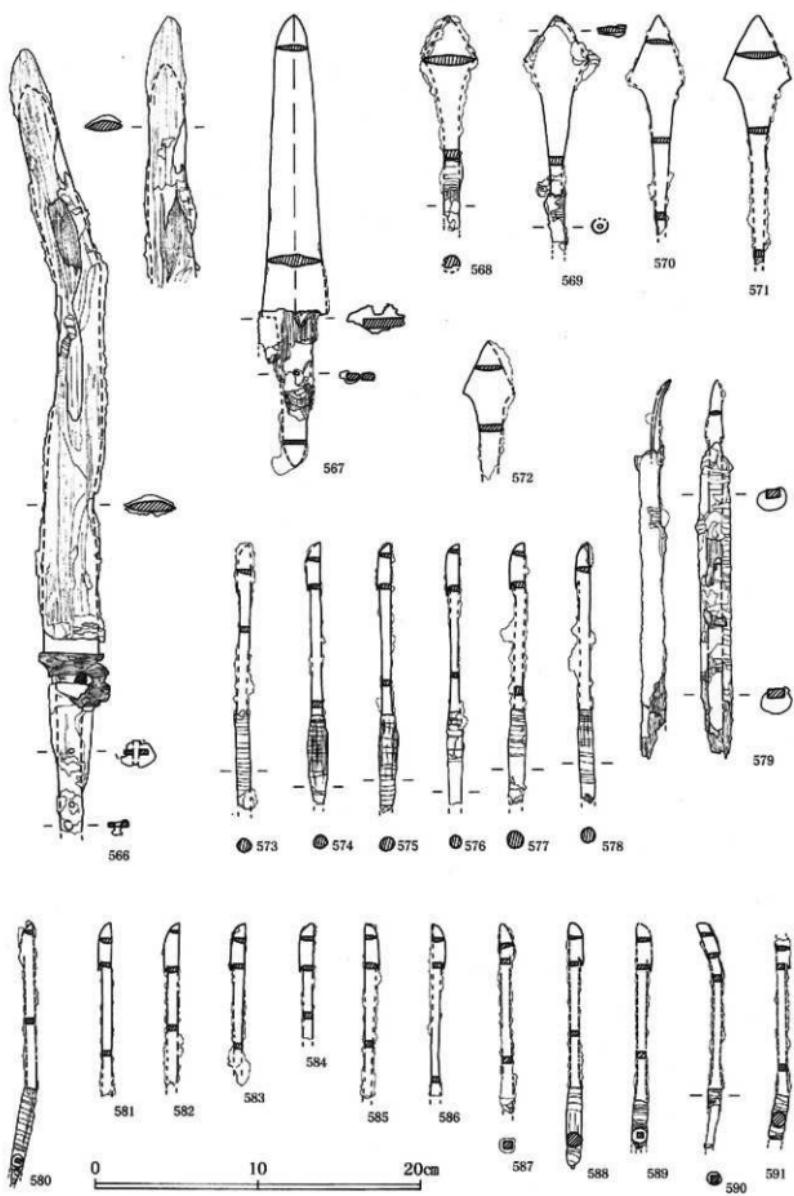
第91図 ST-55~56出土 刀剣実測図

551-552: ST-55 (その3), 553-555: ST-56

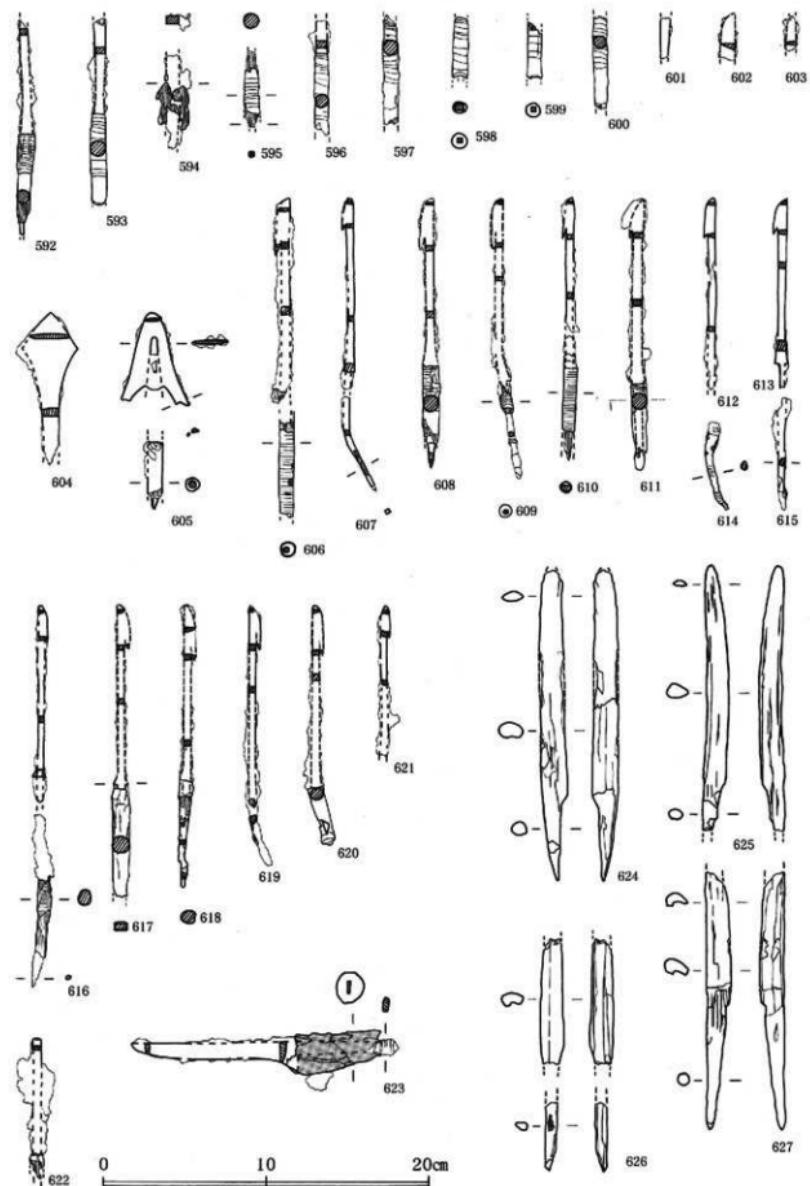


第92図 ST-56出土 貝釧実測図

a:555の鹿角貝具実測図。b:566, c~j:553



第93図 ST-56 出土遺物実測図



第94図 ST-56・57 出土遺物実測図 592~621: ST-56, 622~623: ST-57, 624~627: ST-56; S=1/2

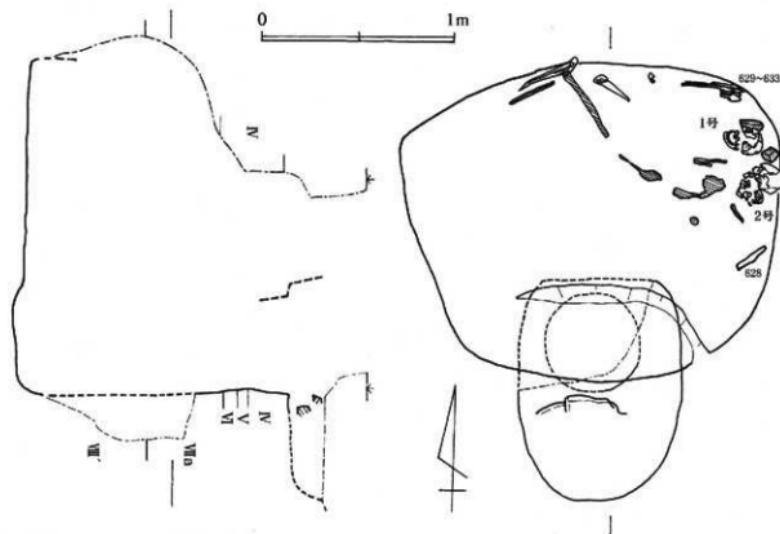
頭位3体で、1号と3号の頭骨に赤色顔料が塗布されている。1号人骨は男性で前頭部が離れているが、埋葬時はこの位置であったと思われる。右肩横に相当する位置に、主頭鎌5本(642~646)と脇抉三角形鎌1本(647)が副葬されている。2号人骨は女性で、下頬の下に赤色顔料が少量塗布されている。3号人骨は男性の可能性があり、左足横に主頭鎌4本(638~641)が副葬されている。

ST-62 (第99図)

分布域の中央部、甲冑が出土したST-21の北約25mに位置し、主軸を東にとる義門閉塞タイプである。竪坑は未調査であるが、板石で閉塞している。義道の長さは0.40m内外、幅0.53m、高さ0.50mを測り、義道底面以外全面に朱が塗布されている。

玄室は平入り両袖略台形を呈し、天井は寄せ棟タイプである。最大幅は2.30m、奥行き1.68mを測る。被葬者は南頭位の3体で、全てに赤色顔料が塗布されている。1号人骨は男性であり、遺存状態が良い。足先左の壁側に、前胴を玄室内に向け、右前胴が倒れた横矧板鈎留短甲1領(654)と、倒れた前胴の上に蛇行剣1振(904)、短甲の中に主頭鎌3本(648~650)が副葬されたと思われる。蛇行剣は、立て掛けられていたと思われる。2号人骨も男性で、足先に長頸鎌3本(651~653)が副葬されたと思われる。3号人骨は女性で、副葬品は伴わないと思われる。

短甲は、前胴の高さ36cm、後胴の高さ45.4cm・幅43.1cm、くびれ部の幅28.7cmを測り、前胴・後胴各7枚が鈎留めされている。覆輪から竪上にかかる絹製のワタガミ緒を固定する孔は、前胴は不明瞭であるが後胴の左上に1対認められる。また、中央にも縦に2孔あり、その右上に幅広く絹が



第95図 ST-58 遺構実測図

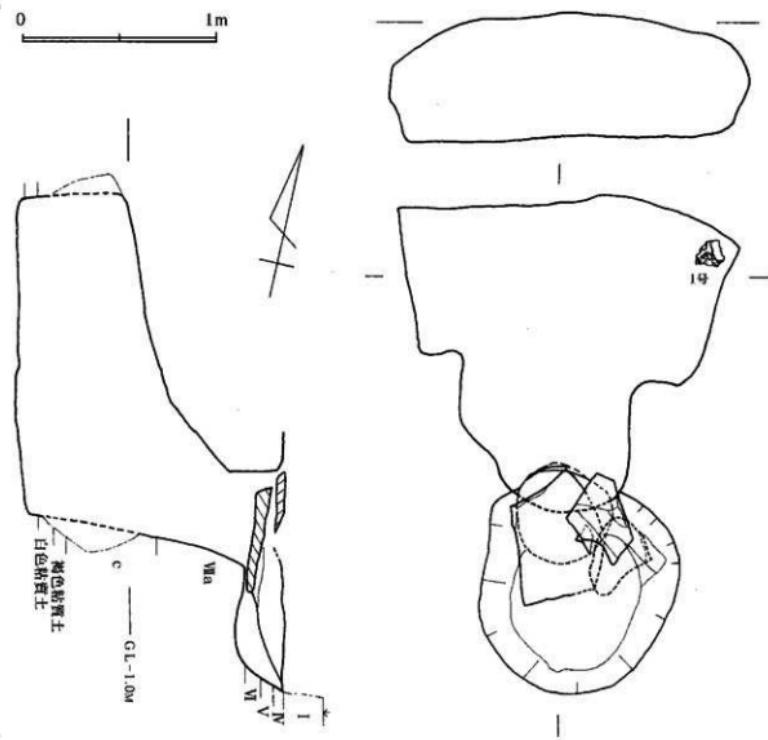
遺存している。

蛇行剣は木製鞘が遺存しているために形状が不明瞭であるが、X線投影によると、鉈から10cm～35cmの間ににおいて4回屈折している。

ST-63 (第103図)

分布域の北東寄りに位置し、主軸を北にとる渢門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、板石で塞いでいる。漠道は長さ0.70mと長く、幅は0.45～0.54mを測り、玄室に向かって傾斜している。玄室内覆土から丹塗りの壺（第143図）が出土し、墳丘供獻土器の可能性がある。

玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈し、右半部が不整形である。幅は1.90～2.28m、奥行き1.72～2.12mを測る。被葬者は東頭位2体（1・2号）と南頭位5体であり、5・6号が2号の下肢に乗っていることから、東頭位から南頭位への変化が明らかになった。人骨の遺存度などから、1号→2号→7号→6号→3号→4号→5号の順に埋葬されたと推定する。2号人骨以外は、赤色顔



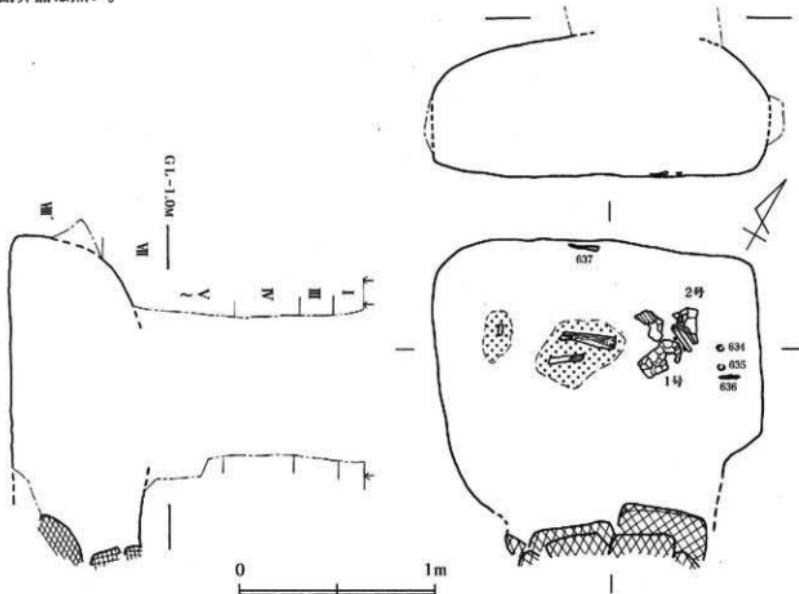
第96図 ST-59 遺構実測図

料が塗布されている。

1号人骨は女性である。2号人骨は男性で、圭頭鎌2本(659・660)が伴うと思われる。3号人骨は男性で、4号人骨(女性)との間に刀子1本(703)と鉄刀1振(655)、足先に骨鎌27本の束(711~739)が鉢を西に向けて副葬されている。骨鎌は床面から10cm位浮いており、1号人骨に伴わないことは断定できる。7号人骨は女性で、鉄剣1振(656)と圭頭鎌1本(658)が頭部右後に、右足先外方部には箆1本(657)と長頭鎌13~15本(663~702)が散在する。6号人骨は女性で、長頭鎌1本(661)が左腹部に出土した。5号人骨は最後の埋葬者にしては遺存度が悪いが、頭部付近に刀子1本(704)、右足横に鉄鎌頭部(662)と骨鎌6本前後(705~710)が伴うと思われる。

ST-64 (第108図)

分布域の北縁中央に位置し、主軸を北にとる堅坑上部閉塞タイプである。堅坑プランはいびつで初葬時は東西1.36m、南北1.17m内外の隅丸三角形を呈し、追葬時は東西1.14m、南北0.70m内外の不整梢円形を呈する。2段目掘り肩の直径は0.50mで、深さ1.50mを測る。羨道は長さ0.40m内外、幅0.53~0.60m、高さ0.87mを測る。羨道~玄室は、堅坑底面よりも8cm高くなる。玄室は平入り両袖梢円形を呈し、幅は1.50m、奥行き1.20mを測り、高さ0.90mの天井は水平に近い。被葬者は東頭位3体で、1号人骨に赤色顔料が塗布される。2号人骨は男性、3号人骨は女性で、副葬品は無い。

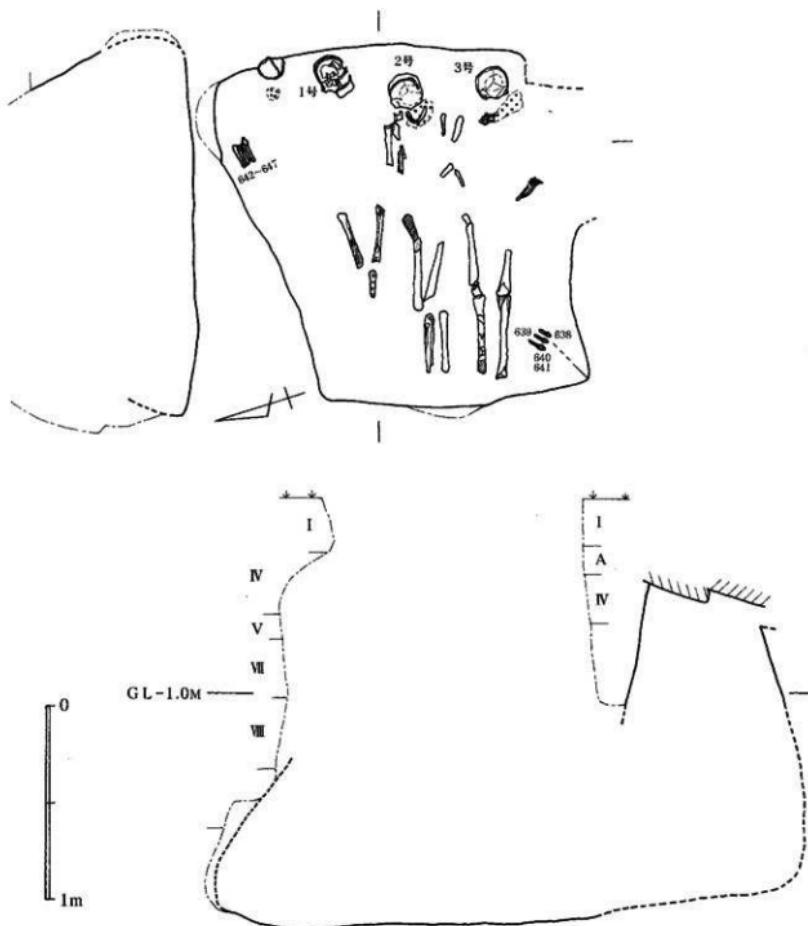


第97図 ST-60 遺構実測図

ST-65 (第109図)

分布域の中央南西寄りに位置し、主軸を北北東にとる淡門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、IV層を主とするブロックと板石を併用した閉塞である。羨道の長さは0.40m内外と短く、幅は0.76~1.30m、高さは1.08m内外である。

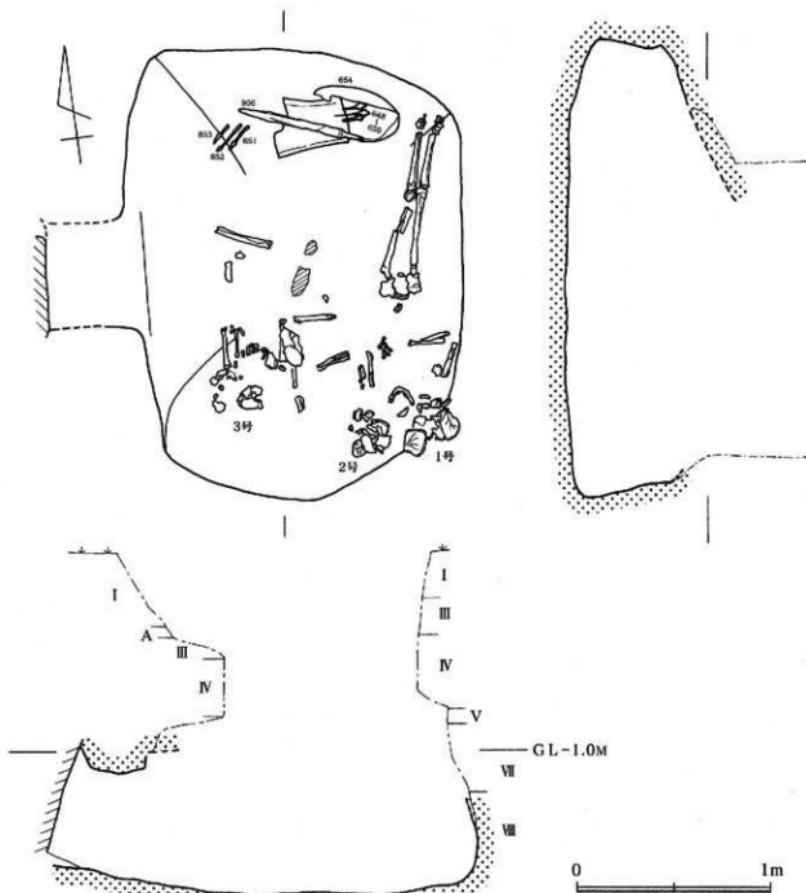
玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈し、最大幅3.19m、奥行き2.10mを測る当墳墓群の中でも最大級の規模である。被葬者は北頭位が2体（2・5号）、南頭位が2体（1・3号）、東頭位1体（4号）の5体で、遺存度の悪い3号人骨が初葬の可能性が高いが、最終葬者である4・5号人骨



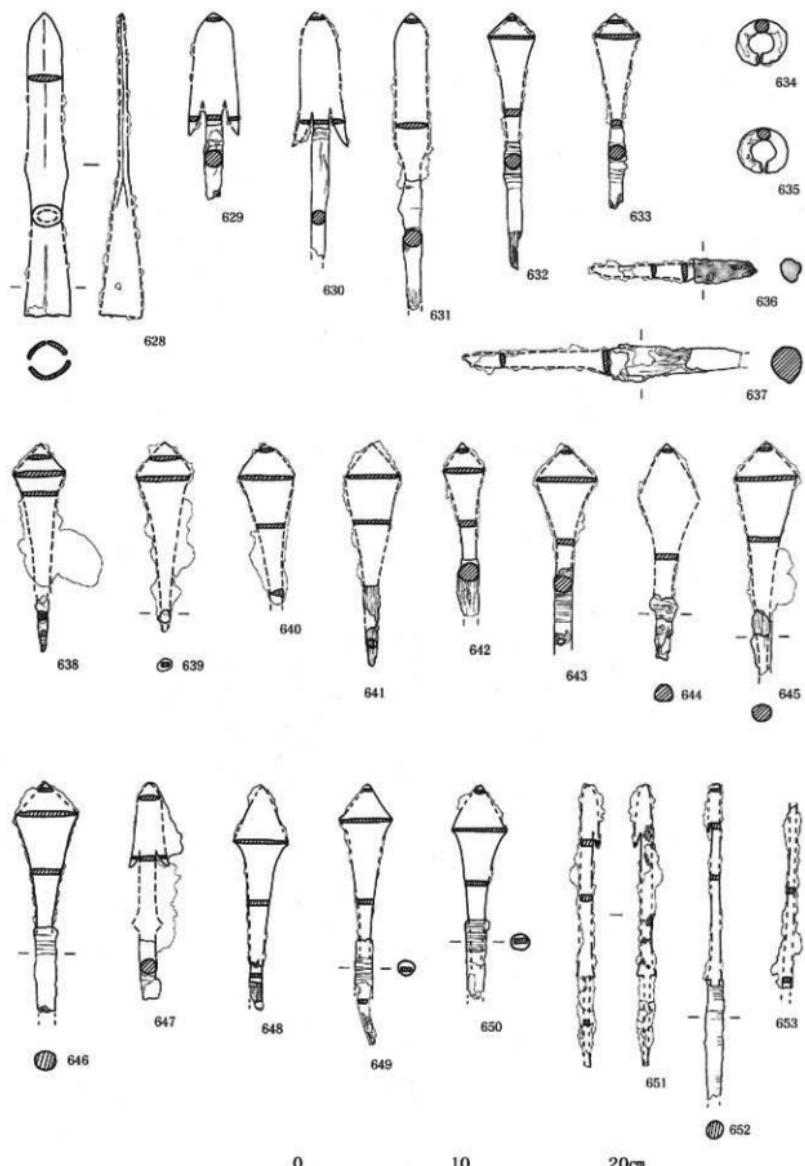
第98図 ST-61 遺構実測図

よりも前段階の2号人骨の方が遺存度が良いことや玄室西半分の人骨の依存度が悪いことを考慮すると、1号人骨が初葬の可能性もある。1・4号の頭骨には、赤色顔料が塗布されている。

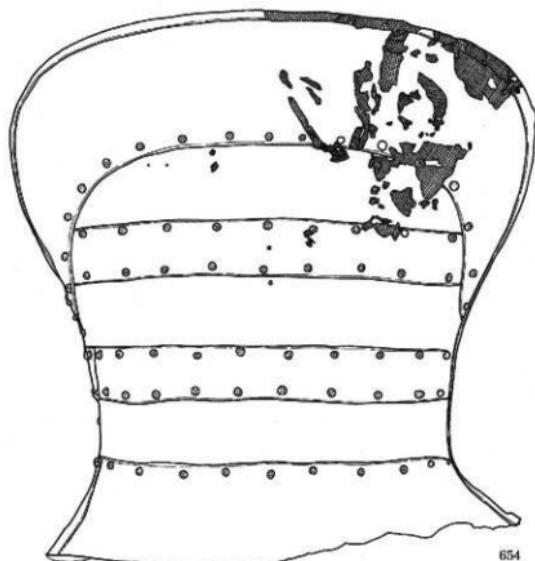
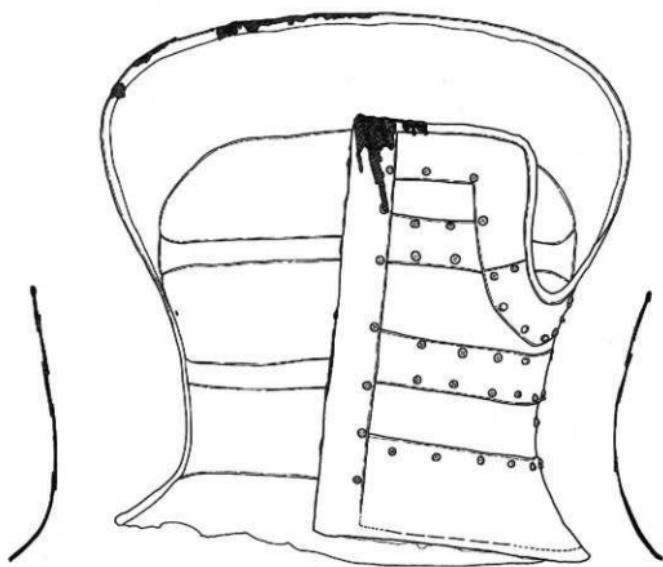
1号人骨は性別不明であるが、上半身右側に鉈を足に向かって鉄剣1振(740)と刀子1本(802)、右足の横には骨鏃6本(804~816)が副葬されている。2号人骨の頭部左横には刀子1本(800)と鉄鏃の茎部片が、足先には鉄矛1本(742)が副葬されている。4号人骨の頭部右には鉄剣の下半部(741)と鉄鏃37本(743~799)、刀子1本(803)が副葬されている。鉄鏃は、脇挾三角形鏃1本(743)、長三角形鏃2本(746・747)、主頭鏃2本(748・749)の他は長頭鏃で、脇挾タイプの744・745、主頭タイプの750~764、片刃タイプの765~785に分けられる。5号人骨の足先には刀子1本(801)が、4



第99図 ST-62 遺構実測図 アミ目は朱塗り



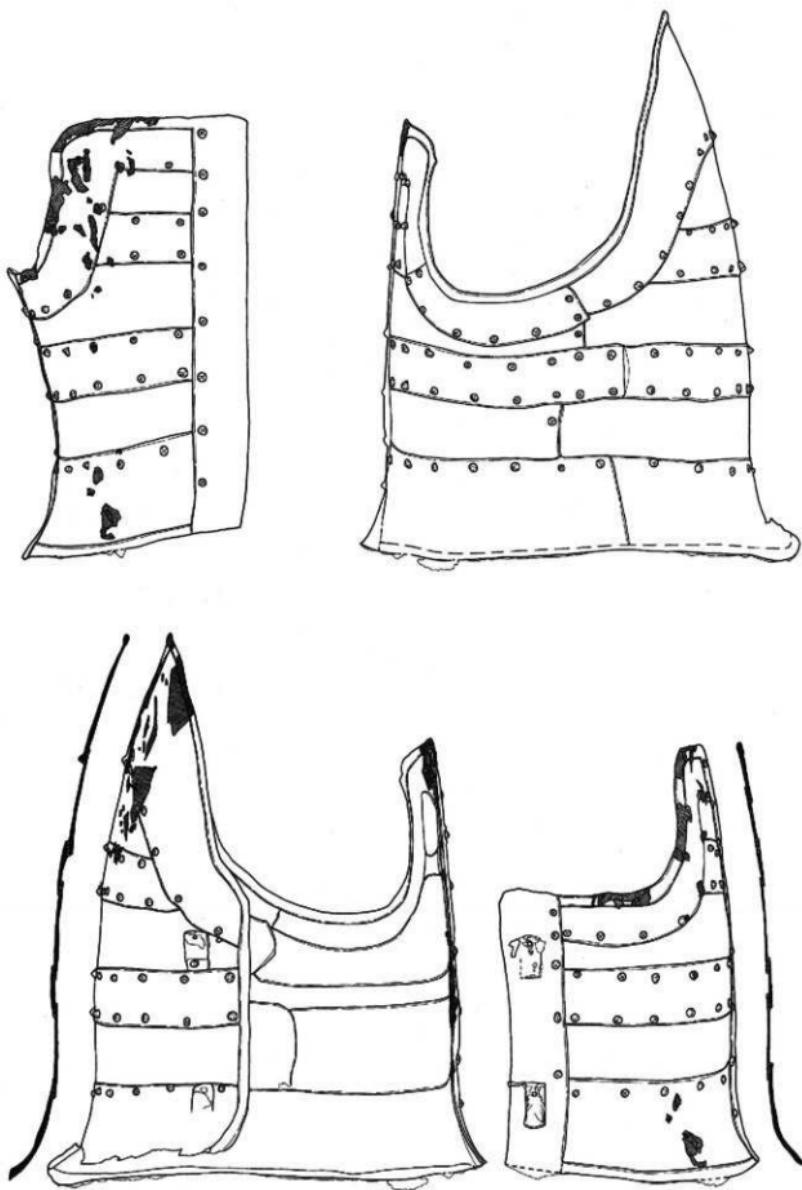
第100図 ST-58・60~62 出土遺物実測図 628~633:ST-58, 634~637:ST-60, 638~647:ST-61, 648~653:ST-62



0
10cm

654

第101図 ST-62出土 横矧板鉢留短甲実測図（その1）



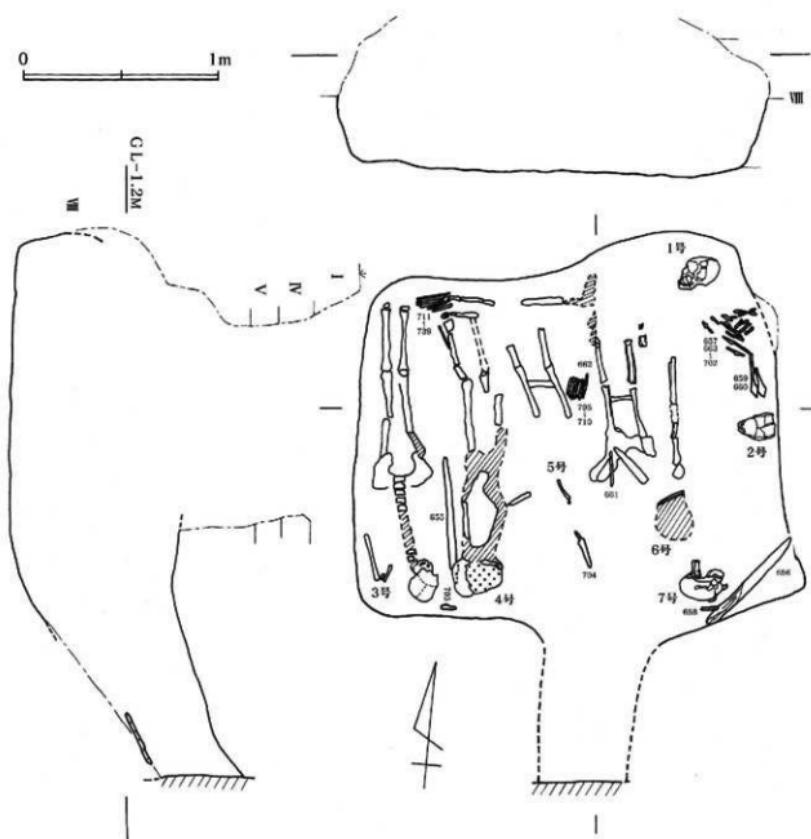
第102図 ST-62出土 横矧板銛留短甲実測図（その2）

号人骨との間には鉄錐の茎部が検出された。

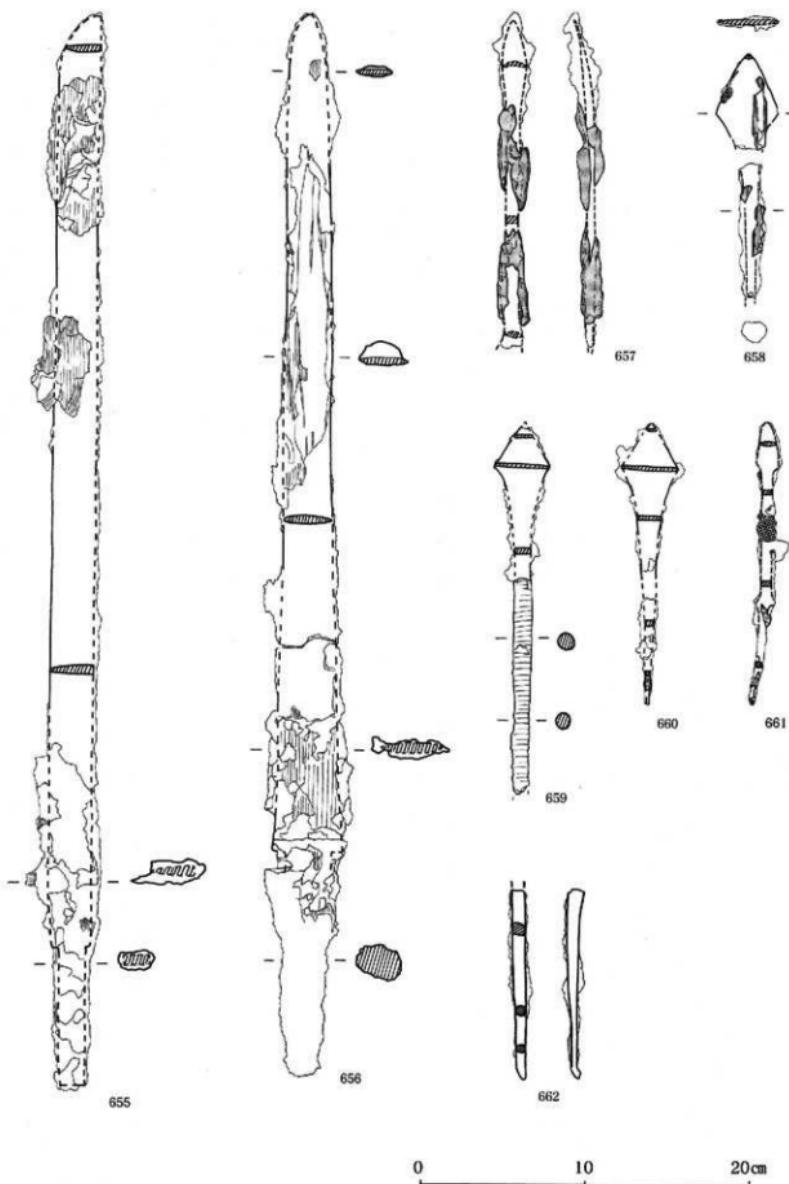
ST-66 (第112図)

分布域の北東部に位置し、主軸を北にとる狭門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、板石で閉塞している。狭道は長さ0.54m、幅0.48~0.60mを測る。

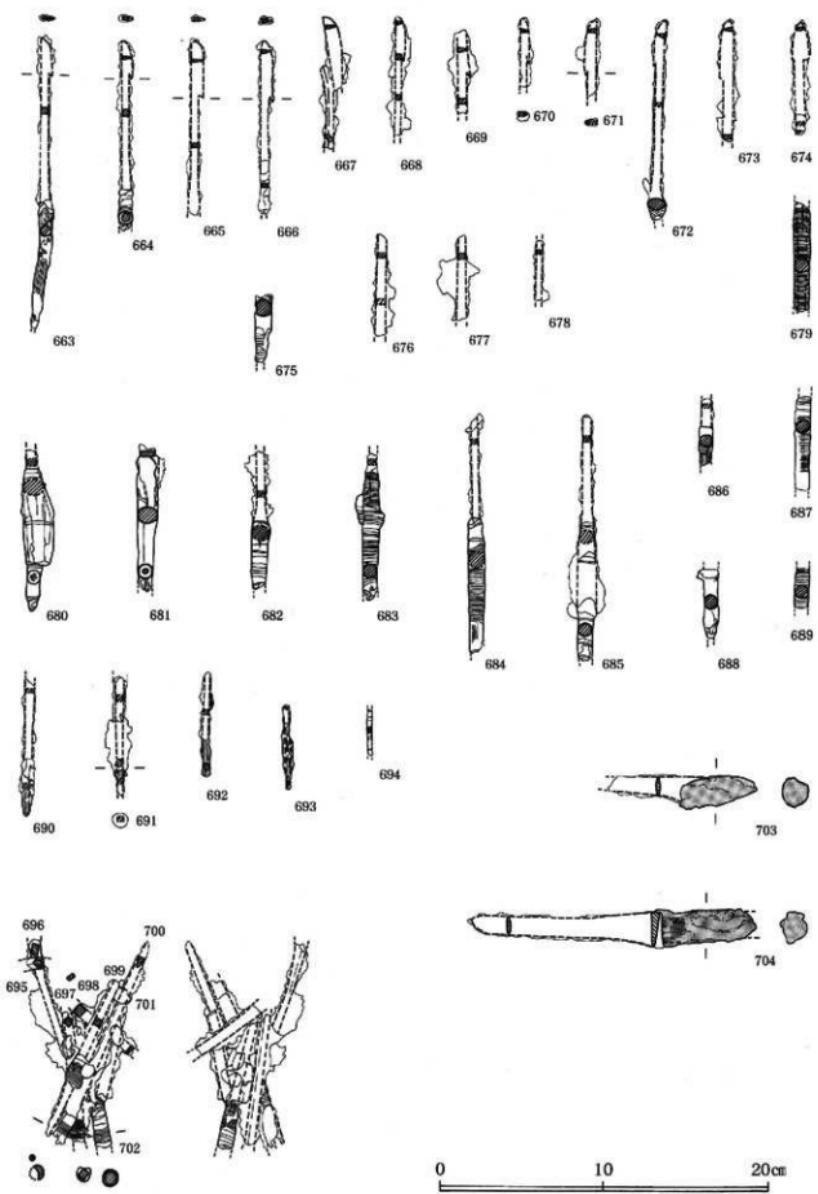
玄室は平入り両袖隅丸長方形を呈し、天井は寄せ棟タイプである。幅は1.64~1.86mで奥壁がやや狭く、奥行きは1.44mを測る。被葬者は南東頭位・性別不詳の2体で、1号人骨の右足外方に刀子の柄部かと思われる破片(817)が副葬されている。1号人骨が主軸に斜向して埋葬されたため、2号人骨も並行したものと思われる。



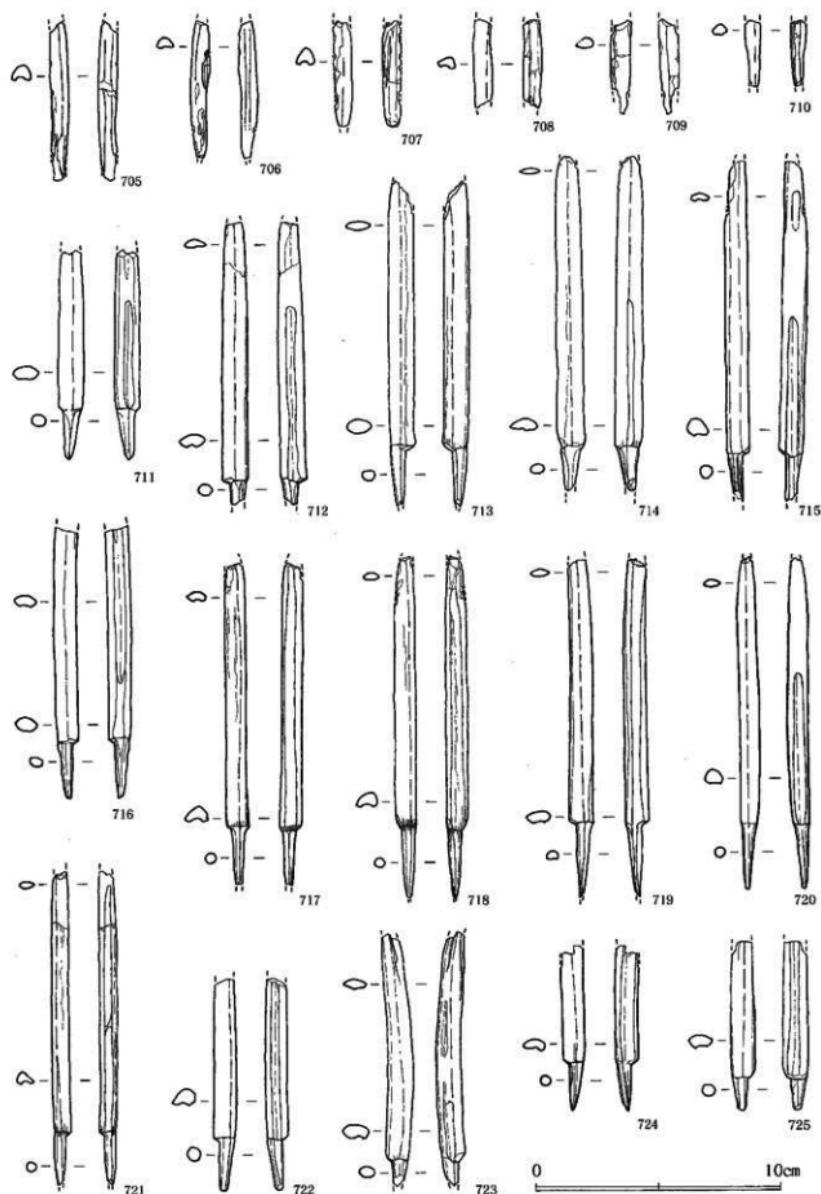
第103図 ST-63 遺構実測図



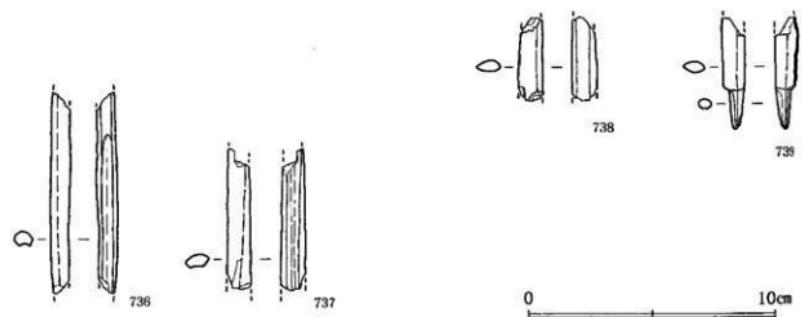
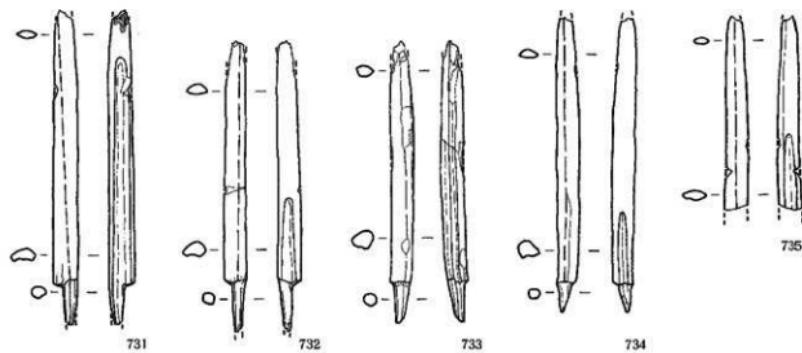
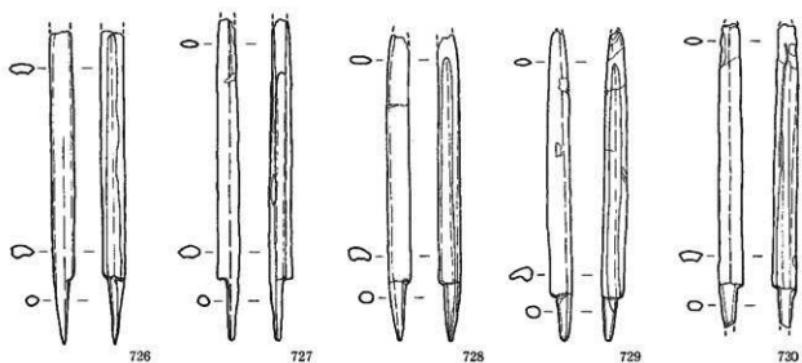
第104図 ST-63 出土遺物実測図(1)



第105図 ST-63 出土遺物実測図 (2)



第106図 ST-63出土 骨縫実測図(1)



0 10cm

第107図 ST-63出土 骨針実測図(2)

ST-67 (第113図)

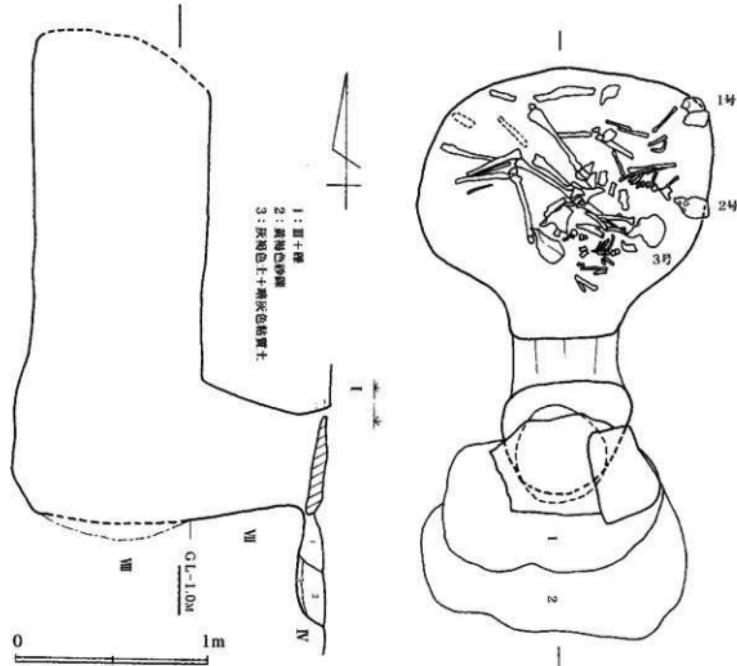
分布域の中央東寄りに位置し、主軸を東にとる羨門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、羨門をIV層主体のブロックで閉塞している。羨道は長さ0.52m以上、幅0.56~0.75m、高さ1.12mを測る。

玄室は平入り両袖隅丸台形を呈し、天井は寄せ棟タイプである。幅は1.32~1.86m、奥行き1.60mを測る。人骨は遺存していないが、西南部に刀子1本(818)が、北西部に鉈を東に向かって鉄刀1振(819)が副葬されており、玄室の形状から、少なくとも被葬者は2体で南頭位であろうことが推定される。

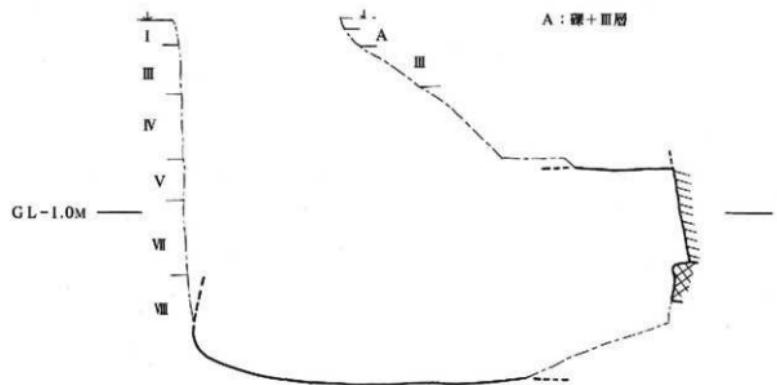
ST-68 (第114図)

分布域の中央やや北側に位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。豊坑は未調査であるが、小さめの板石で閉塞している。羨道は長さ0.90m、幅0.64~0.73m、高さ0.80m内外を測る。

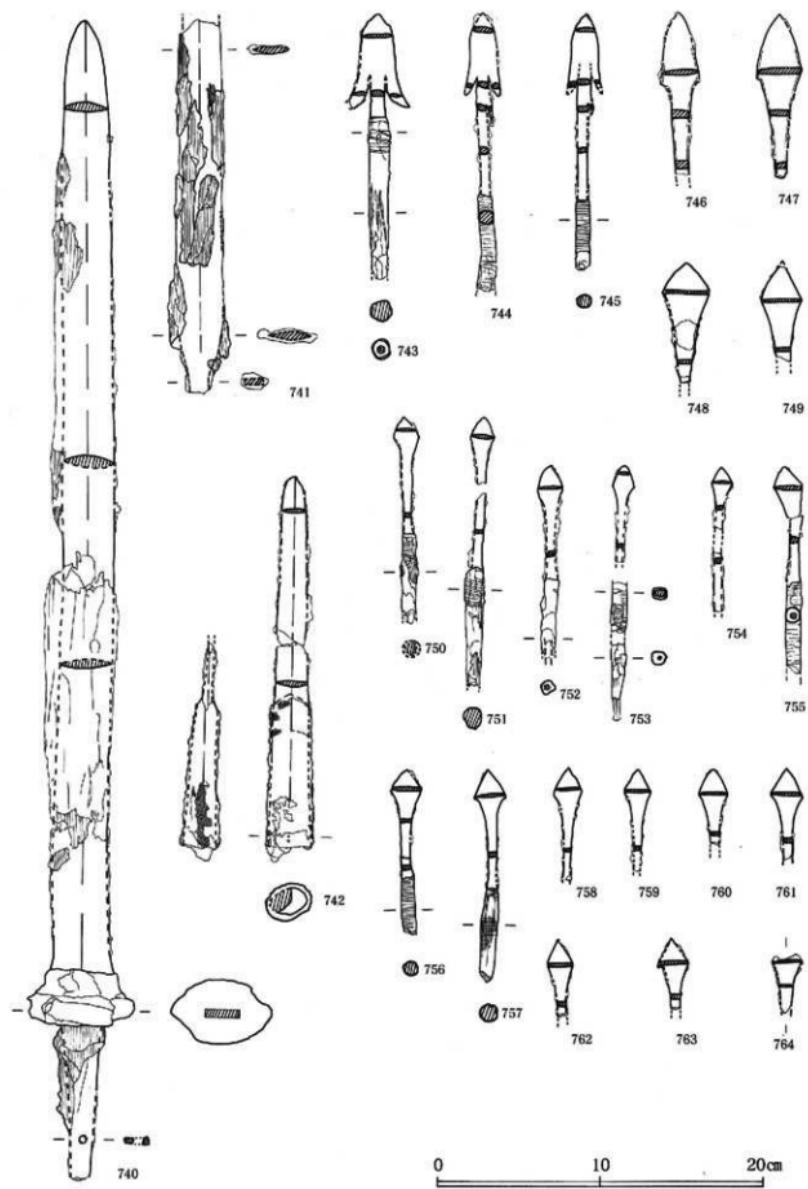
玄室は平入り両袖半円形を呈し、奥壁はやや平坦である。奥行きは1.90m、最大幅は3.26mを測り、現時点では最も幅広い墳墓である。被葬者は南頭位で頭部に赤色顔料が塗布された男性1体で、



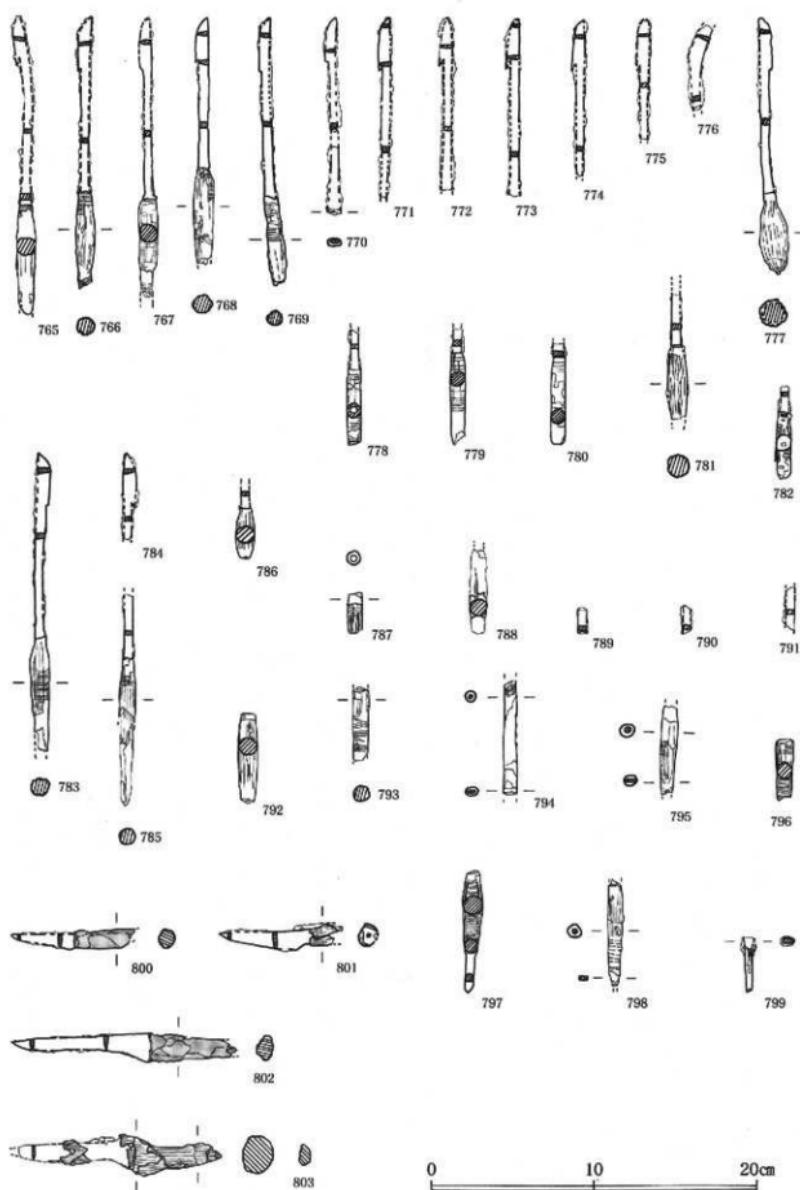
第108図 ST-64 遺構実測図



第109図 ST-65 遺構実測図



第110図 ST-65 出土遺物実測図(1)

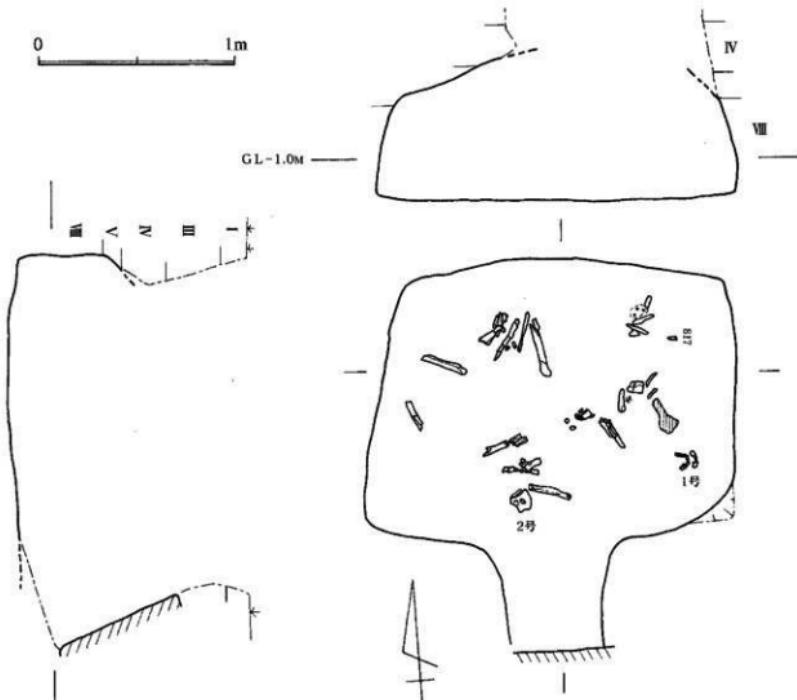


第111図 ST-65 出土遺物実測図(2)

左側壁沿いに埋葬されている。頭部右横には、頭を隠すように板石が南壁に埋め込まれている。左腕横には、鉈を足先に向かって鉄剣1振(821)が、腰部右横には半頭鐵1本(820)が副葬されている。残りのスペースには埋葬された形跡は無く、追葬時に豊坑の目印が発見できずに初葬で停止してしまったか、追葬時には墓落も廢絶して墓制が変化したかいずれかが要因であろうか、副葬品からみると、前者の理由である可能性が高いと思われる。

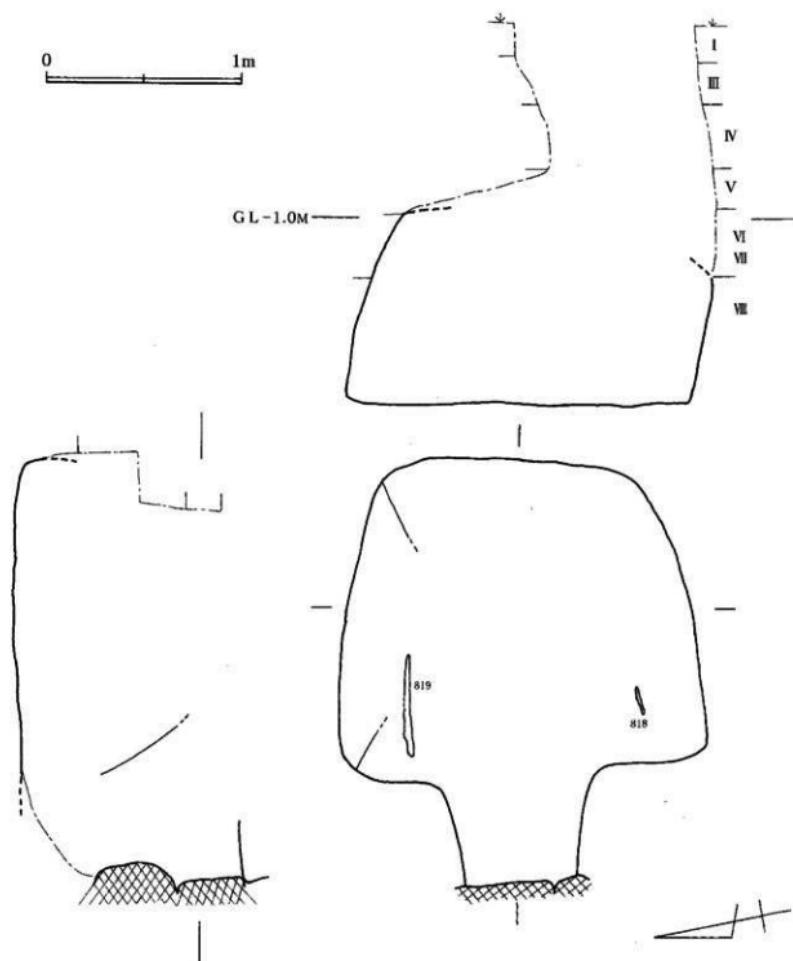
ST-69 (図版64) (鹿児島大学による第1次学術調査、以下ST-75まで)

分布域の中央部に位置し、主軸をやや東寄りにとる、羨門閉塞タイプである。詳細は報告されて⁽⁵⁾いるので概略にとどめる。豊坑の南壁にはステップが3ヶ所確認され、断面観察によって追葬も立証された。玄室は平入り両袖隅丸方形タイプを呈し、天井はドーム型に近い。幅は1.95m内外、奥行き1.90m内外、高さ1.0m内外を測る。被葬者は顔面に赤色顔料を塗布した東頭位2体で、1号人骨(男性)の頭部には鉄剣1振が、腰~大腿部右横には脇挾三角形鐵2本が副葬されていた。2号人骨(女性)には副葬品は無いが、S字結腸から外方にかけての費石が検出された。分析の結果

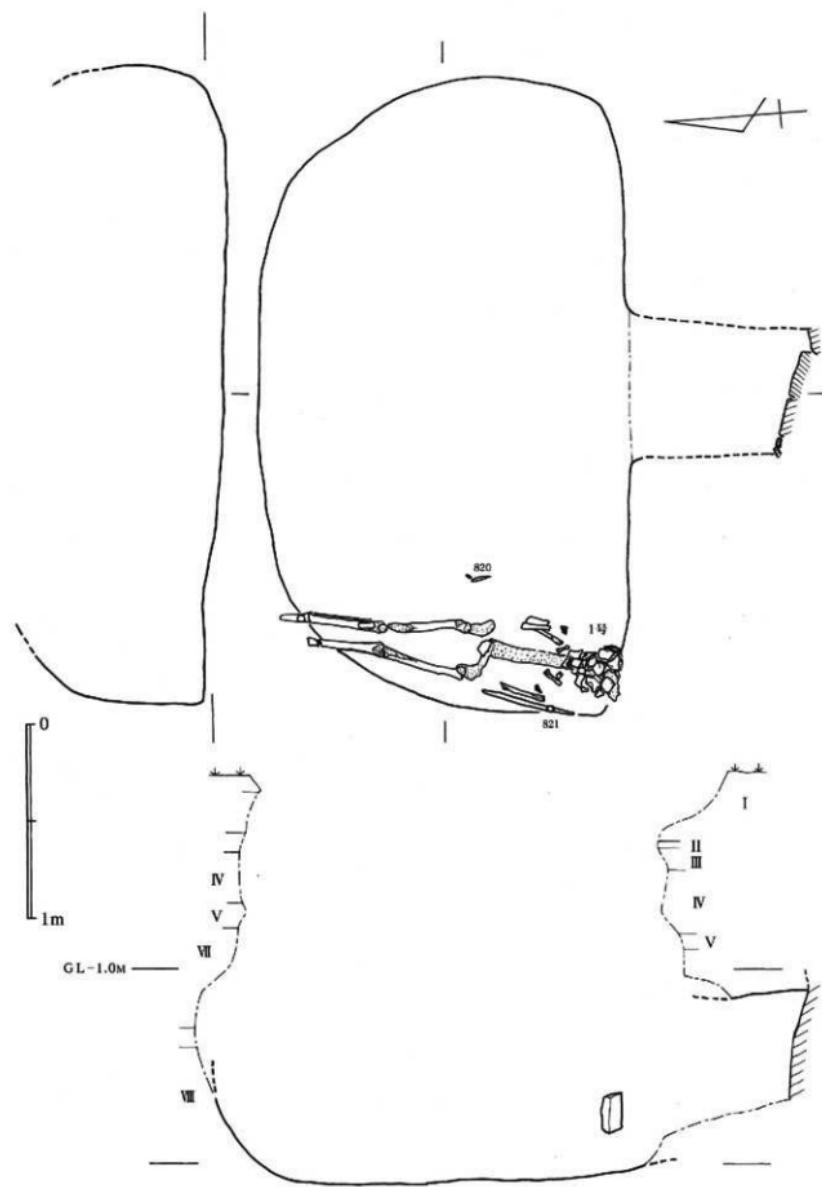


第112図 ST-66 遺構実測図

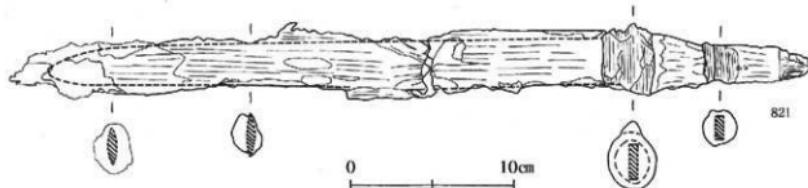
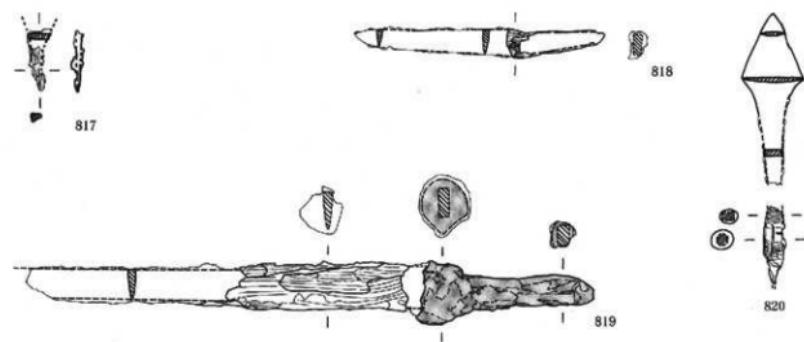
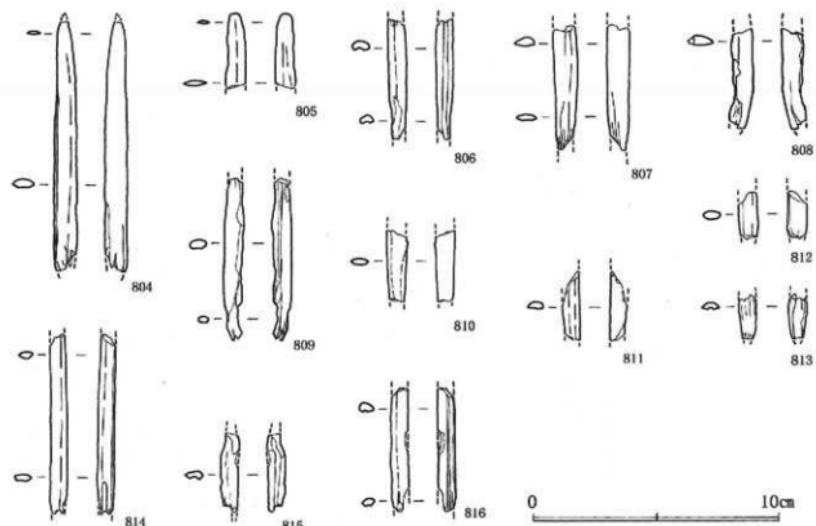
果では寄生虫卵および明らかな消化残滓は検出されなかつたが、アブラナ科・イネ科・アカザ科・ヒュ科・ヨモギ属ほか樹木の花粉が多く検出され、タンポボ亜科の花粉も検出されたことから、被葬者は春に死亡した可能性が提示された。また、2号人骨胸部から1号人骨寄りにかけて1握りの種子が検出された。分析の結果、ツユクサと鑑定され、再生祈願（振り撒いた状態なので来世での供物ではない）の表れであると思われる。



第113図 ST-67 遺構実測図



第114図 ST-68 遺構実測図



第115図 ST-65出土 骨器実測図, ST-66~68 出土遺物実測図

817:ST-66, 818-819:ST-67,
820-821:ST-68

S T - 7 0

主軸を北東にとる羨門閉塞タイプである。羨門は板石で閉塞されている。玄室は平入り両袖隅丸台形を呈し、天井はドーム型である。幅は1.50~2.15mで手前が広く、奥行きは1.70m内外、高さ0.70mを測る。被葬者は3体で、右側壁沿いの若干凹められた屍床に向き合った幼児と小児が埋葬され、幼児には長頸罐4本と刀子1本が、小児には刀子1本が副葬されていた。玄室のやや中央寄りには、熟~老年の女性が南頭位で埋葬されていた。

S T - 7 1 ~ 7 4

堅坑を検出したのみであるが、その形状から主軸を北北東にとる羨門閉塞タイプと思われる。

S T - 7 5

上記と同様であるが、主軸は北である。

S T - 7 6 (図版65) (鹿児島大学による第2次学術調査、S T - 79までとS T - 10)

中央部北西寄りに位置し、主軸をやや東寄りにとる羨門閉塞タイプである。羨門は板石で閉塞され、「板」閉塞用の溝穴もある。玄室は平入り両袖方形~台形を呈し、幅2.10m、奥行き1.70m内外を測る。人骨は遺存していないが、北東隅に横矧板銛留短甲1領を、南東隅に鉄刀1振と三角板革綴衝角付冑1鉢が副葬されているほか、鉄鎌17本が出上。被葬者は3体で、初葬は板閉塞と思われる。

S T - 7 7

主軸を北にとる羨門閉塞タイプで、板石による閉塞である。玄室は平入り両袖長方形~台形を呈し、幅2.1~2.7m、奥行き2mを測る。被葬者は南頭位4体で、鉄刀1振、鉄剣1振、鉄鎌22本、刀子1本が副葬されている。

S T - 7 8

主軸を東にとる退化形態で、板閉塞である。玄室は平入り両袖長方形~梢円形を呈する。玄室の幅は1.1m、奥行き0.50m、高さ0.30m内外を測る。

S T - 7 9

上記と同様のタイプで、アカホヤ塊による閉塞であり、主軸を北にとる。玄室は平入り両袖梢円形を呈し、幅1.1m、奥行き0.30m、高さ0.25m内外を測る。

S T - 1 0

当初は80号としたが、玄室が人為的に埋められていたこと、遺物も皆無に等しいことから、既に通番が付されている10号墓であると断定した。当墳墓は昭和54年に調査され、金銅製胡・金具や鉄剣、鉢、刀子2本のほか、圭頭鏡1本、長頭鏡13本が被葬者2~3体に副葬されていた。

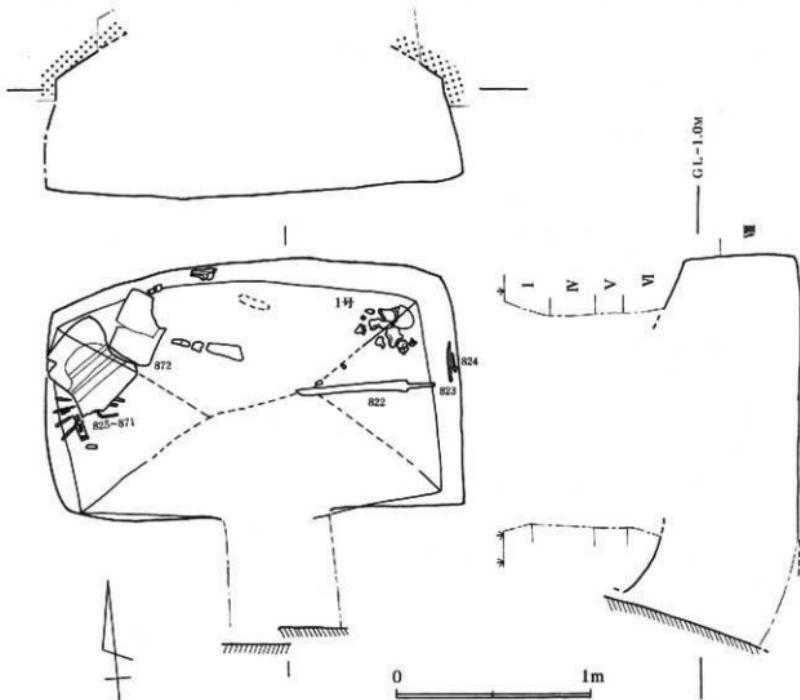
ST-80

分布域の北東部に位置する。堅坑は未発見であるが、玄室崩落と思われるプランを検出した。

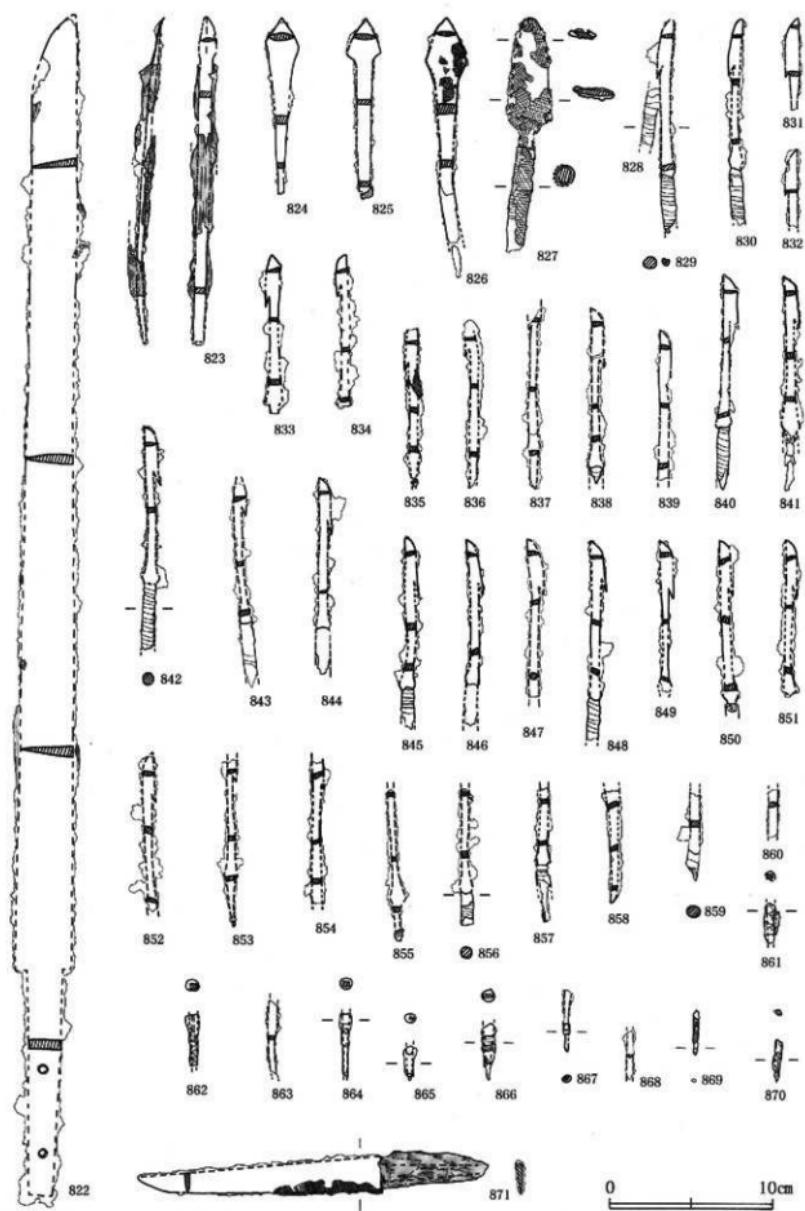
ST-81 (第116図)

分布域の北東寄りに位置し、主軸を北にとる羨門閉塞タイプである。堅坑は未調査であるが、板石で閉塞されている。狭道は長さ0.64m内外、幅0.4m内外、高さ0.70mを測る。

玄室は平入り両袖長方形を呈し、天井は寄せ棟タイプである。幅は2.02~2.14m、奥行き1.27mを測り、壁面上半分（礫層上面まで）に赤色顔料が塗布されている。被葬者は東頭位の男性1体で、頭部左外方に圭頭鏡1本(824)と鉢1本(823)、上腕左側に鉢を足先に向かた鉄刀1振(822)が、足先左側には後嗣を玄室内に斜めに立て、右前胸蝶番が腐蝕して倒れた状態の横矧板鉢留短甲1領



第116図 ST-81 遺構実測図



第117図 ST-81 出土遺物実測図